埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第45集

上中条中島遺跡Ⅱ
諏訪木遺跡Ⅶ
上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅸ－

２０２３

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第45集

上中条中島遺跡Ⅱ
諏訪訪木遺跡Ⅶ
上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅸ－

２０２３

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する２大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、平成 29 年度に実施された上中条中島遺跡、平成 31 年度及び令和２年度に実施された上前原遺跡、令和２年度に実施された諏訪木遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和５年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　　言

1　本書は、市内遺跡Ⅸ「上中条中島遺跡Ⅱ、諏訪木遺跡Ⅶ、上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ」の発掘調査報告書である。

上中条中島遺跡	埼玉県熊谷市上中条字中島 463 番 1 所在	（埼玉県遺跡番号 59 － 042）
諏訪木遺跡	埼玉県熊谷市上之字秋葉 2885 番 4 所在	（埼玉県遺跡番号 59 － 016）
上前原遺跡	埼玉県熊谷市千代字萩山南 114 番 1、4 所在	（埼玉県遺跡番号 65 － 022）
	埼玉県熊谷市千代字萩山南 114 番 6 所在	（埼玉県遺跡番号 65 － 022）

2　本調査は、全て個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。いずれも市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、各調査の「発掘調査の概要」のとおりである。

4　発掘調査期間は、上中条中島遺跡が平成 29 年４月 17 日～５月 26 日、諏訪木遺跡が令和２年６月 23 日～８月 11 日、上前原遺跡の３か所が平成 31 年４月 26 日～６月 25 日及び令和２年９月４日～10 月 16 日である。整理・報告書作成期間は、令和４年４月１日～令和５年３月 24 日である。

5　発掘調査の担当は、上中条中島遺跡を熊谷市教育委員会新井端（調査当時）が、諏訪木遺跡及び上前原遺跡を大野美知子が、それぞれ担当した。

　また、整理・報告書作成は、上中条中島遺跡を熊谷市教育委員会中山浩彦が担当し、諏訪木遺跡及び上前原遺跡を発掘調査を担当した大野が担当し、第Ⅰ章及び全体の編集について大野が担当した。なお、全体について、大野が統括監修した。

6　本書の執筆は、整理・報告書を担当した中山及び大野が第Ⅱ章を、大野が第Ⅰ章、第Ⅲ章及び第Ⅳ章を分担して行った。なお、体裁や語句については、編集を担当した大野が全体を通して極力統一を図った。

7　写真撮影は、発掘調査を各々の担当者が行い、遺物については大野が行った。

8　各発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。また、出土遺物実測にあたっては、その一部を株式会社シン技術コンサルに委託した。

9　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

10　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。

梶ケ山真理（独立行政法人国立科学博物館）　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県教育局市町村支援文化資源課　島村範久　菅谷浩之　茂原信生（京都大学名誉教授）　山川守男

凡　例

1　本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。

ＳＤ…溝跡　ＳＩ…竪穴建物跡　ＳＫ…土坑　ＳＳ…集石土坑　　Ｐ…ピット

2　土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。

Ｓ…川原石　Ｐ…土器

3　遺構挿図の縮尺は、原則として１／60 であるが、それ以外のものは個別に示した。

4　遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。

5　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、原則として同一図版の標高は統一し、Ａポイントに表記した。

6　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・灰釉陶器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・土製品・石器・石製品…１／４

土錘・羽口・鉄製品…１／２

7　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。

須恵器のうち還元焔焼成の断面：黒塗り、酸化焔焼成の断面：白抜き、灰釉陶器の断面：

上記以外の土師器等土器断面：白抜き

釉薬のうち灰釉：　鉄釉：　錆釉：　赤彩：

底部調整　回転ヘラ削り　回転糸切り　回転ナデ

8　遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

9　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cm、ｇである。また、推定値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

Ａ…白色粒子　Ｂ…黒色粒子　Ｃ…赤色粒子　Ｄ…褐色粒子　Ｅ…赤褐色粒子　Ｆ…白色針状物質

Ｇ…長石　Ｈ…石英　Ｉ…白雲母　Ｊ…黒雲母　Ｋ…角閃石　Ｌ…片岩　Ｍ…砂粒　Ｎ…礫　Ｏ…金雲母

焼成は、次のように区分した。

Ａ…良好　Ｂ…普通　Ｃ…不良

10　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

11　土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1
Ⅱ　上中条中島遺跡の調査 ……13
　1　発掘調査の概要 ……13
　2　遺跡の概要 ……15
　3　遺構と遺物 ……17
　4　調査のまとめ ……29
Ⅲ　諏訪木遺跡の調査 ……35
　1　発掘調査の概要 ……35
　2　遺跡の概要 ……38
　3　遺構と遺物 ……40
　4　調査のまとめ ……55
Ⅳ　上前原遺跡の調査 ……59
　1　発掘調査の概要 ……59
　2　遺跡の概要 ……62
　3　遺構と遺物 ……65
　4　調査のまとめ ……102

挿　図　目　次

第１図　埼玉県の地形図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図…… 4
第３図　上中条中島遺跡調査地点位置図……16
第４図　上中条中島遺跡調査区全測図……18
第５図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡……18
第６図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡遺物出土状況……19
第７図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡小鍛冶跡……20
第８図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (1)……21
第９図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (2)……22
第 10 図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (3)……23
第 11 図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (4)……24
第 12 図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (5)……25
第 13 図　上中条中島遺跡第２・３号竪穴建物跡……28
第 14 図　上中条中島遺跡第４・５号竪穴建物跡……29
第 15 図　上中条中島遺跡第２～５号竪穴建物、遺構外跡出土遺物……30
第 16 図　諏訪木遺跡調査地点位置図……37

第 17 図　諏訪木遺跡調査区全測図 38
第 18 図　諏訪木遺跡第１～３号土坑 39
第 19 図　諏訪木遺跡第１・２号土坑出土遺物 40
第 20 図　諏訪木遺跡第１・３・４号溝跡 41
第 21 図　諏訪木遺跡第２・５号溝跡 42
第 22 図　諏訪木遺跡第１号溝跡出土遺物 (1) 43
第 23 図　諏訪木遺跡第１号溝跡出土遺物 (2) 44
第 24 図　諏訪木遺跡第２～５号溝跡出土遺物 45
第 25 図　諏訪木遺跡第１～５号ピット 47
第 26 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (1) 49
第 27 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (2) 50
第 28 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (3) 51
第 29 図　上前原遺跡調査地点位置図 62
第 30 図　上前原遺跡第６次調査Ａ・Ｂ区、第７次調査位置図 63
第 31 図　上前原遺跡第６次調査 A 区全測図 63
第 32 図　上前原遺跡第６次調査 A 区第１～３号土坑 64
第 33 図　上前原遺跡第６次調査 A 区第１～ 10 号ピット 65
第 34 図　上前原遺跡第６次調査 A 区第１・２号土坑、第１・２号ピット出土遺物 66
第 35 図　上前原遺跡第６次調査 A 区遺構外出土遺物 (1) 67
第 36 図　上前原遺跡第６次調査 A 区遺構外出土遺物 (2) 68
第 37 図　上前原遺跡第６次調査 B 区全測図 71
第 38 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号竪穴建物跡 72
第 39 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号竪穴建物跡出土遺物 (1) 73
第 40 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号竪穴建物跡出土遺物 (2) 74
第 41 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～３号土坑 76
第 42 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～３号土坑出土遺物 76
第 43 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号溝跡 78
第 44 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号溝跡出土遺物 79
第 45 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号埋甕 80
第 46 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号埋甕出土遺物 80
第 47 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～ 10 号ピット 81
第 48 図　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～４・９号ピット出土遺物 82
第 49 図　上前原遺跡第６次調査 B 区遺構外出土遺物 (1) 83
第 50 図　上前原遺跡第６次調査 B 区遺構外出土遺物 (2) 84
第 51 図　上前原遺跡第７次調査全測図 88
第 52 図　上前原遺跡第７次調査第１号竪穴建物跡 (1) 89

第 53 図　上前原遺跡第７次調査第１号竪穴建物跡 (2)・・・90
第 54 図　上前原遺跡第７次調査第１号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第 55 図　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑・・92
第 56 図　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
第 57 図　上前原遺跡第７次調査第１号集石土坑・・93
第 58 図　上前原遺跡第７次調査第１号集石土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
第 59 図　上前原遺跡第７次調査第１～ 15 号ピット・・・95
第 60 図　上前原遺跡第７次調査第 16 ～ 27 号ピット・・96
第 61 図　上前原遺跡第７次調査第１・３・６・８・11 ～13・15・17・20 ～27 号ピット出土遺物・・・97
第 62 図　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物 (1)・・99
第 63 図　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表・・・５
第２表　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第３表　上中条中島遺跡第２～５号竪穴建物跡、遺構外出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第４表　諏訪木遺跡遺構番号新旧対照表・・・36
第５表　諏訪木遺跡第１・２号土坑出土遺物観察表・・40
第６表　諏訪木遺跡第１～５号溝跡出土遺物観察表・・・45
第７表　諏訪木遺跡ピット一覧表・・・47
第８表　諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表・・・51
第９表　上前原遺跡第６次調査 B 区遺構番号新旧対照表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第 10 表　上前原遺跡第６次調査 A 区ピット一覧表 ・・66
第 11 表　上前原遺跡第６次調査 A 区第１・２号土坑、第１・２号ピット出土遺物観察表 ・・・・・・・66
第 12 表　上前原遺跡第６次調査 A 区遺構外出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第 13 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号竪穴建物跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第 14 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～３号土坑出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第 15 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号溝跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第 16 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１号埋甕出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第 17 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～ 10 号ピット一覧察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第 18 表　上前原遺跡第６次調査 B 区第１～４・９号ピット出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第 19 表　上前原遺跡第６次調査 B 区遺構外出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第 20 表　上前原遺跡第７次調査遺構番号新旧対照表・・87
第 21 表　上前原遺跡第７次調査第１号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第 22 表　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第 23 表　上前原遺跡第７次調査第１号集石土坑出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

第 24 表　上前原遺跡第７次調査ピット一覧表・・・96
第 25 表　上前原遺跡第７次調査第１・３・６・８・11～13・15・17・20～27号ピット出土遺物観察表・・98
第 26 表　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

図　版　目　次

図版 １　上中条中島遺跡　調査区全景（東から）
上中条中島遺跡　調査区全景（南から）
図版 ２　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡（北から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡上層遺物出土状況（北から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況１（南から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況２（北から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況３（東から）
図版 ３　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡小鍛冶跡検出状況１（東から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡小鍛冶跡検出状況２（北から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡小鍛冶跡遺物出土状況（東から）
上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡小鍛冶跡掘り方（東から）
上中条中島遺跡　第２号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）
上中条中島遺跡　第４号竪穴建物跡遺物出土状況１（北から）
上中条中島遺跡　第４号竪穴建物跡遺物出土状況２（北から）
上中条中島遺跡　第５号竪穴建物跡（東から）
図版 ４　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡　第８図３、４、７～ 11
図版 ５　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡　第８図１、２、５、６
第９図 12 ～ 17
第 10 図 19 ～ 22、25、28、29、34
第 11 図 54
図版 ６　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡　第 10 図 18、23、24、26、27、31 ～ 33、
35 ～ 39
図版 ７　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡　第 11 図 40 ～ 53
図版 ８　上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡　第 11 図 55 ～ 65
上中条中島遺跡　第２号竪穴建物跡　第 15 図２－１～４、３－２、４－１～６、
５－１、外－１、２
図版 ９　諏訪木遺跡　調査区全景（東から）
諏訪木遺跡　第１・３・４号溝跡（東から）
諏訪木遺跡　第２号溝跡（北から）
諏訪木遺跡　第１号溝跡馬歯出土状況（東から）
図版 １０　諏訪木遺跡　第１・２号土坑　第 19 図１－１～３、２－１～４
諏訪木遺跡　第１号溝跡　第 22 図１－１～ 30
諏訪木遺跡　第２～５号溝跡　第 24 図２－１～４、３－１、２、

４－１～11、５－１

図版 11　諏訪木遺跡　遺構外　第 26 図１～ 23、26 ～ 28、31、32、34、36 ～ 38、41 ～ 43、
第 27 図 44 ～ 47、49、51、52、54 ～ 56、59、61

図版 12　諏訪木遺跡　遺構外　第 26 図 22、24、25、29、30、39、40、48、
第 27 図 50、53、57、58、60、
第 28 図 63 ～ 65

図版 13　上前原遺跡第６次調査Ａ区　調査区全景（南東から）
上前原遺跡第６次調査Ａ区　第１号土坑出土状況（北から）
上前原遺跡第６次調査Ａ区　第１号土坑出土状況（南から）

図版 14　上前原遺跡第６次調査Ｂ区　調査区全景（南西から）
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡遺物出土状況（北西から）
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号埋甕遺物出土状況（南西から）

図版 15　上前原遺跡第７次調査　調査区全景（南から）
上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡（東から）
上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡炉跡検出状況（東から）
上前原遺跡第７次調査　第１号集石土坑（東から）

図版 16　上前原遺跡第６次調査Ａ区　第１号土坑　第 34 図ＳＫ１－１
上前原遺跡第６次調査Ａ区　第２号土坑、第１・２号ピット　第 34 図ＳＫ２－１、
Ｐ１－１、２、
Ｐ２－１、２
上前原遺跡第６次調査Ａ区　遺構外　第 35 図１～ 30、32 ～ 41、43 ～ 53、
第 36 図 54 ～ 57

図版 17　上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡　第 39 図１、２、４～ 20、
第 40 図 22 ～ 27

図版 18　上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡　第 40 図 28 ～ 33
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１・２号土坑　第 43 図１－１～２－６
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号溝跡　第 44 図１～ 14
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号埋甕　第 46 図１
第 46 図２～６

図版 19　上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１～４、９号ピット　第 48 図１－１～９
上前原遺跡第６次調査Ｂ区　遺構外　第 49 図１～ 49
第 50 図 50 ～ 52、54 ～ 70

図版 20　上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡　第 54 図１～ 11
上前原遺跡第７次調査　第１号集石土坑　第 55 図１～７
上前原遺跡第７次調査　第１・２号土坑　第 56 図１－１～２－９
上前原遺跡第７次調査　第１・３・６・８・11 ～ 13・15・17・20 ～ 27 号ピット
第 61 図１－１～ 27 －２

図版 21　上前原遺跡第７次調査　遺構外　第 62 図１～ 57
第 63 図 58 ～ 66

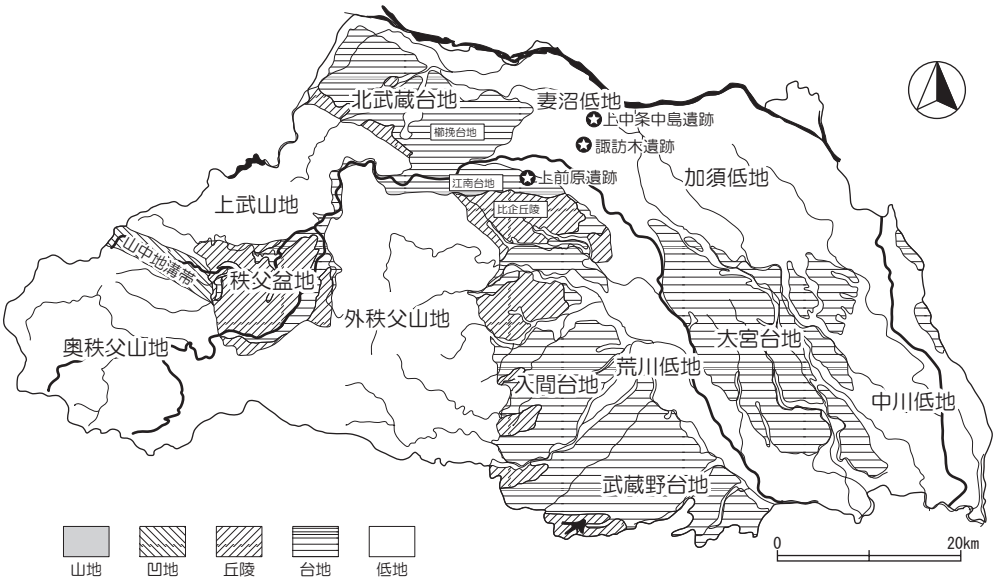
Ⅰ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成 17 年及び平成 19 年の二度に亘る合併によりを経て平成 19 年当時県北初の 20 万都市となり、平成 21 年４月から「特例市」として現在に至っている。しかし、近年は人口減少が見られ、現在の人口は 20 万人をやや下回っている。令和２年の国勢調査当時の人口は 192,535 人であり、埼玉県で９番目、県北では最大の人口を有する都市である。また、市域は南北に約 20 ㎞、東西に約 14 ㎞と広大であり、面積は 159.82 ㎢である。

市域の北側には群馬県との境に利根川が、南側には大里地区（旧大里町）及び江南地区（旧江南町）との境を荒川が、それぞれ西から南東へと流れており、この関東地方の２大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市域の西側に櫛挽台地があり、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側及び東側には妻沼低地が広がっている。また、荒川以北の櫛挽台地の東側には、新期荒川扇状地がある。このように、市域内の地形は丘陵・台地・低地と変化に富み、太古の昔から人々が生活の場としてきた歴史ある地域である（第１図）。

櫛挽台地は、更新世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、西部の寄居町波久礼付近を扇頂として、東の扇端は、市内三ヶ尻付近からＪＲ高崎線籠原駅付近を通り北東へ、そして、籠原駅から北へ約２㎞の西別府付近まで延びている。市域内にある南東側の低い面は寄居面と呼ばれ、今から２～５万年前の立川期に形成されたものである。台地の標高は約 36 ～ 54 ｍを測り、新期荒川扇状地から妻沼低地へ向かって緩やかに下る。荒川に面した台地南東端には、第３紀層の残丘であり独立丘陵である標高 81 ｍの観音山があり、台地との比高差は約 25 ｍ、沖積低地である新期荒川扇状地との比高差は約 35 ｍを測る。

妻沼低地は、新期荒川扇状地と下流に形成された微高地である自然堤防や微低地である後背湿地の地帯に分けることができ、櫛挽台地の東側に広がる完新世に荒川の乱流により形成された新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として、東は市内上之～小曽根・肥塚付近、北は上



第１図　埼玉県の地形図

奈良・下奈良付近へと扇状に広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

一方、荒川右岸には、櫛挽台地と同様に更新世に形成された外秩父山地に沿った台地群があり、市域内には北から、荒川と江南台地に挟まれた立川期段丘面、江南台地がある。立川期段丘面は、寄居面の連続と考えられるもので、江南台地の北側に連続してあり、周囲の沖積低地との比高差は１m以下である。江南台地は、幅約２㎞ほどの東西に細長い台地であり、台地面の標高は西部の寄居町立原付近で 140 m、東へと徐々に低くなり、東端の市内楊井付近で 45 mとなっている。この江南台地の南には、和田川を挟んで、西の外秩父山地から半島状に突き出した形の比企丘陵があり、丘陵内には開析が進んだ標高 70 ～ 90 mの山が連なっている。

今回報告する遺跡は、上中条中島遺跡（１）、諏訪木遺跡（21）、上前原遺跡（47）である。

上中条中島遺跡は、市内北東部の中央寄り利根川右岸、標高約 22 mの妻沼低地の微高地上に立地する遺跡である。ＪＲ高崎線熊谷駅からは北へ約 4.2 ㎞、利根川の南約３㎞、荒川の北 4.5 ㎞の距離にある。

諏訪木遺跡は、市内東部、荒川左岸に広がる新期荒川扇状地と妻沼低地が接する旧河道によって形成された標高 23 ～ 24 mを測る自然堤防上に立地する遺跡である。ＪＲ高崎線熊谷駅からは北東へ約 2.0 ㎞の距離にある。

では、周辺の歴史的環境について概観する（第２図、第１表）。

旧石器時代から縄文時代までの遺跡は、市内西部及び荒川右岸に多くみられ、地形的には櫛挽台地及び台地直下の妻沼低地に集中する。旧石器時代については、櫛挽台地東端に立地する籠原裏遺跡（35）から出土した黒耀石の尖頭器のほか、荒川右岸の江南台地に立地する鹿嶋遺跡（地図未掲載）、本田・東台遺跡（地図未掲載）、萩山遺跡（48）、向原遺跡（地図未掲載）、宮下遺跡（45）、塩西遺跡（地図未掲載）（いずれも地図未掲載）においてナイフ形石器が、同じく江南台地の寺内遺跡、上前原遺跡、天神遺跡（地図未掲載）、山神遺跡（地図未掲載）、宮下遺跡、千代西原遺跡（いずれも地図未掲載）において槍先形尖頭器が出土している。また、上前原遺跡からは非北方系の細石刃核が出土し、深谷市（旧川本町）に北方系細石刃を出土した白草遺跡（地図未掲載）が所在する。

縄文時代については、草創期は萩山遺跡で有舌尖頭器や爪型文土器が出土している。

早期の遺跡は、江南台地東部に多く見られ、県内有数の集落跡の萩山遺跡ではスタンプ型石器が 200 点以上、船川遺跡（地図未掲載）では竹之内式と呼称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との共伴関係が確認されている。他には、鹿島遺跡（地図未掲載）、野原宮脇遺跡（地図未掲載）、南方遺跡（地図未掲載）において撚糸文期後半の竪穴住居跡が検出されている。

続いて、前期は次第に遺跡数が増え始め、荒川を挟んで江南台地の対岸である櫛挽台地の三ヶ尻遺跡（地図未掲載）において集落跡が確認されている。江南台地のおいては、人々の生活痕跡は西部に移り、富士山遺跡（地図未掲載）において諸磯式期の竪穴住居跡を３軒検出するのみである。

中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利Ｅ式期の遺跡が多くなる。前期とは異なり、台地以外の低地にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中する。一方で、江南台地においては、引き続き権現坂遺跡（地図未掲載）、富士山遺跡（地図未掲載）、寺内遺跡（地図未掲載）、上前原遺跡等で加曾利Ｅ式期の竪穴住居跡が見られる。

後期になると遺跡数は減少し、妻沼低地へと移る傾向が見られる。西城切通遺跡（地図未掲載？）、

場違ヶ谷戸遺跡（ 地図未掲載？ ）中西遺跡（23）等の櫛挽台地から離れた低地でも遺跡が確認されるようになる。この時期の屋外埋甕が、宮下遺跡、萩山遺跡（いずれも地図未掲載）において確認されているが、いずれの遺跡も小規模である。

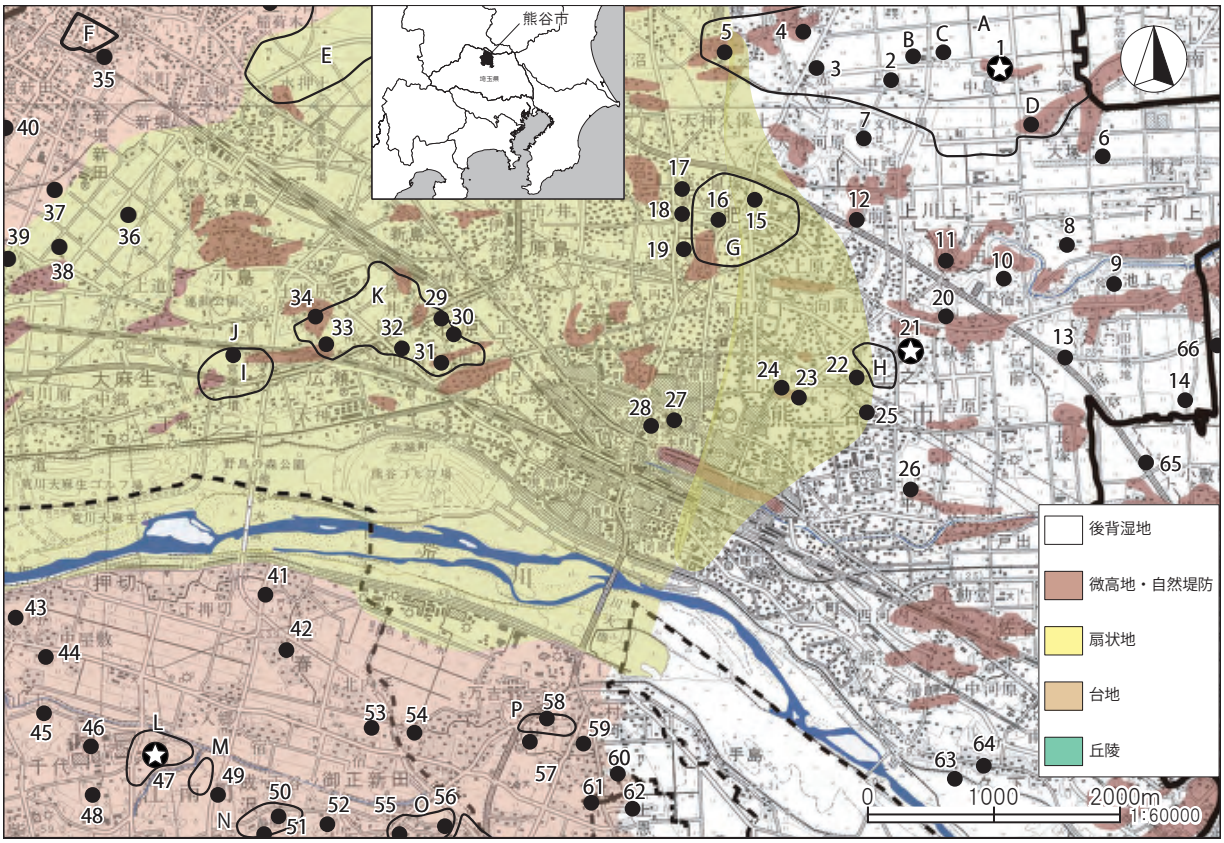
晩期は、遺跡数がさらに減少する。市内東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡で集落跡が確認されている。台地上については、特に江南台地では活動の痕跡をほとんど認めることができない。

弥生時代では、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡が櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中するが、確認されたのは集落跡ではなく再葬墓である。横間栗遺跡（地図未掲載？）では、前期末から中期前半までの再葬墓が 13 基検出されており、再葬墓一括資料は 1999 年３月に埼玉県指定有形文化財になっている。深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）、飯塚南遺跡（ 地図未掲載？ ）等でも再葬墓が検出されており、上敷免遺跡では包含層から県内初の遠賀川式土器の壺胴部破片も出土している。

中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市内東部の低地上に集落が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落とその墓域として方形周溝墓が検出された池上遺跡（13）、行田市小敷田遺跡（65）等をはじめ、集落とこれに付随する墓域がセットとなり本格的に展開するようになる。中期後半には、前中西遺跡（25）、諏訪木遺跡、北島遺跡（７）等でも集落が営まれ、墓域として前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡（22）では方形周溝墓が検出されている。特に、前中西遺跡範囲中央西寄り南側では、多数の方形周溝墓が検出されており、集落とともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されているが、特筆すべきは、当時本格的な水田経営が行われていたことを物語る、水田へ導水する水路跡・堰跡の灌漑施設が水田跡とともに検出され、その規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目される。このように北島遺跡や前中西遺跡等で大規模集落が展開するようになるが、後期については、市内北部及び西部では確認例が少なく、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）等の遺跡がいくつか点在するのみである。なお、後期初頭以降については、前中西遺跡、藤之宮遺跡で土器片が若干出土しているが、遺構は確認されていない。中条条里遺跡（ ６）に含まれる東沢遺跡、行田市池守遺跡（66）では、吉ヶ谷式土器が出土している。また、市内南部の荒川右岸の江南台地では、姥ヶ沢遺跡、富士山遺跡（いずれも地図未掲載）が、当該期の集落として確認されている。

古墳時代になると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地のみならず低地の自然堤防にも活発に営まれるようになり、低地への進出がより活発化し、次第に遺跡数も増加傾向にある。

前期の遺跡は、近年確認例が増加している。弥生時代から引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、特に北島遺跡では大規模な集落が営まれ、墓域も形成されている。また、北島遺跡は、中条条里遺跡に含まれる東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られるほか、東海地方にその系譜が求められるパレス壺や高坏が多く見られ、近接する小敷田遺跡においても畿内や東海地方などの外来系の土器が多数出土している。墓域としては、新期荒川扇状地の中西遺跡において、方台部検出長が約 15 ｍの前期初頭の前方後方形周溝墓が、隣接する前中西遺跡でも旧河道沿いに方形周溝墓が点在して検出されているほか、市内西部の妻沼低地の自然堤防では、一本木前遺跡（ 地図未掲載 ）において、約 100 軒もの膨大な数の竪穴



第２図　周辺遺跡分布図

住居跡のほか、４基の方形周溝墓が検出されており、第２号方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が出土している。また、荒川右岸の江南台地の万吉下原古墳群（遺跡）(Q)、江南台地下の低地の下田町遺跡（地図未掲載）において方形周溝墓が検出されており、方台部全長が 22 ｍの前方後方形周溝墓を盟主墓として、他に大小 17 基の方形周溝墓が検出されている。

一方、前期古墳については、江南台地の南に控える比企丘陵の北縁に、埼玉県指定史跡である塩古墳群・第Ｉ支群（地図未掲載）が分布する。この古墳群は、３世紀末～４世紀中頃の前方後方墳第１号墳をはじめ前方後方墳２基・方墳 27 基で構成され、当地域の出現期古墳の実例として貴重である。また、江南台地の行人塚古墳群（遺跡）(N) では、小鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認された貴重な事例となっている。

中期は確認例が少なく、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。市内東部では、前期から引き続いて前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡（地図未掲載？）等で集落跡が確認されている。前中西遺跡では、近年竪穴住居跡や溝跡等の検出例が増え、土師器高坏を主体とする土器が多数出土している。藤之宮遺跡では溝跡から水辺の祭祀に使用されたと考えられる高坏・甕を中心とする土器群がほぼ完形に近い状態でまとまって出土している。一方、荒川右岸では、江南台地下の低地の下田町遺跡において集落跡が確認されており、玉作り工房を含む竪穴住居跡が検出され、有孔円板形・勾玉形・剣形等の滑石製模造品が出土している。さらに、江南台地の瀬戸山遺跡（地図未掲載）では、５世紀初頭の集落跡が確認されている。古墳についても確認例が少なく、市内北部の妻沼低地の自然堤防には、市指定史跡である奈良古墳群（地図未掲載）中の横塚山古墳（地図未掲載）が所在する。この古

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
熊　谷　市			43	堀ノ内遺跡	中・近世
1	上中条中島遺跡	古墳後、奈良、平安	44	中屋敷遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世
2	女塚遺跡	古墳後、奈良、平安、中世	45	宮下遺跡	旧石器、縄文早・中・後、古墳、奈良、平安、近世
3	赤城遺跡	古墳、奈良、平安	46	東原遺跡	縄文中
4	下本郷遺跡		47	上前原遺跡	旧石器、縄文早・中・後、古墳、奈良・平安
5	東浦遺跡	古墳前、平安	48	萩山遺跡	旧石器、縄文早・後、奈良・平安、中世
6	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良、平安	49	代遺跡	縄文中、中世
7	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世	50	静簡院遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
8	上河原遺跡	奈良、平安、中世、近世	51	合羽山遺跡	縄文、奈良、平安、中世
9	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良、平安、中世、近世	52	成沢上原遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
10	宮の裏遺跡	古墳後	53	宿遺跡	奈良、平安、中世、近世
11	成田遺跡	古墳後	54	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳後、平安、近世
12	河上氏館跡	中世	55	中原遺跡	古墳、奈良、平安
13	池上遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安	56	天神山遺跡	縄文早・後、古墳
14	鶴巻遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安	57	村岡北西原遺跡	平安
15	八幡上遺跡	古墳後	58	村岡館跡	平安末
16	出口下遺跡	古墳後	59	北西原遺跡	奈良、平安
17	肥塚中島遺跡	奈良、平安、近世	60	塚本遺跡	古墳後、奈良、平安
18	出口上遺跡	奈良、平安、中世、近世	61	西浦遺跡	奈良、平安、中世
19	肥塚館跡	中世	62	腰廻遺跡	奈良、平安
20	成田氏館跡	中世	63	久下氏館跡	中世
21	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世	64	市田氏館跡	中世
22	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世	行　田　市		
23	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	65	小敷田（条里）遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安
24	箱田氏館跡	平安末、中世	66	池守遺跡	古墳前・後、奈良、平安
25	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世	古墳群、古墳		
26	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中世、近世	A	中条古墳群	古墳中・後
27	宮町遺跡	奈良、平安、中世	B	女塚第１号墳	古墳後
28	熊谷氏館跡	中世	C	鎧塚古墳	古墳後
29	天神前遺跡	古墳中・後、中世	D	大塚古墳	古墳後
30	兵部裏屋敷跡	中世	E	玉井古墳群	古墳後
31	御蔵場跡	近世	F	籠原裏古墳群	古墳末
32	田角遺跡	平安末、中世	G	肥塚古墳群	古墳後
34	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中世、近世	H	上之古墳群	古墳後
33	不二ノ腰遺跡	奈良、平安	I	広瀬古墳群	古墳後・末
35	籠原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世	J	宮塚古墳	古墳後（末）
36	東遺跡	平安、中世	K	石原古墳群	古墳後
37	樋の上遺跡	古墳中・後、奈良、平安	L	上前原古墳	古墳後
38	黒沢館跡	中世	M	静簡院古墳群	古墳後
39	若松遺跡	中・近世	N	行人塚古墳群（遺跡）	古墳前・後
40	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	P	村岡古墳群	古墳後
41	平山館	中世、近世	O	天神山古墳群	古墳後
42	瀬戸山遺跡	縄文早・中、古墳前・後、奈良、平安、近世	Q	万吉下原古墳群（遺跡）	古墳前・後

墳は、Ｂ種横刷毛目の円筒埴輪を有する５世紀後半に比定される帆立貝式前方後円墳であるが、後円部の一部は削平されている。また、同じく妻沼低地の市内東部の中条古墳群（A）では、北島遺跡の田谷地点において５世紀中葉～後半の方墳や円墳が検出されている。

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は大規模になり、台地のみならず低地にも多数出現する。そして、これらの集落は、奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群をなして形成され、多数の古墳群が台地や低地に築造される。

古墳群は、概ね６世紀から７世紀末にかけて、ないしは８世紀初頭にかけて築造されている。妻沼低地では、上之古墳群（H）が分布するほか、飯塚古墳群（地図未掲載）、上江袋古墳群（地図未掲載？）、

乙鵜森古墳群（地図未掲載）、中条古墳群等が分布する。中条古墳群では、当該期初頭の古墳として鎧塚古墳(C)や女塚第１号墳(B)等の古墳が築造される。鎧塚古墳は全長43.８ｍの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（埼玉県指定有形文化財）を伴う墓前祭祀跡が２か所確認されており、築造年代は５世紀末～６世紀初頭に比定される。同時期の築造年代と考えられる女塚１号墳も全長46ｍの帆立貝式前方後円墳で、二重周溝を持ち楯持武人埴輪３体ほか多数の人物埴輪が出土している。また、当該期の終わりの埴輪を樹立しない７世紀前半に築造された大塚古墳(D)は、大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用している。

荒川左岸に広がる新期荒川扇状地の河岸段丘には、広瀬古墳群（Ⅰ）、石原古墳群(K)が、扇状地の扇端部には肥塚古墳群(G)が分布する。広瀬古墳群中の国史跡宮塚古墳（地図未掲載）は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、７世紀末～８世紀初頭の築造と考えられている。石原古墳群は、６世紀後半～７世紀初頭に築造され、埴輪の樹立を行わなくなる過渡期の古墳群である。肥塚古墳群は６世紀後半～７世紀前半に築造され、川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の２種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者が荒川水系の石材、後者が利根川水系の石材と考えられ、これは地理的な特徴と被葬者の特徴を示す可能性がある。

新期荒川扇状地の東に位置する櫛挽台地には、別府古墳群（地図未掲載）、在家古墳群（地図未掲載）、籠原裏古墳群（F）、三ヶ尻古墳群（地図未掲載）が分布する。別府古墳群及び三ヶ尻古墳群は、６世紀後半～７世紀前半に築造された前方後円墳を盟主墳とする古墳群であり、別府古墳群については、台地縁辺部に分布する古墳には埴輪を有し、台地中程の古墳は埴輪を有しないという特徴がある。また、在家古墳群及び籠原裏古墳群は、いずれも埴輪を有しない７世紀後半～８世紀初頭の築造と考えられる。籠原裏古墳群は、墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことが特徴として挙げられ、後述する幡羅郡家とのその関連遺跡である国史跡幡羅官衙遺跡群と時期的及び地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群である。また、在家古墳群も、隣接する在家遺跡（地図未掲載）が官衙的要素を持つ８世紀前半～９世紀の方形区画の集落が幡羅郡家の出先機関との見方があり、石室構造においても籠原裏古墳群と共通する部分があることから注目される。

荒川右岸の江南台地では、比較的小規模な古墳群が、樹枝状の谷に仕切られた台地端部に分布し、万吉下原古墳群、瀬戸山古墳群（地図未掲載）、野原古墳群（地図未掲載）、阿諏訪野古墳群、円山古墳群、東山古墳群、大境南古墳群（いずれも地図未掲載）が６世紀後半～７世紀前半に築造される。いずれの古墳群も埴輪を樹立するものと樹立しないものが混在し、瀬戸山古墳群及び阿諏訪野古墳群では７世紀後半ないしは末頃まで築造が続く。また、東山古墳群及び大境南古墳群は、小規模な前方後円墳を盟主墳とし他は円墳による構成であるが、７世紀初頭の築造と考えられる東山古墳群第１号墳は、円墳として築造後帆立貝式前方後円墳に改変された特徴を持ち、７世紀初頭頃の築造である大境南古墳群第１号墳は、埴輪樹立の代用として一定間隔に須恵器堤瓶８点が供献されたとされる特徴を持つ。

生産遺跡では、江南台地の姥ヶ沢埴輪窯跡群、権現坂埴輪窯跡群（いずれも地図未掲載）が確認されており、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用している。権現坂埴輪窯跡群では、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に窯が並んで造られ、平坦地には工房と考えられる竪穴や粘土の採掘坑も確認され

ている。これらの埴輪窯は、６世紀前半に操業が始まり６世紀代後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していたと考えられ、特に権現坂埴輪窯跡群では、高さ 70 ㎝を超す大型の円筒埴輪が作られており、埼玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。

本格的な律令体制が始まる奈良時代以降平安時代、市内には幡羅郡、男衾郡、大里郡、埼玉郡の４郡があったとされ、そのうち市内北部から西部にかけてと深谷市東部の一帯は、武蔵国幡羅郡に属していたと考えられる。幡羅郡は、上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の８郷からな、規模は中郡である。深谷市幡羅官衙遺跡（地図未掲載）は、東西 500 m、南北 400 mの範囲に広がる幡羅郡家跡であり、郡のほぼ中央部の幡羅郷に位置するとされる。これまでに郡庁を除く正倉院、館、厨家、曹司群、道路等の諸施設が確認され、評の時期である飛鳥時代の７世紀後半には小規模な倉庫等の掘立柱建物が建てられ、その後の郡が成立する７世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、８世紀末には、正倉院の正倉が掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられ、敷地の拡張が行われる。９世紀前半～中葉になると、二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化し、この区画施設は、10 世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後も 11 世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家全体の終焉と考えられている。この幡羅官衙遺跡周辺には、西別府遺跡（地図未掲載）、西別府廃寺（地図未掲載）、西別府祭祀遺跡（地図未掲載）が隣接して所在し、郡家やこれに付属する施設としての位置付けがなされ、2018 年２月にはこのうち幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が、国史跡「幡羅官衙遺跡群」として指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様に、少なくとも９世紀前半～ 11 世紀前半の二重溝と土塁（前身は掘立柱塀で、後に土塁に改変）による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い８世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺院地及び主要伽藍域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構等が検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦、伽藍廃絶に伴う廃棄土坑の出土遺物、仏教行事の献灯行為に用い一括投棄された灯明皿の出土状況等から 10 世紀前半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、水源の多くが湧泉であった河川の河畔において７世紀後半から 11 世紀前半まで行われた祭祀場跡であり、祭祀具である石製模造品をはじめ呪術的や仏教色の濃い墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。さらに、荒川右岸の江南台地では、８世紀前半～１０世紀中頃の古代寺院である寺内廃寺（地図未掲載）が確認され、三重の区画施設を備え、外側には寺院地を区画する大溝、中心伽藍には塔、金堂、講堂、中門、南門の建物跡が検出され、伽藍東側の寺院地区画大溝内には竪穴建物 50 軒以上の寺院の維持管理を担ったと考えられる人々の集落、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。この寺内廃寺の西に近接する深谷市百済木遺跡（地図未掲載）では、７世紀代の豪族居宅跡と考えられる遺構が検出されており、両遺跡とも古代男衾郡の成立を推定する上で重要であるとの認識がなされている。なお、百済木遺跡の豪族居宅は、７世紀後半～８世紀初頭の築造である立野古墳群（地図未掲載）との関係において、豪族居宅は古墳群を築造した首長の居住域、古墳群はその墓域との見方もある。

そして、律令体制の経済基盤である税としての稲穀の生産域の整備において、条里は重要な役割を担うが、妻沼低地では条里に関わる痕跡をとどめている条里遺跡がいくつか確認されている。大里郡に属

すると推定される中条条里遺跡（６）は、北島遺跡を北西端に東及び南に広がり、池上遺跡以南には埼玉郡に属すると推定される行田市小敷田条里遺跡（65）が続き、その南の荒川両岸の低地に広がると推定される大里条里推定地（地図未掲載）は大里郡に属すると考えられる。一方、櫛挽台地の北側には、幡羅郡に属すると推定される別府条里遺跡（地図未掲載）や道ヶ谷戸条里遺跡（地図未掲載）が所在する。

転じて、集落について飛鳥時代の７世紀後半から平安時代末の 11 世紀前半までの状況を見ると、櫛挽台地には７世紀後半から形成される幡羅郡家関連集落である深谷市下郷遺跡（地図未掲載）及び大竹遺跡（地図未掲載）、櫛挽台地東側の新期荒川扇状地には大規模集落跡である樋の上遺跡（37）が所在し、台地ないしはそれに続く微高地に占地する大きな特徴がある。一方、妻沼低地には、７世紀後半以前からの集落である一本木前遺跡や北島遺跡、７世紀末～８世紀初頭頃の出挙木簡を出土した小敷田遺跡等が所在し、荒川右岸の江南台地下の低地には、古墳時代後期の６世紀をピークに、７世紀後半には遺構数が激減し８世紀へと移行していく下田町遺跡が所在する。一本木前遺跡は、別府条里が施工された東端に展開した集落で、低地の微高地にあった集落が再編されていく中、幡羅郡家の影響を受けつつ継続的に営まれた集落であると考えられる。

８世紀前半には、妻沼低地では飯塚北遺跡（地図未掲載）のような大規模な集落が形成され、江南台地の奥部には、荒神脇遺跡（地図未掲載）や下原遺跡（地図未掲載）のような集落が点在する。８世紀後半になると、妻沼低地では７世紀後半から中核となる規模を継続してきた北島遺跡ほか、諏訪木遺跡、飯塚北遺跡等の大規模集落が増加する一方、古墳時代後期以降累々と営まれた新期荒川扇状地の樋の上遺跡等の集落では衰退傾向となる。

９世紀前半は、妻沼低地の北島遺跡において、大型の掘立柱建物と少数の竪穴建物で構成される区画施設を有する有力者層の居宅が成立し 10 世紀末まで継続する。また、諏訪木遺跡でも集落が拡大していく。諏訪木遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての、斎串・人形等の木製祭祀具を使った律令祭祀へと変遷する河畔祭祀が行われた河川跡が検出されたほか、９世紀前半～ 10 世紀後半の３つの区画施設を有する集落が確認され、最も大型の区画施設では、９世紀末～ 10 世紀後半には区画の中心的建物として大型の四面廂掘立柱建物が出現している。また、多数の灰釉陶器や緑釉陶器も検出されており、官衙的様相が看取できる。

９世紀後半になると、全体として遺跡規模も遺跡数も縮小の傾向になる。妻沼低地の池上遺跡（13）では、９世紀後半～ 10 世紀初頭の整然と配された掘立柱建物跡群が検出され、埼玉郡を示す「前」の墨書土器が出土している。ちなみに、最近の調査では８世紀後半の須恵器坏に「官または宮」、「里刀自」の墨書が見られ注目される成果があり、律令体制下において重要な役割を担った人物や施設の存在が想起される。市街地の新期荒川扇状地に立地する宮町遺跡（27）は７世紀末～ 10 世紀初頭の集落であるが、９世紀後半～ 10 世紀初頭には、火災を受けた大型の四面廂掘立柱建物跡が検出され、その片付けに使われたと考えられる土坑から多量の緑釉陶器や灰釉陶器が出土したほか、鉄斧・刀子・釘、砥石、鞴の羽口も出土したことから、有力者の存在を想起させる官衙的要素がある。また、荒川右岸の江南台地では、郷の有力者宅（郷長）に設置された凶作等に備え備荒米や出挙稲を保管したとの見方がある倉庫群が、丸山遺跡（地図未掲載？）において確認されている。この倉庫群は総柱や側柱式の掘立柱建物であり、９世紀～ 10 世紀前半を主体とする竪穴建物群に併設している。

10 世紀前半においては縮小傾向が顕著となり、当該期の集落全般を見渡すと、集落内にあった掘立柱建物が激減し、竪穴建物のみの集落が点在する程度となる。そして、これ以降の 10 世紀中頃には、11 世紀まで続く大規模集落も規模が縮小し、集落内の竪穴建物も小型化、土器を見ると土師器甕に代わって羽釜が出現し普及する等、食と住に大きな変化があったと推定される。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数見られる。北部では実盛館（長井斎藤氏館跡）（地図未掲載）、西城城跡（地図未掲載）、東城城跡（地図未掲載）、東部では中条氏館跡（地図未掲載）、光屋敷遺跡（地図未掲載）、成田氏館跡(20)、久下氏館跡 (63)、市田氏館跡 (64)、中央部では熊谷氏館跡 (28)、箱田氏館跡 (24)、肥塚館跡 (19)、兵部裏屋敷跡 (30)、西部では西別府館跡（地図未掲載）、別府城跡（地図未掲載）、別府氏館跡（地図未掲載）、奈良氏館跡（地図未掲載）、南部では村岡館跡 (58) 等の城館跡や伝承地があるが、その実態は不明なものが多い。東別府地区にある別府城跡では、一部ではあるが現在も土塁と空堀が良好な状態で残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く検出されている。なかでも黒沢館跡(38)は、発掘調査により出隅を持ち全周する堀及び土塁、虎口等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪瓰録』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致した大変貴重な例である。上之地区の成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が 15 世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされ、隣接する諏訪木遺跡では、成田氏関連と考えられる遺構や遺物がいくつか検出されている。館跡から南へ約 300 mの箇所では、中世の居館と考えられる変形方形区画が確認されており、『新編武蔵風土記稿』の成田氏一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている。また、井戸枠に器高 70 ㎝を超える 13 世紀中頃と考えられる常滑産の大甕を使用した井戸跡が検出されている。さらに、古墳時代後期の円墳の周溝埋没後に掘られた土坑からは 5,000 枚を超える大量の埋蔵銭が出土し、それは 15 世紀前半を上限とし、成田氏に関連するものであると推定されている。市内南部の江南台地では、中世に続く熊野遺跡（地図未掲載）、元境内遺跡（地図未掲載）、諏訪脇遺跡（地図未掲載）、野原宮脇遺跡（地図未掲載）等において集落が確認されている。また、これら集落の西に近接する野原古墳群では、平安時代末の金銅宝冠阿弥陀如来坐像が出土し、古墳墳丘が経塚に転用されたと考えられている。さらに、付近にあったとされる能満寺の伝承から中世後期成立の文殊寺の創建にかかる由来を垣間見ることができる。なお、文殊寺一体、元境内遺跡は増田氏館跡の伝承がある場所であり、1996 年の館跡の内郭及び堀の発掘調査において中世の塚、近世の土坑・ピット・溝跡等が検出され、中世～近世の陶磁器や銭貨、中世の板石塔婆や五輪塔等が出土している。また、この周辺には、古代において武蔵国国府－上野国間の南北ルートとして知られる官道の東山道武蔵路が通っていたと想定されており、古代以降中世においても古街道の鎌倉道の一つ（上道）として伝わる地域の主要道として長く使用されていたことが推定されている。

中世段階においては、館跡等を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。このことは、近世段階においても同様で、市内では諏訪木遺跡等において調査例が見られるものの、不明な点が多いというのが実態である。

上中条中島遺跡Ⅱ

Ⅱ　上中条中島遺跡の調査

１　発掘調査の概要

⑴　調査に至る経過

上中条中島遺跡の調査は、建築主（岸田智氏）との調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成29年２月10日付けで、埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会では、届出のあった熊谷市上中条字中島463番１地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59－042　上中条中島遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成29年３月６日に調査予定地内に１箇所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、現地表面下約100㎝の深度から古墳時代の遺構と共に、土師器甕、須恵器壺などの遺物が出土し、埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり柱状改良工事を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成29年３月23日付け熊教社埋発第672号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を建築主あてに平成29年３月31日付け教生文第４－1789号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。なお、住宅建築に伴う浄化槽埋設箇所については、その規模が狭小であることから工事立会の措置とした。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成29年４月14日付け熊教社埋発第16号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

なお、調査当時は、当該地が埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-010　中条古墳群）の範囲内にあったため、この埋蔵文化財包蔵地名称で各種書類の処理及び調査を行った。その後、整理・報告書作成作業の際に、当該地で検出された遺構及び遺物の性格が集落跡であると判断されたため、隣接する上中条中島遺跡（埼玉県遺跡番号59-042）の範囲を拡大することとした令和４年６月１日付けの埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カードを、同年６月９日付け熊教社埋発第87号で埼玉県教育委員会あてに送付し、埋蔵文化財包蔵地の変更増補をした。また、これに係る埋蔵文化財包蔵地の周知について、同日付け教文資第９－７号で通知があった。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成29年４月17日から同年５月26日にかけて行われた。調査面積は、開発予定地面積359.98㎡のうち80.00㎡である。

まず、遺構確認面まで重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。その結果、狭い調査区内に竪穴建物跡が重複しているのを確認し、順次時代の新しい遺構から調査に着手した。調査の終盤には、遺物が大量に出土し、小鍛冶遺構が検出された古墳時代前期の第１号竪穴建物跡の掘り下げ作業と並行して、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

⑶　発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成 29 年度に、整理・報告書作成は令和４年度に、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、次の通りである。

主体者　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

（平成２９年度）

教育長	野原　　晃
教育次長	正田　知久
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課担当副参事	吉野　　健
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井　　端
主査	松田　　哲
主査	小島　洋一
主査	星　　祥子
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主事	武部　喜充（任期付職員）
主事	島村　範久（任期付職員）
主事	大野美知子（任期付職員）
事務嘱託	山﨑　和子

イ　整理・報告書作成

（令和４年度）

教育長	野原　　晃
教育次長	権田　宣行
社会教育課長	野村　和弘
社会教育課担当副参事	吉野　　健
副課長兼文化財保護係長	松田　　哲
主査	小島　洋一
主査	星　　祥子
主査	山下　祐樹
主査	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事	山川愛希子
主事	山川　守男（任期付職員）
主事	大野美知子（任期付職員）
主事	中山　浩彦（任期付職員）

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行い、平成 29 年５月 26 日に埋め戻しを含めた作業のすべてを終了した。

整理・報告書作成作業は、令和４年４月から令和５年３月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄・注記、接合、復元を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、報告書の印刷に入り、校正を経て本報告書を刊行した。

２　遺跡の概要

⑴　上中条中島遺跡について

上中条中島遺跡は、利根川の南約３㎞、荒川の北約 4.5 ㎞の標高約 22 ｍの微高地上に立地する集落遺跡である。

本遺跡における第１次調査は、昭和 53 年度に荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業に伴い本市が発掘調査を実施した。よって、今回の調査は、第２次調査に当たる。

前回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴建物跡 16 棟、古墳時代後期の土坑１基、竪穴遺構２基が検出された。さらに、前述した遺構の他に、土師器坏を焼成した古墳時代後期の土師器窯址４基と土師器甕を焼成した平安時代の土師器窯址と考えられる遺構が２基検出されている。

荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業では、７ヶ年にわたり発掘調査が実施された。昭和 52 年度に中条条里遺跡と東沢遺跡、昭和 54 年度に鎧塚古墳を含む上中条古墳群、昭和 55 年度に権現山古墳と常光院東遺跡、昭和 56 年度に女塚古墳群、昭和 57 年度はさすなべ遺跡および光屋敷遺跡、昭和 58 年度には周辺部の調査など上中条一帯における広範囲の埋蔵文化財調査を実施し、熊谷扇状地における古墳時代以降の様相を明らかにすることができている。

⑵　調査の方法

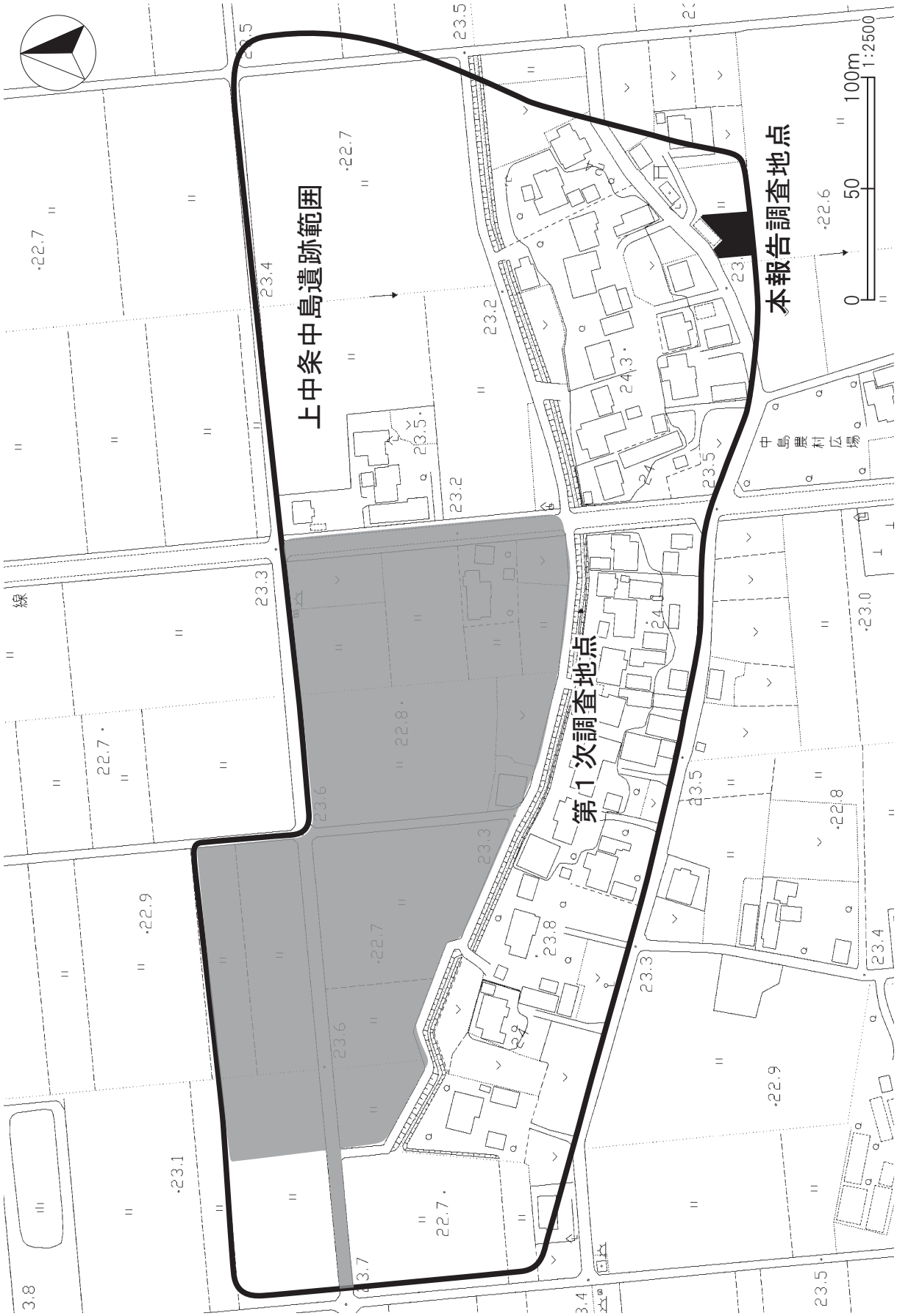
調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺１ｍのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体が網羅できるよう、北西隅をＡ－０として南へＡ～Ｆとし、東へ０～ 10 とし、Ａラインは西から東へＡ―０・Ａ―１と呼称した。また、Ｂライン以南もＡラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方の方法で行った。

⑶　検出された遺構と遺物

第２次調査地点は、遺跡範囲の南東部に位置し、荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業で実施した第１次調査地点は北西約 250 ｍに位置する（第３図）。

本調査によって検出された遺構は、複雑に重複関係のある古墳時代前期の竪穴建物跡５棟であった。遺物については、古墳時代前期の土師器壺・台付甕・高坏・鉢などの土器のほかに、小鍛冶遺構に伴



第３図　上中条中島遺跡調査地点位置図

う台石、砥石、羽口片や鍛冶滓等が出土し、その総量は、コンテナ（大きさ：縦 34 ㎝、横 54 ㎝、深さ 15 ㎝）にして７箱であった。

３　遺構と遺物

⑴　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第５～ 12 図、第２表）

調査区の西半で検出された。Ｂ－２～４･Ｃ･Ｄ－０～５･Ｄ－５･６･Ｅ－０～６･Ｆ－０～４グリッドにかけて位置しており、第３・５号竪穴建物跡と重複していた。新旧関係は、第３号竪穴建物跡より新しく、第５号竪穴建物跡よりも古かった。

全体の約１／３が調査できたと考えられるが、規模や平面形態については不明である。第３号竪穴建物跡床面からの深さは 30㎝ であった。

炉跡・主柱穴・壁周溝などの付属施設は検出することができなかったが、建物跡中央部の北壁寄りの地点から小鍛冶を行ったと考えられる遺構が検出された。

小鍛冶炉跡は、径 50 ㎝の浅い円形で、内部に複数の径 10 ㎝、深さ５㎝の小ピットが検出された。ピットを中心に還元し、周辺には炭化物や焼土塊、羽口や鉄滓の細片が多数確認されている。

遺物は、覆土上層から下層にかけて多量の土師器片が出土した。本遺構では、多量のＳ字状口縁台付甕や 17 の大型壺など他の竪穴建物跡とは特異な点が見られるのが特徴である。

第２号竪穴建物跡（第 13、15 図、第３表）

調査区の北西隅で検出された。Ａ－０～３・Ｂ－０～２グリッドに位置し、第３号竪穴建物跡と重複していた。新旧関係は、第３号竪穴建物跡より新しい。

竪穴建物跡の南壁の一部しか調査できなかったため、規模や平面形態は不明である。第３号竪穴建物跡床面からの深さは 10㎝ であった。

炉跡・主柱穴・壁周溝などは検出することができなかった。

遺物は、床面から２の台付甕脚台部と３の甑底部片が出土した。

第３号竪穴建物跡（第 13、15 図、第３表）

調査区の西半で検出され、Ａ－２～５・Ｂ－０～６・Ｃ－４～６・Ｄ－５・６・Ｅ－６グリッドにかけて位置していた。第１・２・４・５号竪穴建物跡と重複しており、新旧関係は、４棟の建物跡の中で一番古かった。

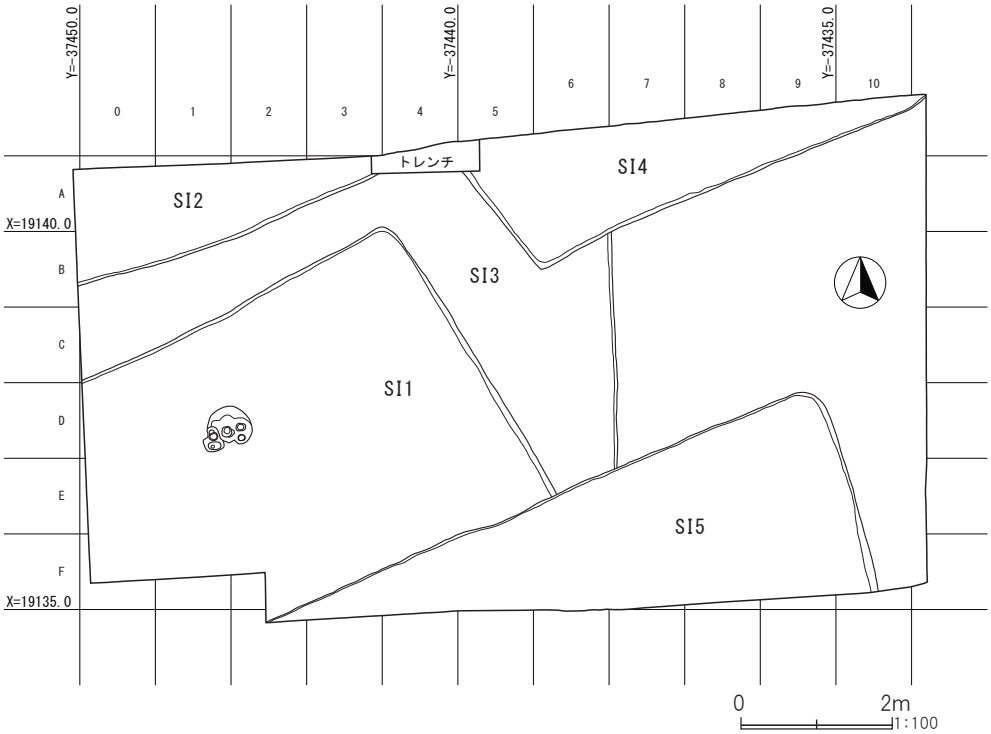
全体を調査できなかったため、規模や平面形態は不明である。遺構確認面からの深さは 17㎝ であった。

炉跡・主柱穴・壁周溝などの付属施設は検出することができなかった。

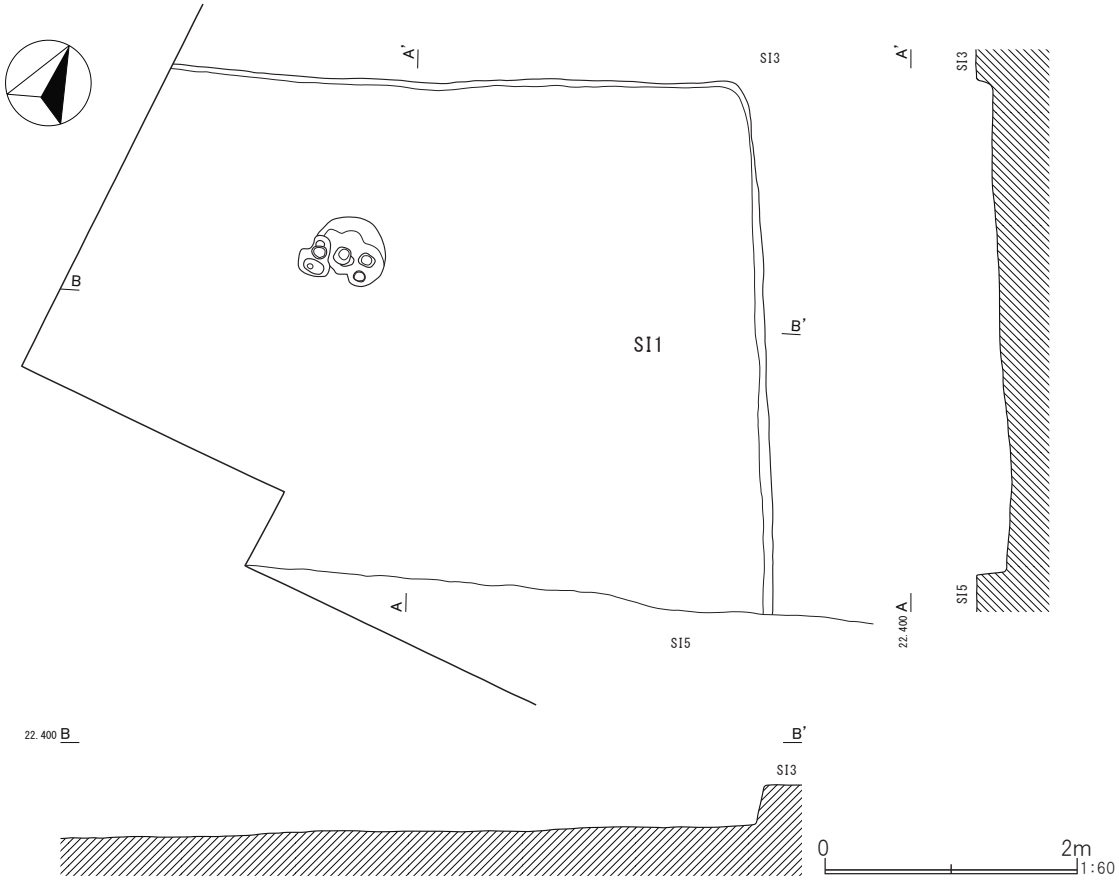
遺物は、覆土中から土師器片が少量出土した。

第４号竪穴建物跡（第 14、15 図、第３表）

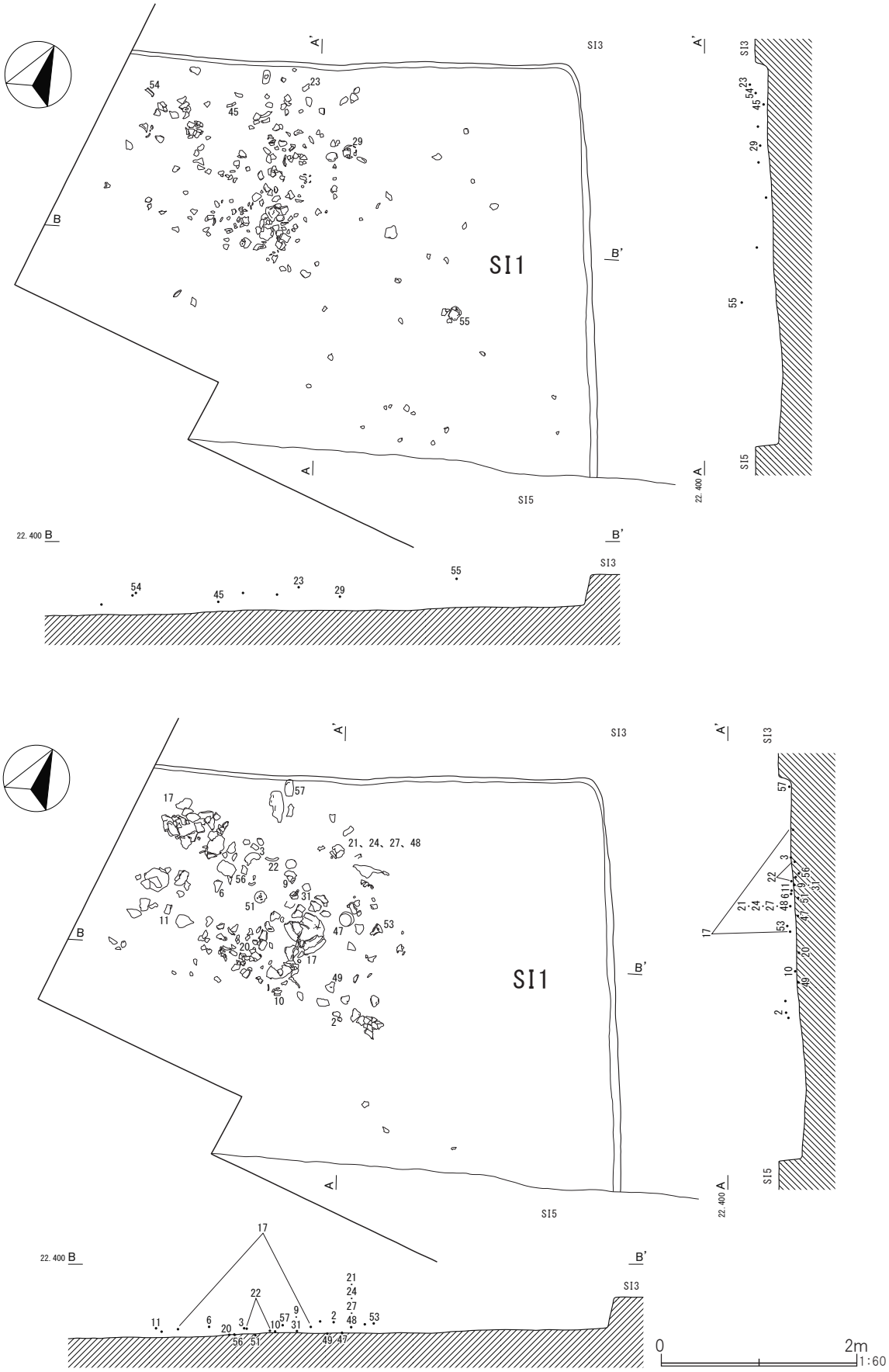
調査区の北隅で検出された。Ａ－４～ 10・Ｂ－５・６グリッドに位置し、第３号竪穴建物跡と重複していた。新旧関係は、第３号竪穴建物跡より新しい。



第４図　上中条中島遺跡調査区全測図



第５図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡



第６図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡遺物出土状況（上面：上層　下面：下層）

竪穴建物跡の南西コーナーから南東コーナー部にかけての一部が確認できた。規模や平面形態は不明である。遺構確認面からの深さは17cmであった。

炉跡・主柱穴・壁周溝などは今回の調査範囲内から検出することができなかった。

遺物は、床面直上から１の折り返し口縁の壺などが出土した。

第５号竪穴建物跡（第14・15図、第３表）

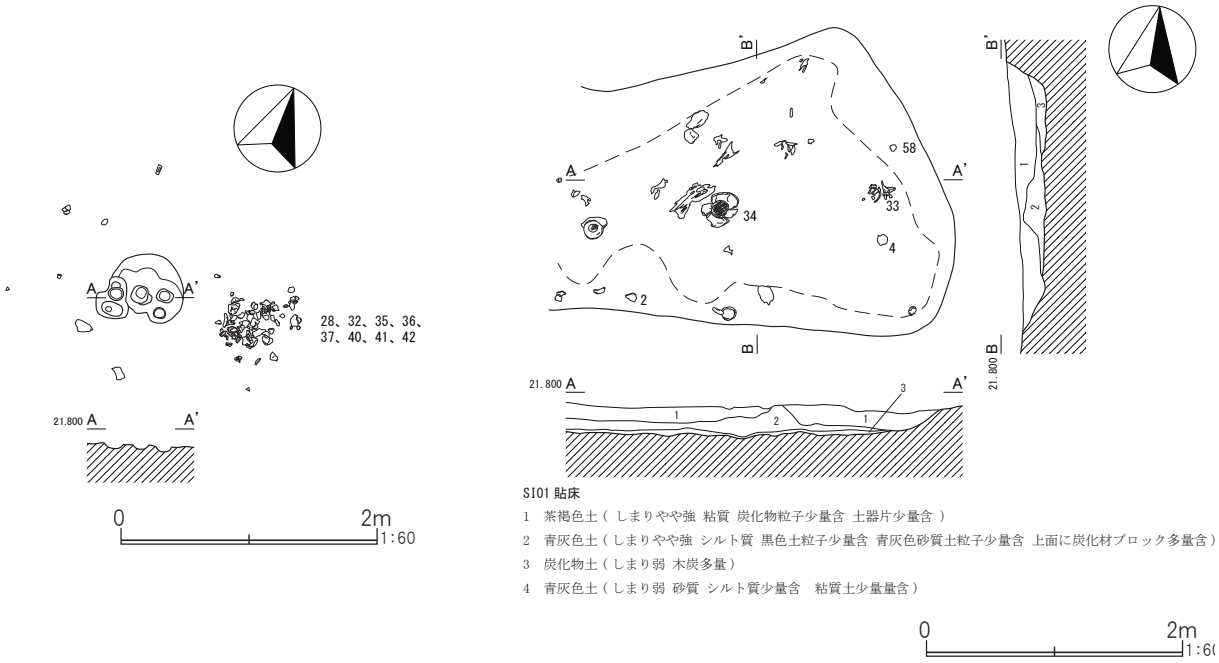
調査区の南隅で検出され、Ｄ－７～９・Ｅ－５～10・Ｆ－２～10グリッドにかけて位置していた。第１・３号竪穴建物跡と重複しており、新旧関係は、３棟の建物跡の中で本遺構が一番新しいものと考えられる。大半が調査区外にかかり全体を調査できなかった。竪穴建物跡の北東コーナー付近が確認できただけであるため、規模や平面形態は不明である。遺構確認面からの深さは26cmであった。

炉跡・主柱穴・壁周溝などの付属施設は検出することができなかった。

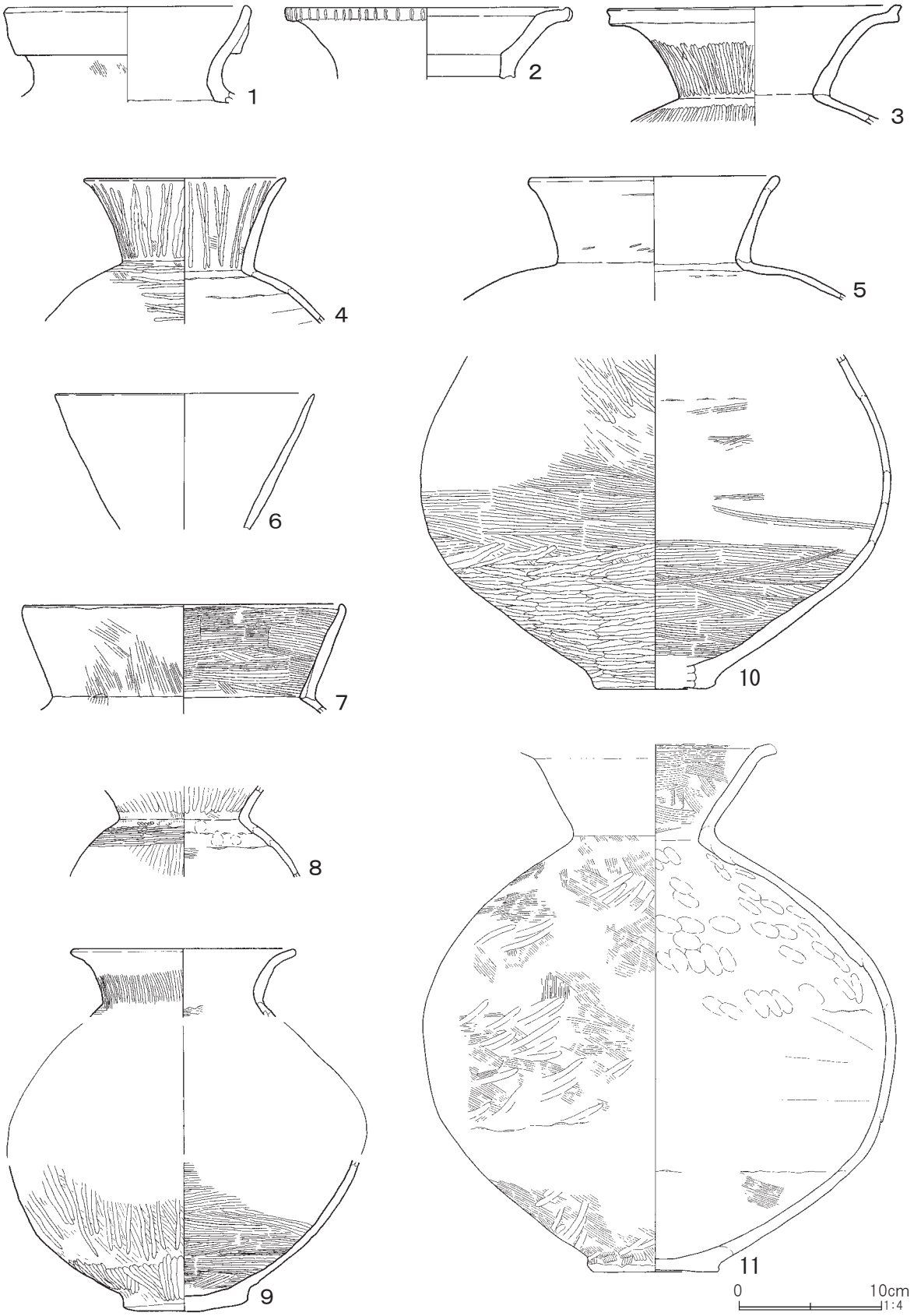
遺物は、図示した１の器台脚部や古式土師器片が少量のほか、古墳時代後期鬼高式の模倣坏片が数点出土した。

⑵　遺構外出土遺物（第15図、第３表）

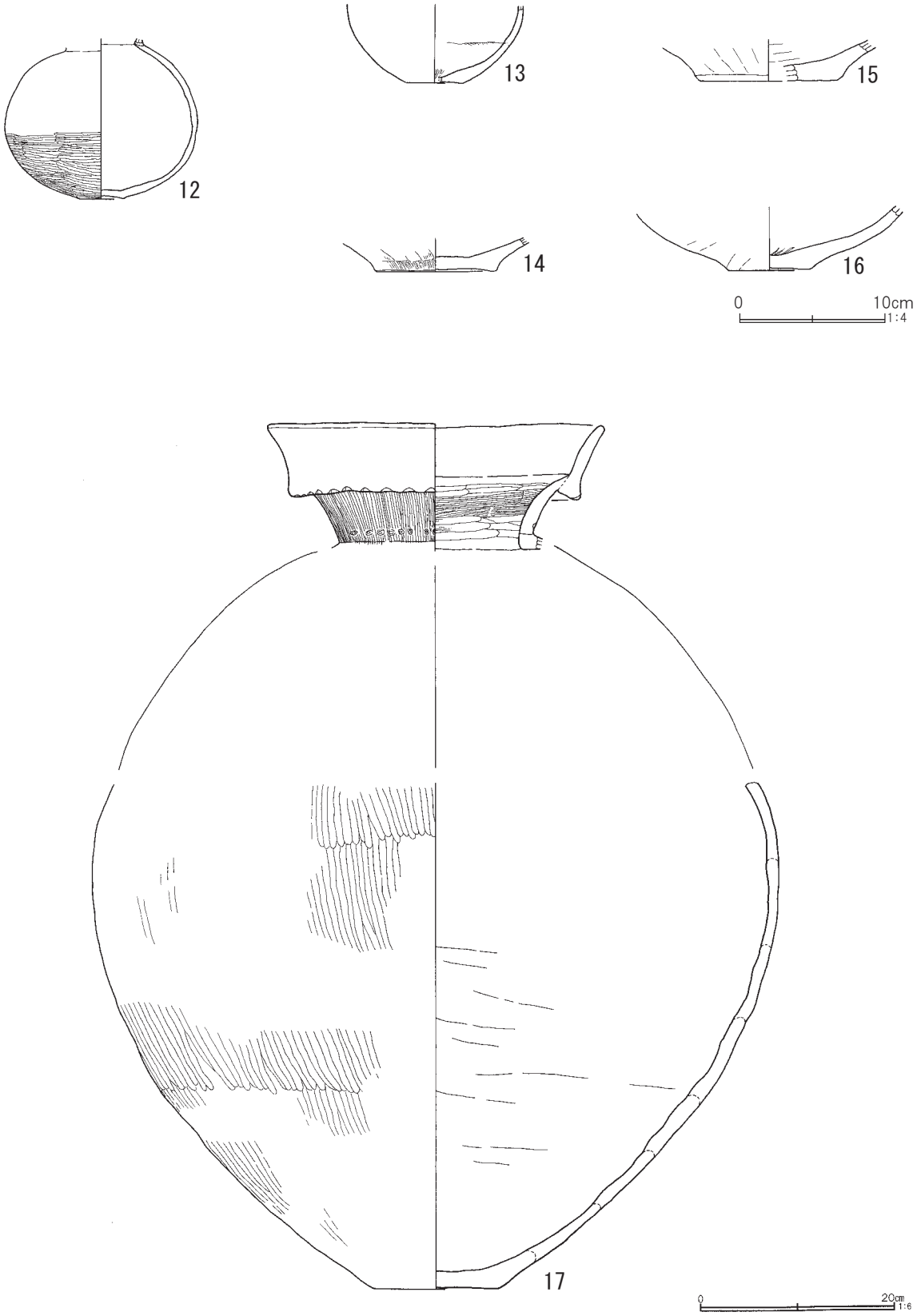
１は試掘調査時に出土した単節縄文RLを施文した壺の肩部片である。２は第５号竪穴建物跡の覆土中から出土した古墳時代後期の模倣坏で、口縁部外面に赤彩が施されている。



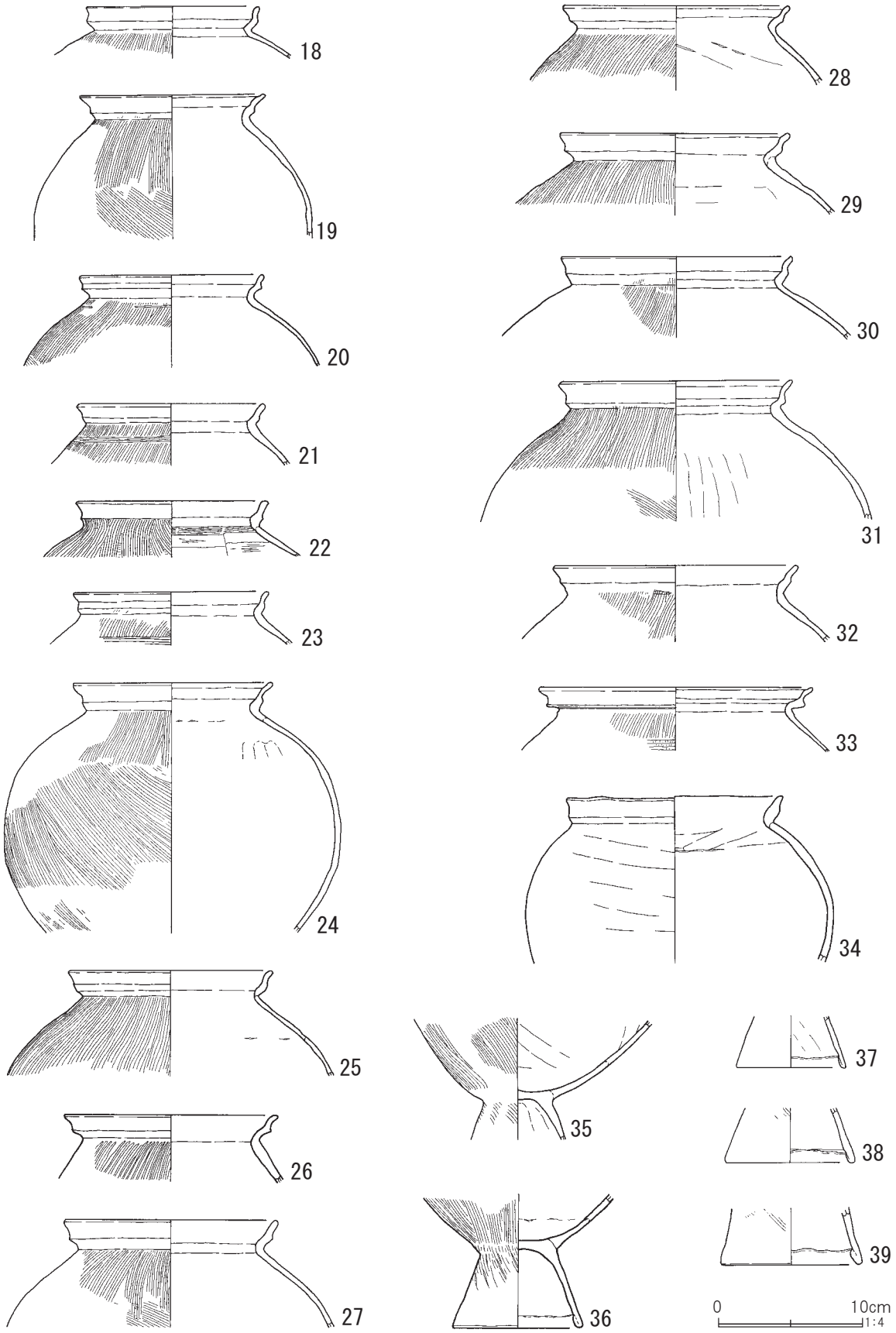
第７図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡小鍛冶跡（左面：遺物出土状況　右面：掘り方）



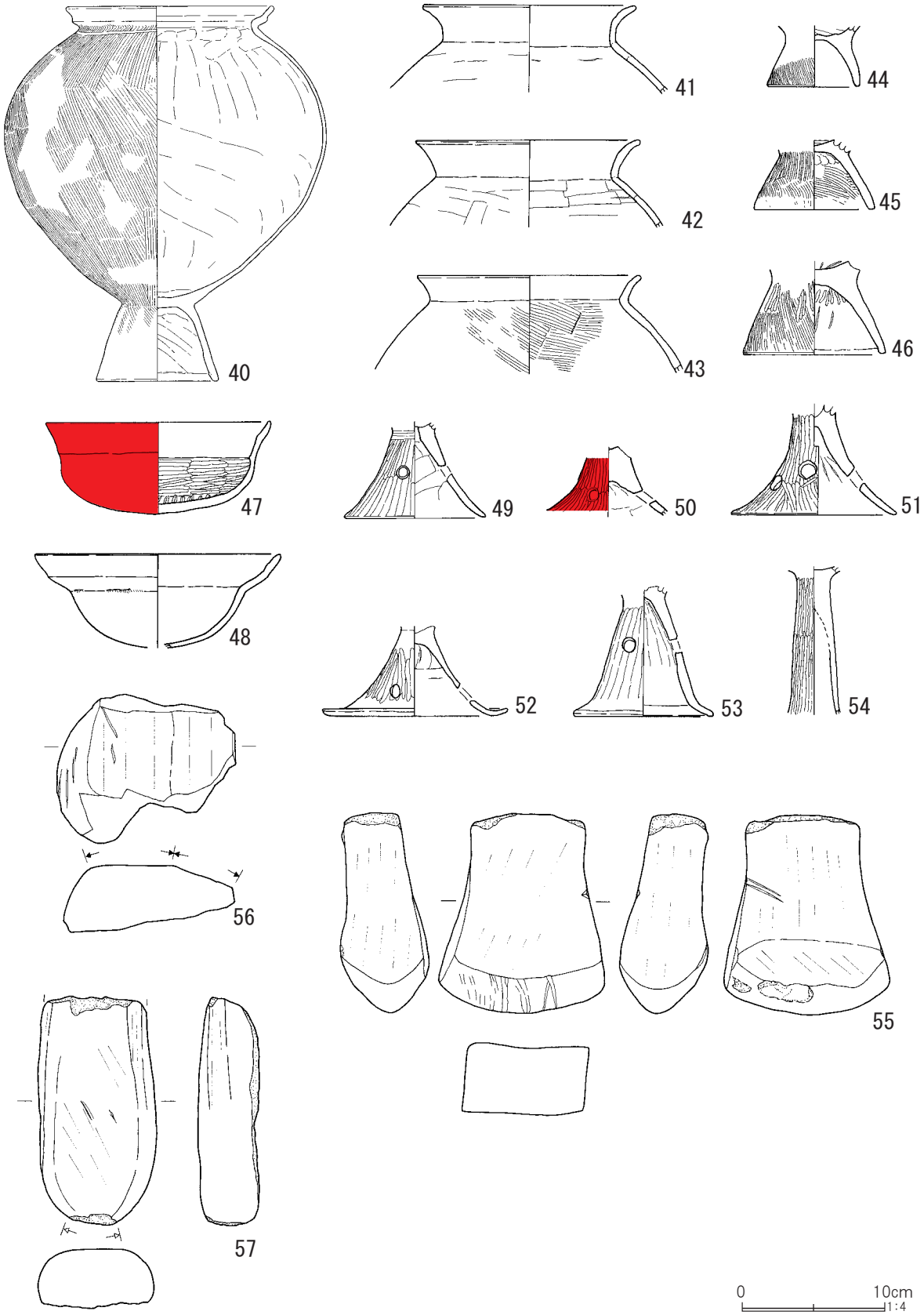
第８図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (1)



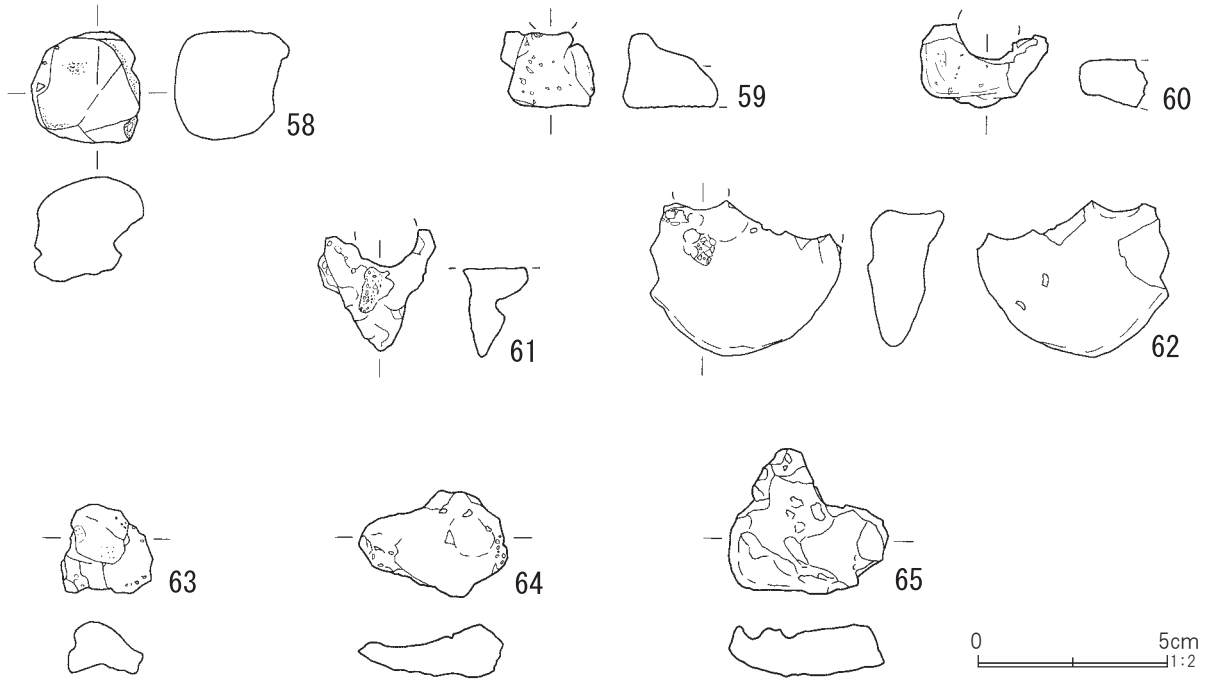
第９図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (2)



第 10 図　上中条中島遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (3)



第 11 図　上中条中島遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (4)



第 12 図　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物 (5)

第２表　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第８～ 12 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	土師器 壺	(17.4)	(6.8)	—	ABE	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部 10%	
2	土師器 壺	(20.0)	(5.0)	—	CEIN	橙 5YR-6/6	B	口縁部 30%	磨滅
3	土師器 壺	(20.6)	(8.4)	—	ABIJN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 30%	口縁部外面に黒斑
4	土師器 壺	14.2	(10.2)	—	ABCIN	橙 2.5YR- 6/8	B	80%	胴部外面に黒斑
5	土師器 壺	(17.6)	(8.7)	—	ABDIN	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	30%	
6	土師器 壺	(18.2)	(9.5)	—	BEIK	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	口縁部 15%	
7	土師器 壺	(22.8)	(7.6)	—	ABIJN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部 45%	内外面に黒斑
8	土師器 壺	—	(6.6)	—	AB	外面：黄灰 2.5YR-5/1 内面：に ぶい橙 7.5YR-6/4	B	顎～肩部 40%	外面に黒斑
9	土師器 壺	(15.8)	—	8.6	ABDE	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部 40% 胴部 80%	
10	土師器 壺	—	(23.4)	8.4	ABIN	にぶい黄 2.5Y-6/3	B	35%	胴部外面下半に黒斑
11	土師器 壺	—	(36.9)	8.7	ABCEJM	にぶい黄橙 10YR-7/3	A	70%	胴部外面に黒斑
12	土師器 壺	—	(11.0)	3.0	ABN	橙 7.5YR- 7/6	B	90%	外面に黒斑
13	土師器 壺	—	(5.4)	3.8	ABIN	浅黄橙 10YR-8/3	B	50%	
14	土師器 壺	—	(2.3)	(8.4)	BCIKN	淡黄 2.5Y- 8/4	B	60%	

第２表　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第８～12図）

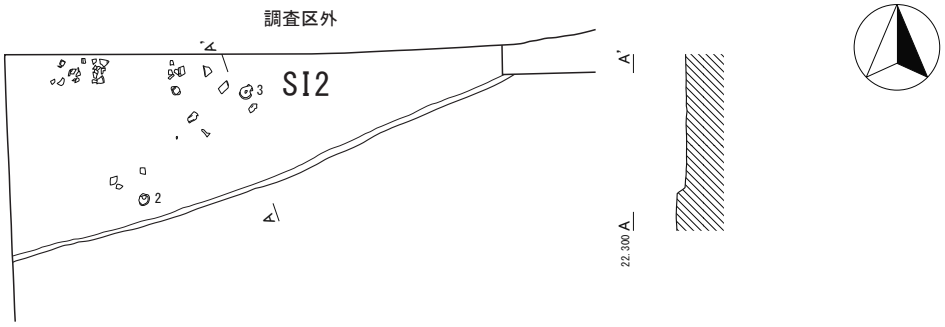
図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
15	土師器 壺	—	(2.8)	(9.4)	ABIN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	25%	
16	土師器 壺	—	(4.3)	(5.8)	ADN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	25%	外面に黒斑
17	土師器 壺	34.8	—	13.0	BDGIK	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 100% 胴部 25%	内面に煤付着、磨滅、器台に転用？
18	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(12.0)	(3.6)	—	ABCK	にぶい黄橙 7/3	B	25%	外面に煤付着
19	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(12.8)	(10.0)	—	AGHM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	25%	外面に煤付着
20	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	12.8	(6.3)	—	ABDIN	外面：灰黄褐 10YR-5/2 内面：にぶい黄橙 10YR-7/2	B	40%	外面に煤付着
21	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(13.2)	(4.3)	—	ABCIN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	30%	外面若干煤ける
22	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	13.4	(3.8)	—	ABEGIKN	明赤褐 2.5YR-5/6	B	70%	外面に煤付着
23	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(13.6)	(3.7)	—	AEIJN	外面：にぶい黄褐色 10YR-5/3 内面：にぶい黄橙 10YR-7/2	B	15%	外面に煤付着
24	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(13.8)	(17.3)	—	ADJKM	外面：褐灰 7.5YR-6/1 内面：にぶい褐 7.5YR-5/3	B	20%	外面、内面上部に煤付着
25	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(14.2)	(7.3)	—	ABIN	浅黄橙 10YR-8/3	B	25%	
26	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(14.8)	(4.7)	—	ABI	外面：灰黄褐 10YR-6/2 内面：にぶい黄橙 10YR-7/2	B	10%	外面、内面上部に煤付着
27	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(14.8)	(7.5)	—	ABCGKN	外面：灰白 10YR-8/2 内面：浅黄橙 7.5YR-8/3	B	10%	外面若干煤ける
28	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	15.8	(5.4)	—	ABDJN	外面：にぶい黄褐 10YR-4/3 内面：にぶい黄橙 10YR-7/3	B	45%	外面、内面上部に煤付着
29	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	16.0	(5.6)	—	ABI	にぶい黄 2.5Y-6/3	B	60%	口縁部外面に煤付着
30	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	16.0	(5.7)	—	ABN	浅黄 2.5Y-7/4	B	10%	外面若干煤ける
31	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(16.2)	(9.6)	—	ABEKN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	25%	外面に煤付着
32	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	(17.0)	(5.3)	—	ABIN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	10%	外面、内面上部に煤付着

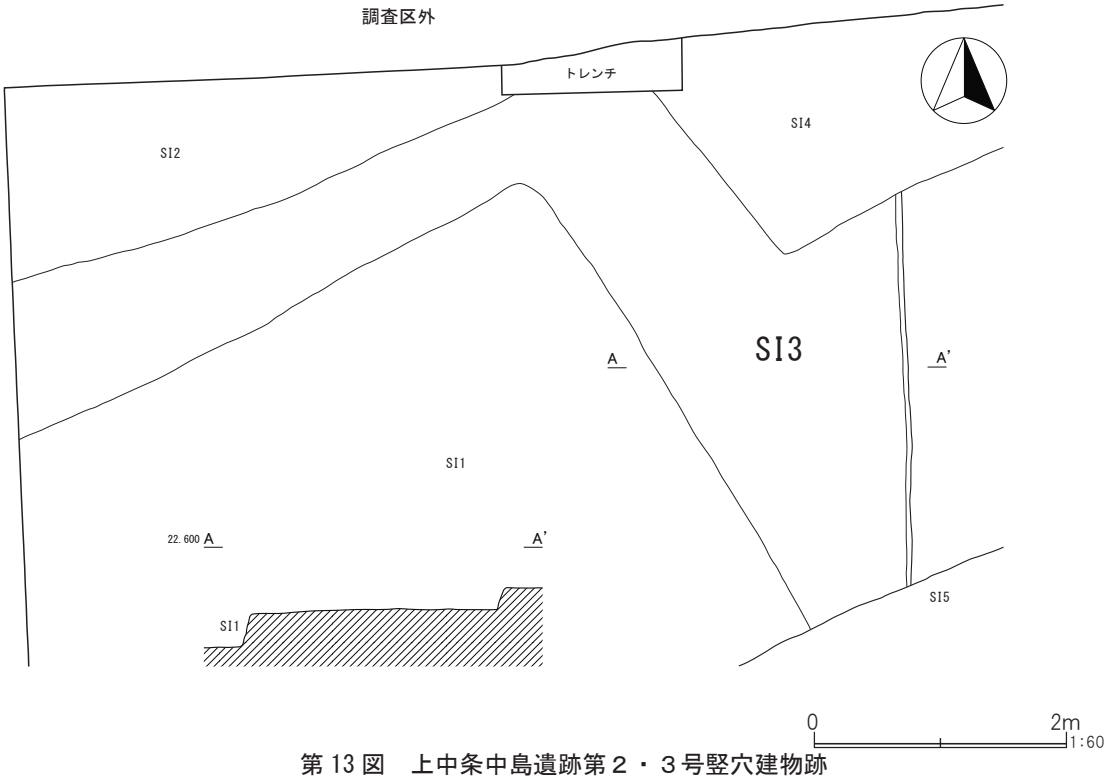
第２表　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第８～12図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
33	土師器 S字状口 縁台付甕	(19.0)	(4.5)	—	ABIN	外面：灰黄褐 10YR-5/2 内面：灰黄 2.5Y-7/2	B	10%	外面に煤付着
34	土師器 S字状口 縁台付甕	15.0	(11.5)	—	ABGJN	外面：灰白 5Y-7/1 内面：黄灰 2.5Y-6/1	B	70%	外面に煤付着
35	土師器 S字状口 縁台付甕	—	(8.5)	—	ABI	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	接合部 60%	内外面に煤付着
36	土師器 S字状口 縁台付甕	—	(9.3)	9.1	ABIN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	70%	胴部内外面に煤付着
37	土師器 S字状口 縁台付甕	—	(3.6)	(7.6)	ABI	にぶい橙 5YR-6/4	B	脚台部 25%	
38	土師器 S字状口 縁台付甕	—	(3.8)	(9.0)	ABD	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	脚台部 40%	外面若干煤ける
39	土師器 S字状口 縁台付甕	—	(4.0)	(9.8)	ABI	橙 5YR-7/6	B	脚台部 25%	
40	土師器 S字状口 縁台付甕	14.3	26.2	8.3	ABGHM	内面：にぶい 黄褐 10YR-5/3 外面：灰褐 7.5YR-4/2	A	70%	脚台部を除く内外面に煤付着
41	土師器 甕	(15.0)	(6.2)	—	DHI	浅黄橙 10YR-8/3	B	35%	口縁部外面に煤付着
42	土師器 甕	15.8	(6.1)	—	ABD	にぶい橙 5YR-7/3	B	60%	口縁部内外面に黒斑
43	土師器 甕	(15.6)	(6.8)	—	ABM	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	口縁部 10%	
44	土師器 台付甕	—	(4.3)	6.4	ADGHIM	橙 2.5YR-6/8	B	脚台部 95%	脚台部内面に煤付着
45	土師器 台付甕	—	(4.9)	8.4	ABHIKM	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	脚台部完存	
46	土師器 台付甕	—	(6.5)	10.0	ABM	淡黄 2.5Y-8/3	A	脚台部完存	接合部外面に煤付着
47	土師器 鉢	15.8	6.4	—	ABCIN	橙 5YR-7/6	B	100%	全面に赤彩 外面は磨滅著しく調整不明
48	土師器 鉢	(17.2)	(6.6)	—	ABDIN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	40%	
49	土師器 器台	—	(6.7)	9.9	ABCI	橙 5YR-6/6	A	脚部完形	透穴３
50	土師器 高坏	—	(4.9)	—	BIM	灰白 2.5Y-8/2	A	脚部 60%	外面は赤彩 透穴３
51	土師器 高坏	—	(7.8)	(11.6)	ABIN	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	脚部 85%	内外面とも若干煤ける 透穴４
52	土師器 高坏	—	(6.4)	(13.0)	ABI	にぶい黄橙 10YR-7/3	A	脚部 45%	内外面に黒斑 透穴３
53	土師器 高坏	—	(9.1)	(9.8)	ABDHN	橙 5YR-7/6	B	脚部 85%	透穴３
54	土師器 高坏	—	(10.4)	—	AEHKM	橙 5YR-6/8	A	脚部 90%	
55	土師器 砥石	最大長 13.9 最大幅 11.6 最大厚 6.2 重量 1147.0g							砂岩 台石を転用？
56	石器 砥石	最大長 9.6 最大幅 12.6 最大厚 5.3 重量 774.0g							

第３表　上中条中島遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第８～12図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
57	石器 敲石	最大長 16.0 最大幅 8.2 最大厚 4.2 重量 873g							
58	石器 軽石	最大長 2.9 最大幅 2.8 最大厚 2.8 重量 6.7g							砥石として使用？
59	羽口	最大長 2.0 最大幅 2.4 最大厚 2.0 重量 8.1g							
60	羽口	最大長 2.2 最大幅 3.3 最大厚 2.0 重量 7.2g							
61	羽口	最大長 3.2 最大幅 3.1 最大厚 2.1 重量 6.7g							
62	羽口	最大長 4.1 最大幅 5.0 最大厚 2.2 重量 24.0g							
63	鍛冶滓	最大長 2.8 最大幅 2.4 最大厚 1.4 重量 5.6g							
64	鍛冶滓	最大長 2.8 最大幅 3.9 最大厚 1.4 重量 10.0g							
65	鍛冶滓	最大長 3.8 最大幅 4.2 最大厚 1.3 重量 11.2g							





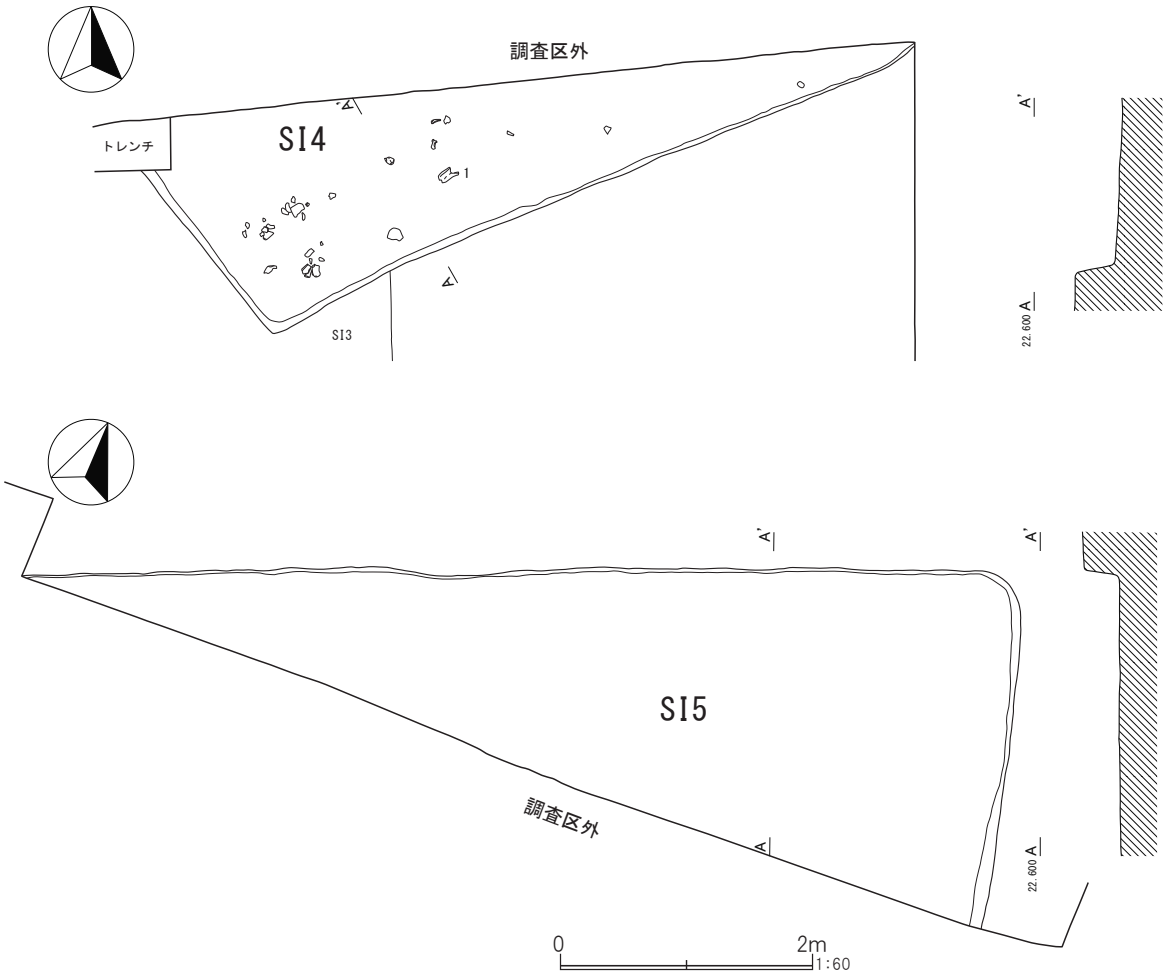
第13図　上中条中島遺跡第２・３号竪穴建物跡

４ 調査のまとめ

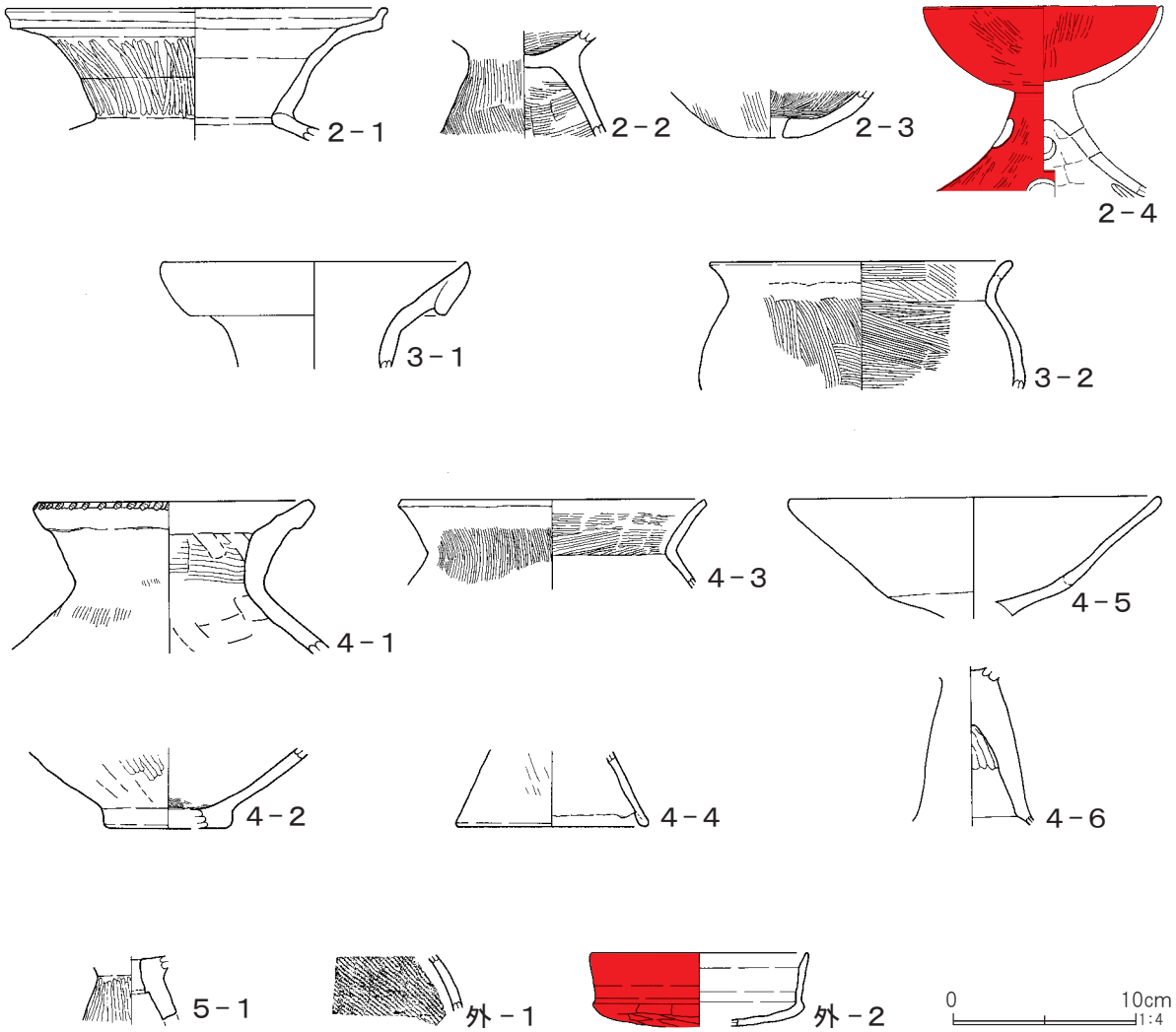
上中条中島遺跡は、古墳時代前期の竪穴建物跡５軒と多数の遺物が確認された。今回は、本調査箇所から特徴的な第１号竪穴建物跡について、検討してみたいと思う。

本遺構からは、小鍛冶跡が検出されている。これは、浅い楕円形の中に小穴が数カ所あり、中心部は還元し、周囲は赤変していた。遺物は、送風菅である「羽口」や鉄滓が細片状態で出土し、台石や砥石も確認されている。遺物が、小片化しているのは、小規模かつ短期間の稼働であり、残存状態も悪いためと考えられる。市内では、同時期の小鍛冶跡が成沢地内の成沢行人塚遺跡でも発見されている。

また、本遺構からは、覆土の中位から床面にかけて大量の遺物が出土した。調査時には、上層と下層に分けたが、遺物の内容・時期などに大きな変化はないようである。内容は、壺・Ｓ字状口縁台付甕が多く、小鍛冶跡の直上を中心に分布しているが、土器の表面に小鍛冶の痕跡は見られなかった。これは、建物跡廃絶後に不要となった土器を一括廃棄し、低い所に遺物が集中したためと考えられる。遺物は、東海地方西部の影響を受けたＳ字状口縁台付甕が多数出土し、第９図 17 のように口径 34 ㎝、推定高 90 ㎝の大形壺も出土している。このような壺は、東海地方駿河湾沿岸の「大廓式」土器との関連を指摘され、東海地方から北武蔵地域への集団移動を示唆する



第 14 図　上中条中島遺跡第４・５号竪穴建物跡



第 15 図　上中条中島遺跡第２～５号竪穴建物跡、遺構外出土遺物

ものとも考えられている(栗岡　2011 年)。今回の壺がこの「大廓式」土器に該当するかについては、もう少し検討が必要であるが、東海地方の影響を受けた土器が大量に廃棄されていることを考慮する必要がある。

まとめてみると、本遺構では、小鍛冶工房跡、建物廃絶後の一括廃棄、東海地方の影響を影響を受けた大量の土師器などの特徴が確認されている。ここから、古墳時代前期集落の様相が伺えるが、本遺跡を含めた周辺地域の検討が必要となる。これは、今後の展望としたい。

引用・参考文献

大宮市遺跡調査会　1989 『御蔵山中遺跡Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告第 26 集
熊谷市教育委員会　1963『熊谷市史』前編
熊谷市教育委員会　1980 『中条遺跡群・中島遺跡』
江南町教育委員会　1995 「行人塚遺跡」『江南町史　資料編 1 考古』
栗岡　潤　2011 「荒川流域出土の大廓式土器について」『研究紀要』第 25 号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮代町教育委員会　2019 『山﨑遺跡・山﨑山遺跡』宮代町文化財調査報告書第 15 集

第３表　上中条中島遺跡第２～５号竪穴建物跡、遺構外出土遺物観察表（第 15 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
2-1	土師器 壺	(21.0)	(7.3)	—	AHJMN	淡黄 2.5Y-8/3	A	口縁部 65%	
2-2	土師器 台付甕	—	(5.8)	—	ABHJM	浅黄橙 10YR-8/3	A	80%	外面・甕部内面に煤付着
2-3	土師器 甑	—	(2.6)	4.6	BHMN	橙 5YR-6/8	B	底部 70%	
2-4	土師器 高坏	(13.0)	(10.5)	—	ABEGKM	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部～ 脚部 50%	外面・坏部内面赤彩
3-1	土師器 壺	(17.0)	(5.8)	—	DMN	橙 5YR-6/8	B	口縁部 40%	磨滅著しく調整不明
3-2	土師器 甕	(16.6)	(7.0)	—	AEM	にぶい橙 2.5YR-6/4	B	口縁部 15%	口縁部外面にワヅミ痕
4-1	土師器 壺	(14.8)	(8.3)	—	ABHIKM	にぶい黄橙 10YR-7/2	A	30%	
4-2	土師器 壺	—	(4.4)	(7.0)	ADGHJM	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	底部 20%	
4-3	土師器 甕	(16.8)	(4.9)	—	AKM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部 20%	
4-4	土師器 Ｓ字状口 縁台付甕	—	(4.2)	(10.4)	AKM	橙 5YR-7/6	B	脚台部 15%	磨滅著しい
4-5	土師器 高坏	(20.4)	(6.5)	—	ABHKM	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	坏部 60%	磨滅著しい 内面に黒斑
4-6	土師器 高坏	—	(8.7)	—	ADKM	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	脚部 90%	磨滅著しい
5-1	土師器 器台	—	(3.6)	—	GKM	灰白 2.5Y-8/2	B	80%	
外 -1	土師器 壺	—	—	—	GJM	灰黄 2.5Y-7/2	B		単節縄文ＲＬ
外 -2	土師器 坏	(12.0)	(4.0)	—	AM	橙 5YR-6/6	A	10%	口縁部外面赤彩

諏訪木遺跡 Ⅶ

Ⅲ　諏訪木遺跡の調査

１　発掘調査の概要

⑴　調査に至る経緯

諏訪木遺跡の調査は、建築主（腰塚あさ子氏）との調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

令和２年４月 10 日付けで、埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市上之字秋葉 2885 番４地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№.59 － 016　諏訪木遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、令和２年６月８日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下 115 ㎝で古墳時代から中世までの遺物・遺構が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり柱状改良を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を令和２年６月 18 日付け熊教社埋第 122 号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに令和２年６月 18 日付け教文資第５－ 450 号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事ついての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第 99 号第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、令和２年６月 23 日付け熊教社埋第 122 号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、第２次調査が平成 30 年６月 23 日から８月 11 日にかけて実施した。調査面積は、113.93 ㎡であった。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行ない、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、土坑、溝跡、ピットで、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。最後に、重機による埋め戻しや器材の撤収を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、令和３年４月から令和４年３月にかけて実施した。まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと併行して遺構の図面整理を行った。また、遺構の整理に当たって、第４表のとおり遺構の見直しを図り、遺構番号の振替を行った。

次に、遺物のトレースを行い、図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理、遺物写真撮影を行い、写真図版の割付けをした。これと並行して原稿執筆を行った。最後に印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

⑶　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者　　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

令和２年度

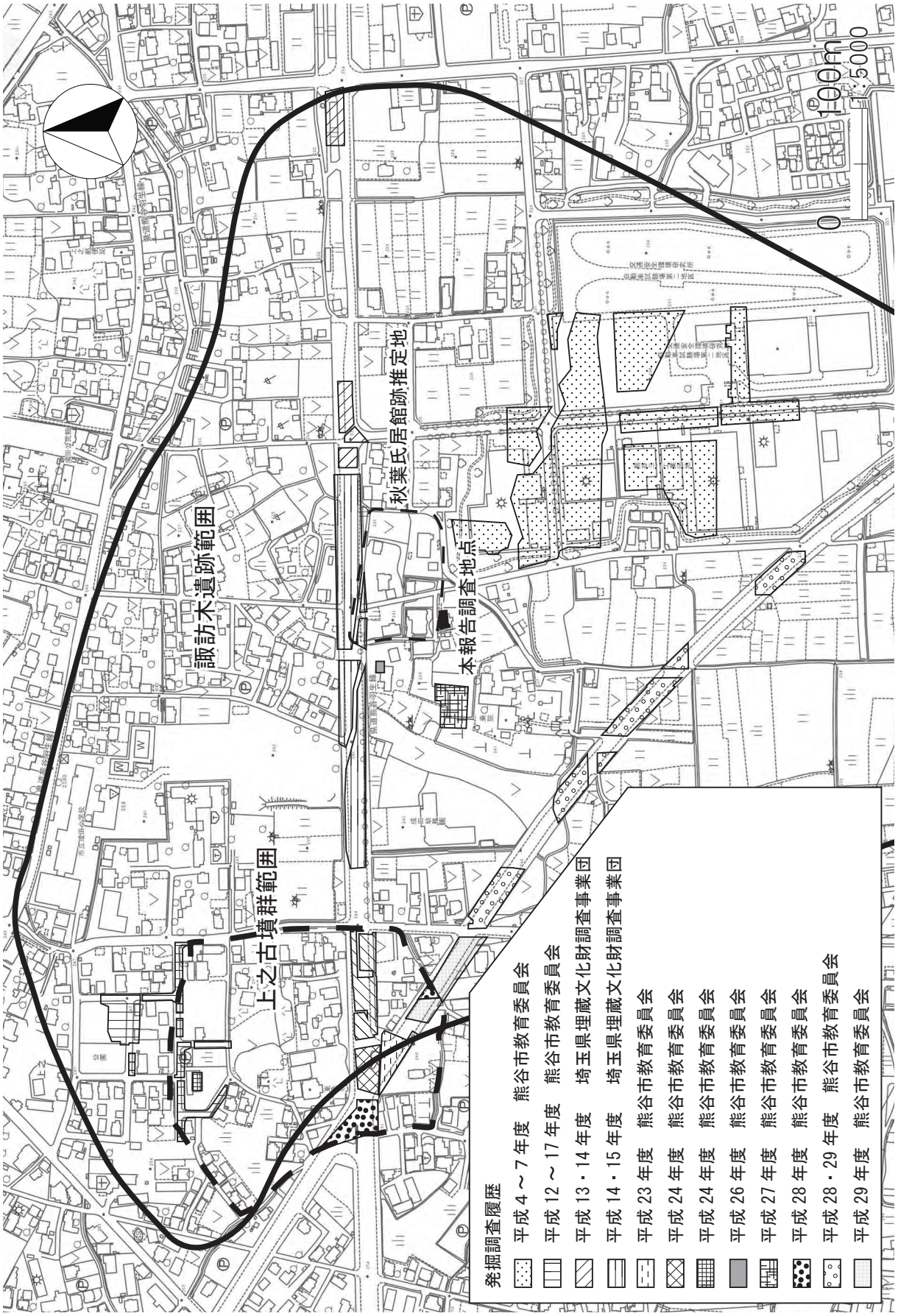
教育長		野原　　晃
教育次長		田島　　斉
社会教育課長		三友　孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事		吉野　　健
社会教育課業務主幹兼文化財保護係長		松田　　哲
	主査	星　　祥子
	主査	小島　洋一
	主任	山下　祐樹
	主任	腰塚　博隆
	主任	新井　　端
	主事	山川亜希子
	主事	山川　守男
	主事	大野美知子
	発掘調査員	礒﨑　　一

イ　整理・報告書作成事業

組織ついては、第Ⅱ章及び第Ⅲ章と同一であるため、記述を省略することとし、第Ⅱ章及び第Ⅲ章を参照されたい。

第４表　諏訪木遺跡遺構番号新旧対照表（左：新番号　右：旧番号）

土坑（SK）		溝跡（SD）		ピット（P）	
1	SD03	1	SD01	1	P01
2	SK02	2	SD02	2	P02
3	SK03	3	SD07	3	P03
		4	SD06	4	P04
		5	SD05	5	P05



第 16 図　諏訪木遺跡調査地点位置図

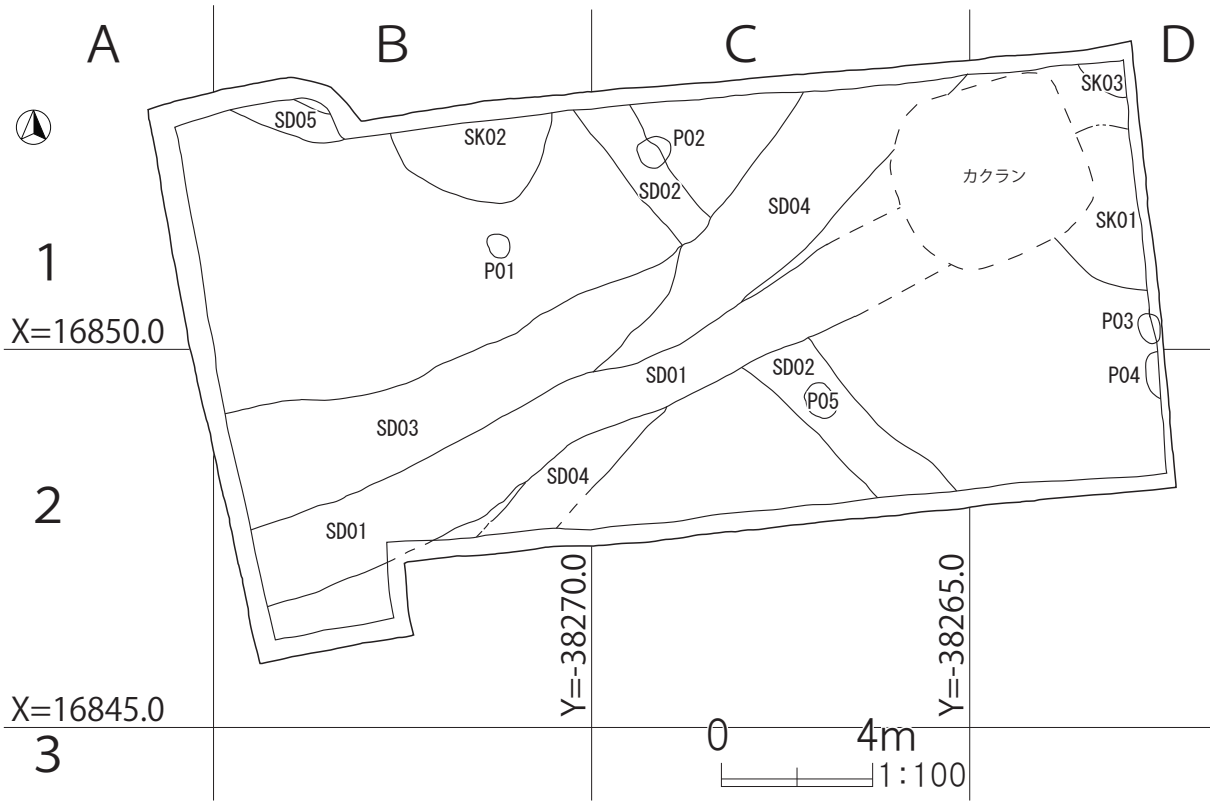
2　遺跡の概要

⑴　諏訪木遺跡について

諏訪木遺跡は、熊谷市東部やや西寄り荒川左岸、標高は 22 ～ 26 ｍの妻沼低地の微高地に位置する遺跡である。その範囲は、面積 780,000 ㎡と広大であり、東西に長く約 1,050 ｍ、南北は約 850 ｍを図る規模である。

本遺跡は、西に弥生時代中期後半～後期初頭の関東屈指の大規模集落である前中西遺跡、東に弥生時代中期中葉の大溝を伴う集落跡や平安時代の掘立柱建物跡を中心とする古代の官衙的要素をもつ集落跡の池上遺跡、池上遺跡に隣接して弥生時代中期前半の方形周溝墓が検出されている行田市小敷田遺跡、北に弥生時代前期末～後期の生産域を伴う集落跡や７世紀後半から 11 世紀まで続いた地域有力者層の居宅と考えられる大規模集落跡の北島遺跡が所在する歴史的環境にある。特に弥生時代中期～後期の時期には、集落が集中して形成された地区である。

本遺跡の所在を知る端緒は、平成４年から７年にかけて実施されたミニ工業団地造成事業に伴う発掘調査であり、その箇所は現遺跡範囲の東部中央に位置する。その後、現在も進捗中の上之土地区画整理事業に伴う試掘・発掘調査、県道熊谷羽生線建設工事、市道 137 号線道路改良工事、民間の共同住宅建設工事等様々な原因で実施された発掘調査を重ね、遺跡が東西南北に広く分布することが判明し、現在の規模の遺跡範囲となった。上之土地区画整理事業に伴う発掘調査は毎年のように実施され、本遺跡範囲においては、数多くの調査が実施され、令和元年度までに 27 次（諏訪木Ⅵによる）に及ぶ。本遺跡の北西端の一部は古墳時代後期の群集墳である上之古墳群の遺跡



第 17 図　諏訪木遺跡調査区全測図

範囲が重複しており、当該古墳では墳丘が現存する古墳を含めて３基確認されている（第 16 図）。

これらの調査により、遺跡全体では、縄文時代後期から江戸時代までに及ぶ複合遺跡であると判明している。

⑵　調査の方法

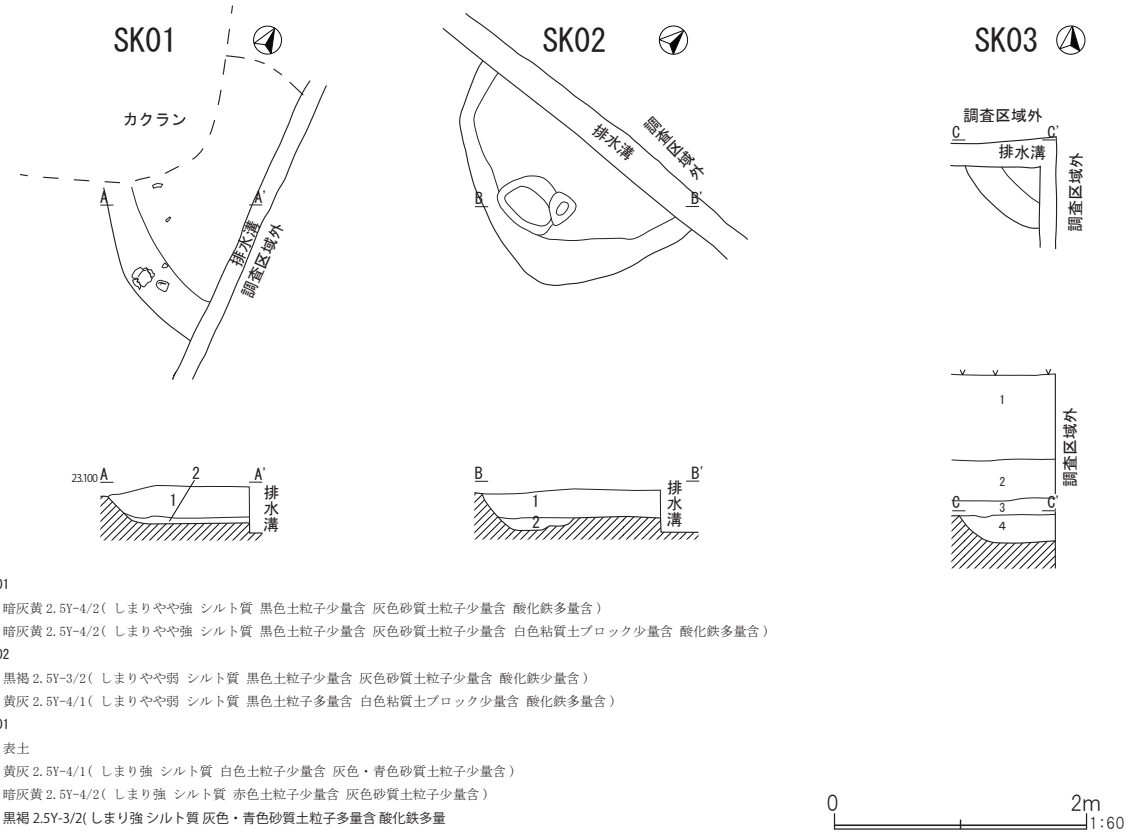
調査の方法は、世界測理系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように１辺５ｍのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体を把握できるように、北西隅をＡ－１として東へＡ・Ｂ・Ｃ、南へ１・２・３とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３・・・と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で１ｍ間隔メッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

⑶　検出された遺構と遺物

今回の調査地点は、遺跡範囲の中央部に位置し、平成 14・15 年度の県道熊谷羽生線建設工事に伴う調査地点の南側に位置し、平成４～７年度のミニ工業団地造成に伴う調査地点の西側に位置し、平成 24 年度の一条院駐車場造成に伴う調査地点の東側に位置する。

検出された遺構は、土坑３基、溝跡が５条、ピット５基であった。遺物については、土師器、



第 18 図　諏訪木遺跡第１～３号土坑

瓦陶磁器を中心に出土し、出土遺物の総量はコンテナにして１箱であった。

３　遺構と遺物

⑴　土坑

第１号土坑（第 18、19 図、第５表）

調査区の東側に位置する。Ｄ－１グリッドにある。東側は調査区外になる。西側は攪乱で切られている。平面形は検出長軸 2.0 ｍ、検出短軸 1.1 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.50m を測る。床面は、平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積土であり、自然体積と考えられる。

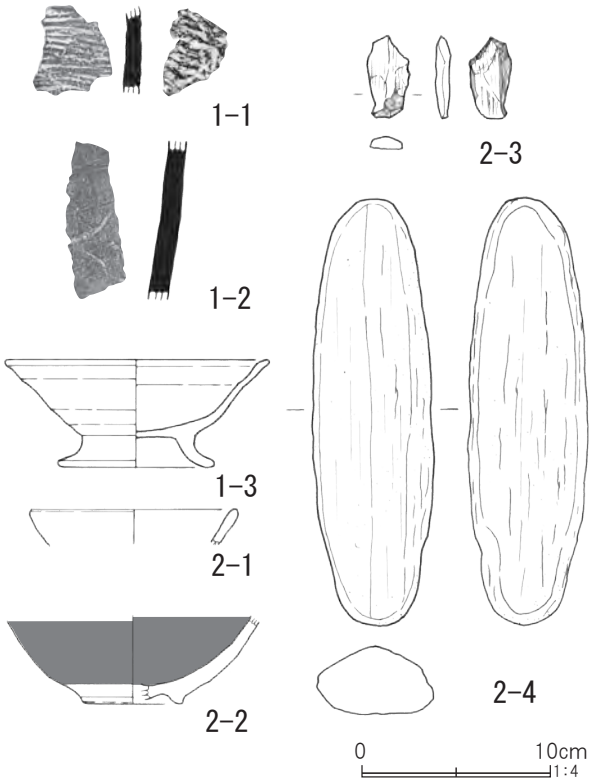
出土遺物は、ロクロ土師器高台坏、須恵器甕が出土した。

時期は、出土遺物 10 世紀後半～ 11 世紀前半と考えられる

第２号土坑（第 18、19 図、第５表）

調査区のやや中央の北端部に位置する。Ｂ－１グリッドにある。北側は調査区外になる。平面形は検出長軸 2，12 ｍ、検出短軸 1.07 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.32m を測る。床面はほぼ平坦である。

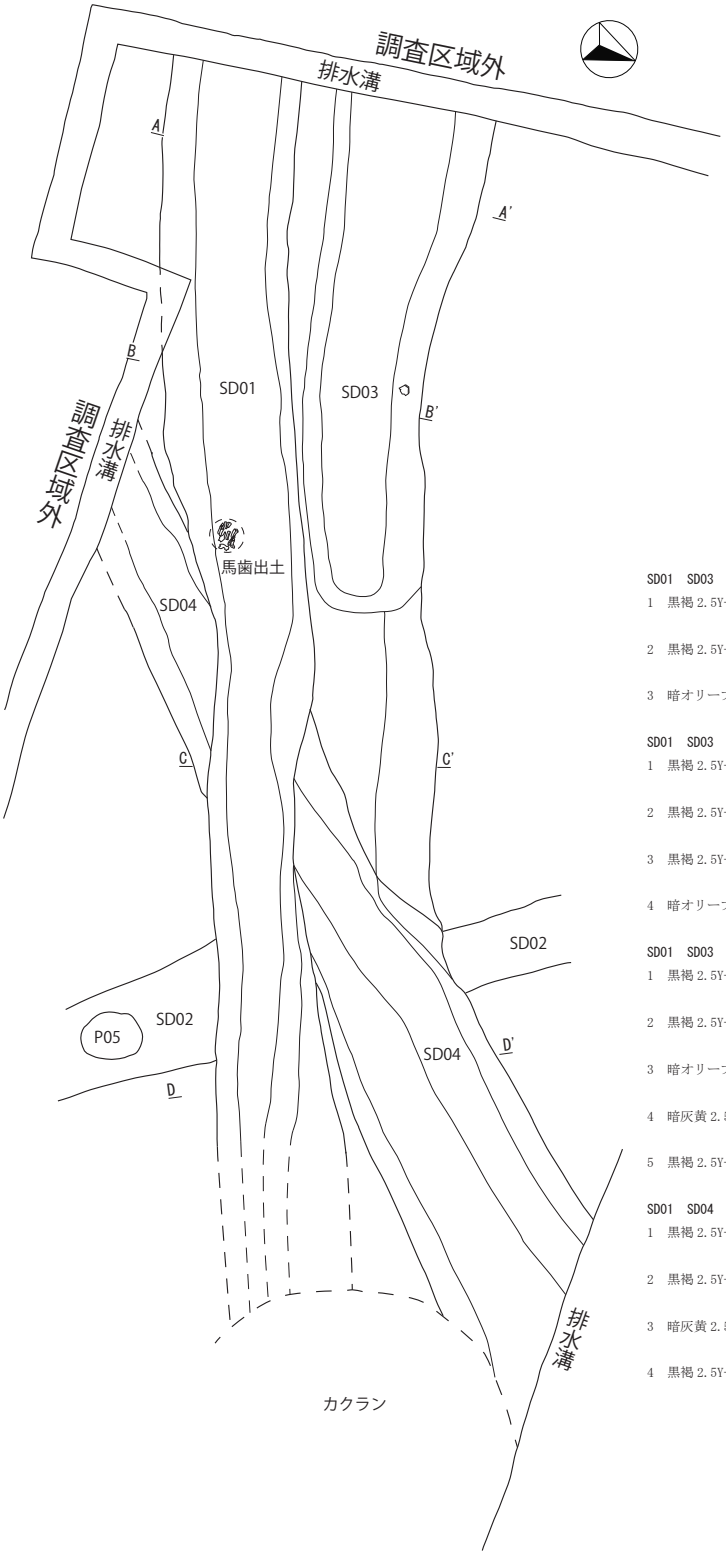
埋土は、レンズ状の堆積土であり、自然体積と考えられる。

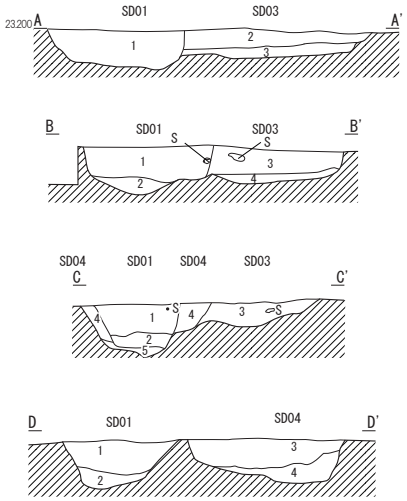


第 19 図　諏訪木遺跡第１・２号土坑出土遺物

第５表　諏訪木遺跡第１・２号土坑出土遺物観察表（第 19 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1-1	須恵器 甕	—	—	—	ABDH	灰 5Y-6/1	B	胴部片	外面：縄目状叩き痕 内面：同心円状のあて具痕
1-2	須恵器 甕	—	—	—	ADFHMN	外面：にぶい褐 7.5YR-5/4 内面：灰 5Y-5/1	B	胴部片	南比企産
1-3	ロクロ土師器 高台坏	(14.0)	5.7	8.3	AEN	橙 5YR-6/6	B	70%	10C 後半～ 11C 前半か 高脚高台坏
2-1	土師質土器 坏	(10.8)	(1.8)	—	ABDEHIJ	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部 10%	17C 以降
2-2	陶器 碗	—	(4.7)	(5.4)	D	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	底部 20 %	肥前系（唐津）　唐津碗力鉢 17C 後半 三日月高台
2-3	石製模造品	最大長 4.3　最大幅 2.2　最大厚 0.8　重量 9.7 g							滑石 剣型未製品か
2-4	石器 磨石	最大長 22.6　最大幅 6.4　最大厚 3.6　重量 741 g							白雲母片岩





SD01　SD03　A-A'

1　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含 炭化物粒子少量含 酸化鉄少量含)

2　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 赤色土粒子少量含 白色粘質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

3　暗オリーブ褐 2.5Y-3/3(しまりやや強 シルト質 白色粘質土ブロック少量含 灰色砂質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

SD01　SD03　B-B'

1　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含 炭化物粒子少量含 酸化鉄少量含)

2　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 赤色土粒子少量含 白色粘質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

3　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 赤色土粒子少量含 白色粘質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

4　暗オリーブ褐 2.5Y-3/3(しまりやや弱 シルト質 白色粘質土ブロック少量含 灰色砂質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

SD01　SD03　SD04　C-C'

1　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含 炭化物粒子少量含 酸化鉄少量含)

2　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 赤色土粒子少量含 白色粘質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

3　暗オリーブ褐 2.5Y-3/3(しまりやや弱 シルト質 白色粘質土ブロック少量含 灰色砂質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

4　暗灰黄 2.5Y-4/2(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含 灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄少量含)

5　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや強 シルト質 白色・黒色土粒子少量含 白色粘質土粒子少量含 白色粘質土ブロック少量含 酸化鉄少量含)

SD01　SD04　D-D'

1　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含 炭化物粒子少量含 酸化鉄少量含)

2　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 赤色土粒子少量含 白色粘質土粒子多量含 酸化鉄多量含)

3　暗灰黄 2.5Y-4/2(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子少量含　灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄少量含)

4　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや強 シルト質 白色・黒色土粒子少量含 白色粘質土粒子少量含 白色粘質土ブロック少量含 酸化鉄少量含)

0　2m　1:60

第 20 図　諏訪木遺跡第１・３・４号溝跡

出土遺物は、土師質土器坏、陶器碗、石製模造品、磨石が出土した。

時期は、不明である。

第３号土坑（第 18・19 図、第５表）

調査区の北東端部に位置する。Ｄ－１グリッドにある。北東側は調査区外になるため、南側のみ立ち上がりが確認できた。平面形は検出長軸 0.57 ｍ、検出短軸 0.45 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.22m を測る。床面は、平坦である。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

⑵　溝跡

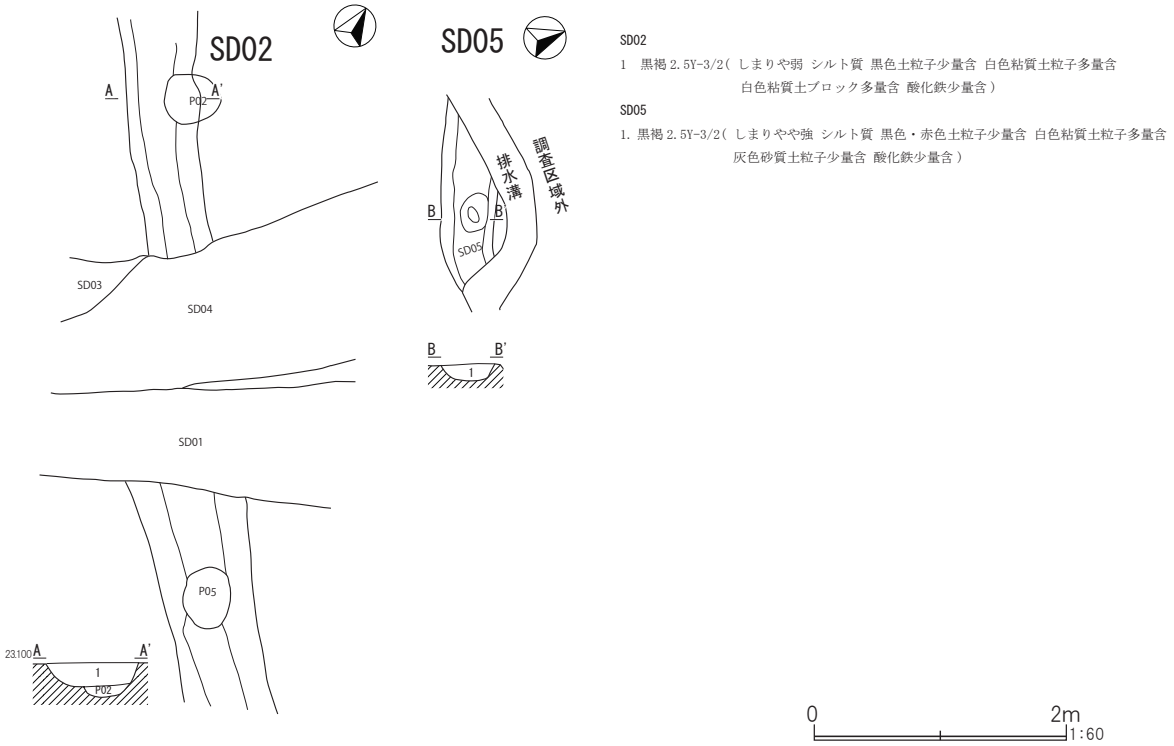
第１号溝跡（第 20、22、23 図、第６表）

調査区の中央部の南寄りに位置し、東西方向に走る。Ｂ・Ｃ－１・２グリッド内にある。北側は攪乱に切られる。第２～４号溝跡と重複し、本遺構は、第２～４号溝跡を切り、東側は攪乱に切られている。

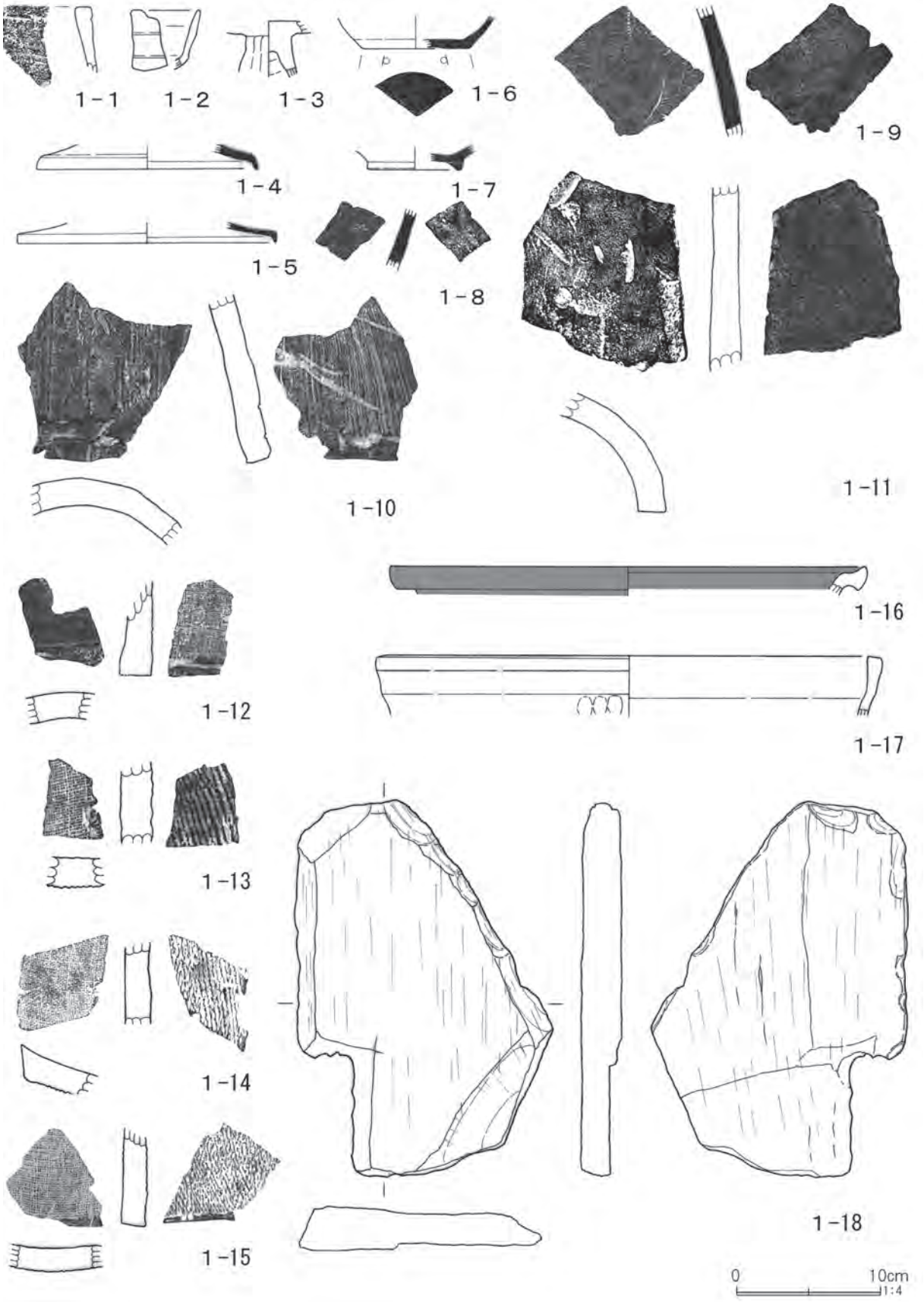
規模については、西側が調査区外となり、東側が攪乱に切られているが、検出最大長軸 8.72 ｍ、検出最大短軸 1.02 ｍを測る。走行軸の方位はほぼ東西であり、東西走行方向箇所は概ねＮ－ 66°－Ｅを示す。

深さは、遺構確認面から最深で 0.4m を測る。床面は平坦である。

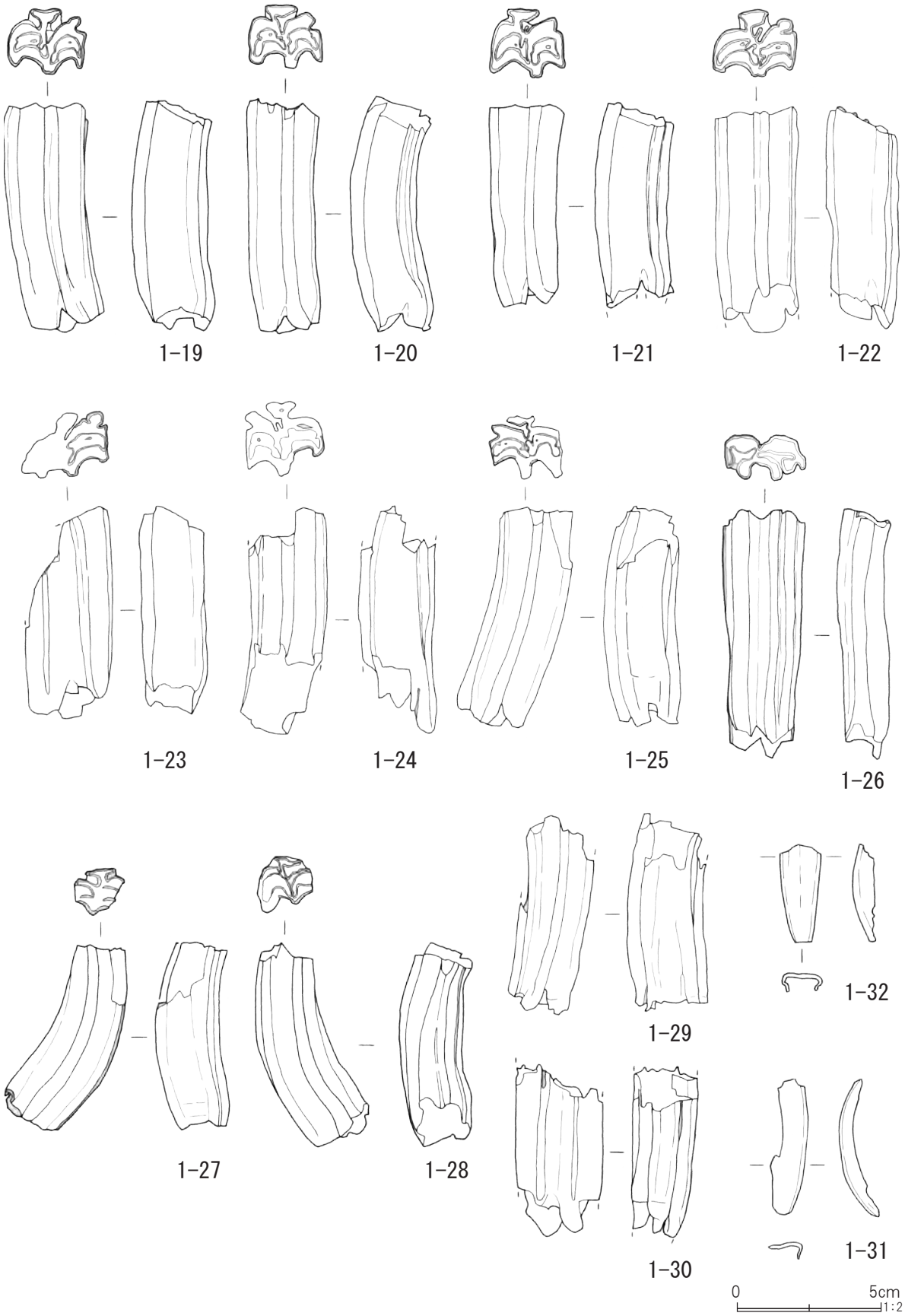
埋土は、レンズ状堆積土のため、自然堆積と考えられる。



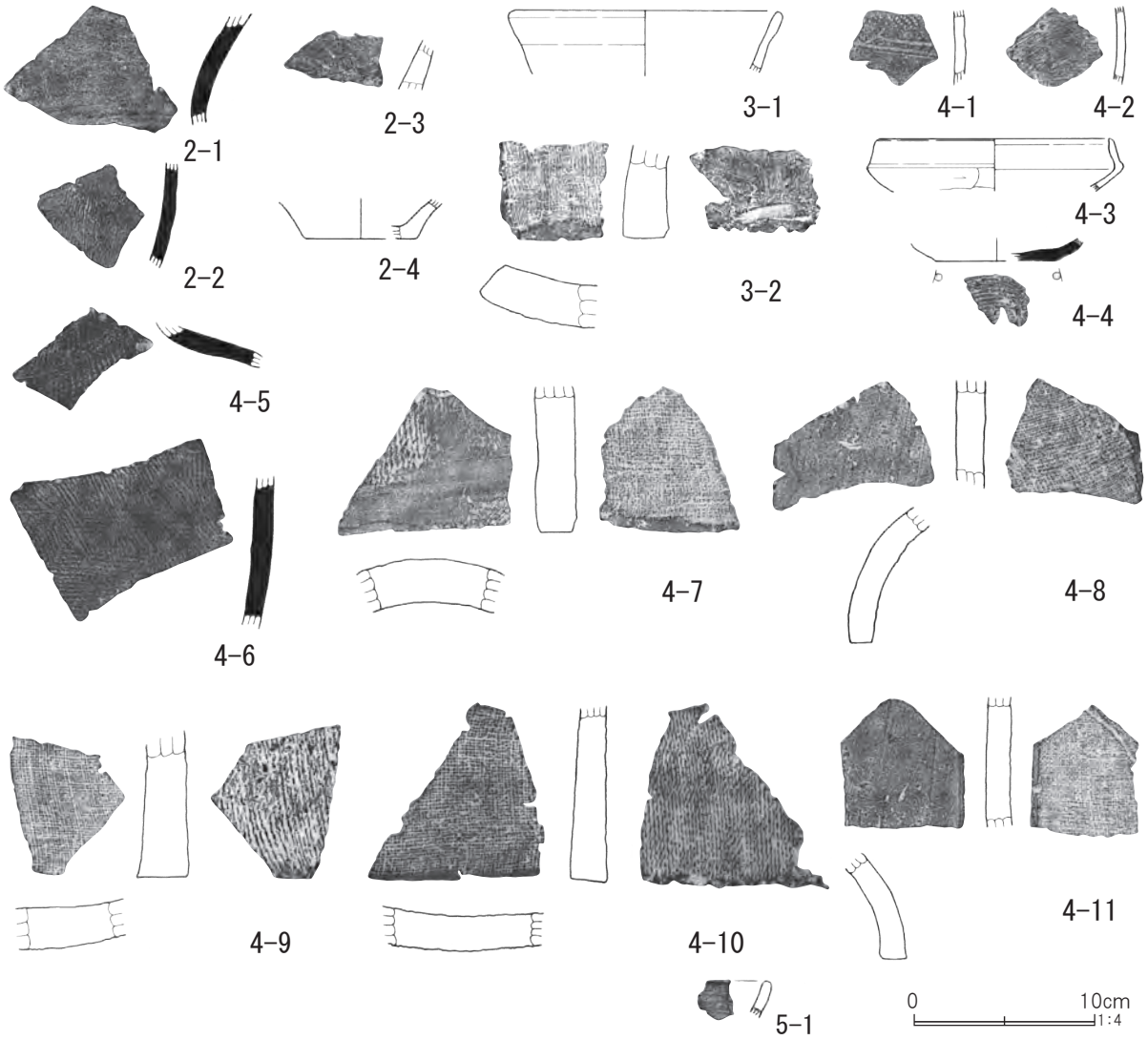
第 21 図　諏訪木遺跡第２・５号溝跡



第 22 図　諏訪木遺跡第 1 号溝跡出土遺物（1）



第 23 図　諏訪木遺跡第１号溝跡出土遺物（２）



第 24 図　諏訪木遺跡第２～５号溝跡出土遺物

第６表　諏訪木遺跡第１～５号溝跡出土遺物観察表（第 22 ～ 24 図）

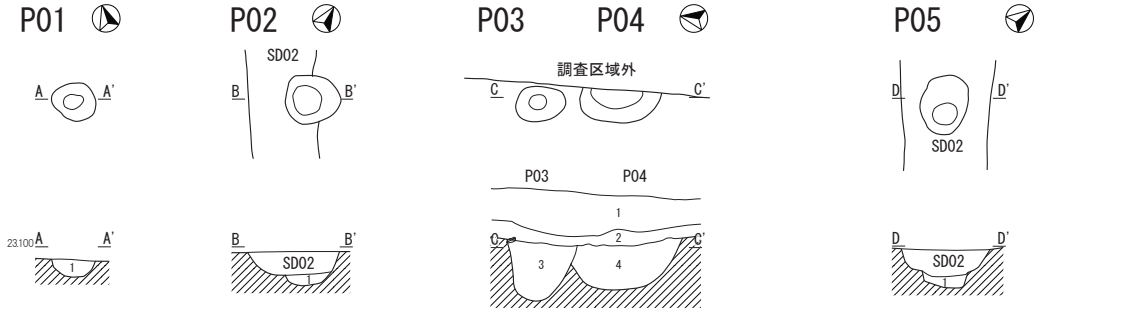
図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDEGIK	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	全体的に摩滅 ヨコ方向の竹管連続刺突文 沈線 後～晩期
1-2	土師器 坏	—	—	—	ABCGILM	橙 5YR-6/8	B	口縁部片	有段口縁坏
1-3	土師器 高坏	—	(3.8)	脚頸径 3.1	ABDEGHI	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	脚部片	外面：タテ方向のナデ 内面：ヨコ方向のナデ
1-4	須恵器 蓋	(15.3)	(1.7)	—	ABF	黄灰 2.5Y-6/1	A	10%	南比企産
1-5	須恵器 蓋	(18.0)	(1.4)	—	ABF	灰 N-5/	A	10%	
1-6	須恵器 坏	—	(2.3)	(7.5)	AFN	灰 N-5/	A	底部 25 %	底部周辺へラケズリ 南比企産
1-7	須恵器 高台坏	—	(1.7)	(6.6)	ADHMN	灰白 5Y-6/1	B	底部 20 %	全体的に摩滅
1-8	須恵器 甕	—	—	—	AFMN	暗灰 N-3/	B	破片	外面：自然釉か
1-9	須恵器 甕	—	—	—	AFMN	灰 N-4/	A	破片	外面：ヨコ方向のハケ目、 自然釉 内面：ヨコ方向のナデ

第６表　諏訪木遺跡第１～５号溝跡出土遺物観察表（第 22 ～ 24 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
1-10	丸瓦	厚さ 1.6 ～ 1.8 cm			ADHMN	灰褐 7.5YR-6/2	B	破片	凸面：タテ方向ヘラナデ 凹面：布目状の叩き→タテ方向ヘラナデ
1-11	丸瓦	厚さ 1.7 ～ 2.0 cm			DIM	灰白 2.5Y-8/2	B	破片	凸面：ナデ 凹面：布目状の叩き
1-12	丸瓦	厚さ 1.8 ～ 2.2 cm			AB	灰 N-6/	B	破片	凸面：ヨコ方向のナデ 凹面：布目状の叩き
1-13	平瓦	厚さ 2.0 ～ 2.3 cm			BD	灰白 5Y-7/1	B	破片	8C 代
1-14	平瓦	厚さ 1.7 ～ 2.0 cm			BD	灰 5Y-6/1	B	破片	凸面：縄目状の叩き 凹面：布目丈の叩き
1-15	平瓦	厚さ 1.6 ～ 1.8 cm			ABDH	灰 5Y-4/1	B	破片	凸面：縄目状の叩き 凹面：布目状の叩き
1-16	陶器 擂鉢	28.6	2.0	—	ABMN	暗赤褐 5YR-3/6	B	口縁部 10%	内外面：錆釉 瀬戸美濃系、17C 後半
1-17	瓦質土器 焙烙	(33.0)	(4.1)	—	BDGIN	灰 5Y-5/1	B	口縁部 10%	16 ～ 17C
1-18	石製品 砥石	最大長 26.2 最大幅 17.8 最大厚 3.0 重量 1832 g							緑泥石片岩 板碑を転用か
1-19	馬歯	最大長 8　最大幅 2.8 最大厚 2.5 重量 44.1 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-20	馬歯	最大長 8.2 最大幅 2.5 最大厚 2.2 重量 42.1 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-21	馬歯	最大長 7 最大幅 2.6 最大厚 2.5 重量 33.0 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-22	馬歯	最大長〔7.8〕最大幅 2.8 最大厚 2.5 重量 37.1 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-23	馬歯	最大長〔7.3〕最大幅 3.1 最大厚 2.2 重量 25.2 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-24	馬歯	最大長〔7.9〕最大幅 2.7 最大厚 2.6 重量 30.4 g							上顎臼歯か
1-25	馬歯	最大長 7.5 最大幅 2.6 最大厚 2.5 重量 39.4 g							上顎臼歯か
1-26	馬歯	最大長 8.6 最大幅 2.8 最大厚 1.6 重量 27.6 g							下顎臼歯か
1-27	馬歯	最大長 6.8 最大幅 2.4 最大厚 2.2 重量 30.4 g							上顎臼歯か
1-28	馬歯	最大長 7.1 最大幅 2.4 最大厚 2.2 重量 30.6 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-29	馬歯	最大長〔6.7〕最大幅 2.3 最大厚 2.5 重量 27.2 g							上顎臼歯か　一部に光沢有
1-30	馬歯	最大長〔5.9〕最大幅 3 最大厚 2.2 重量 19.9 g							上顎臼歯か
1-31	馬歯	最大長〔3.4〕最大幅〔1.4〕最大厚〔0.6〕 重量 1.4 g							
1-32	馬歯	最大長〔4.8〕最大幅〔1.2〕最大厚〔0.6〕 重量 1.9 g							
2-1	須恵器 壺	—	—	—	ABGIN	灰 N-5/	A	頸部片	
2-2	須恵器 甕	—	—	—	ABDGHMN	褐灰 10YR-6/1	B	胴部片	外面：ハケ目状工具
2-3	瓦質土器 片口鉢	—	—	—	ABDGHM	橙 7.5YR-7/6	B	胴部片	擂鉢か
2-4	土師質土器 坏	—	(2.2)	(6.4)	ADEHJM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	底部 30 %	
3-1	土師器 鉢	(14.5)	(3.4)	—	ABDIK	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	口縁部片	
3-2	平瓦	厚さ 2.2 ～ 2.5 cm			ABEGHMN	橙 7.5YR-6/6	B	破片	凸面：ヘラナデ 凹面：布目状の叩き 8C 代か
4-1	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIM	暗褐 10YR-3/4	B	破片	上部に縄文 中央に 2 条のヨコ方向の沈線

第６表　諏訪木遺跡第１～５号溝跡出土遺物観察表（第 22 ～ 24 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
4-2	土師器 甕	—	—	—	ABHILMN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	ヨコ方向のハケ目
4-3	土師器 坏	(12.7)	(3.0)	—	AB	橙 7.5YR- 7/6	B	10%	坏身模倣坏 底面丸底　ヘラケズリ
4-4	須恵器 坏	—	(1.2)	(7.8)	ADHIN	外面：灰白 7.5Y-7/1 内面：にぶ い褐 7.5YR- 6/3	B	底部 10 %	底面：回転糸切
4-5	須恵器 壺	—	—	—	AGHN	灰 N-4/	A	胴部片	
4-6	須恵器 甕	—	—	—	ABGHJMN	暗灰 N-3/	A	破片	外面：平行叩き 内面：ヘラナデ
4-7	丸瓦	厚さ 2.2 ～ 2.3 cm			ABIN	灰 N-4/	B	破片	凸面：縄目状叩き→ヨコ方向ナデ 凹面：布目状の叩き
4-8	丸瓦	厚さ 1.4 ～ 1.5 cm			ABDGHIMN	灰 7.5Y-6/1	B	破片	凸面：タテ方向ヘラナデ 凹面：布目状の叩き
4-9	平瓦	厚さ 2.0 ～ 2.7 cm			ABDIN	褐灰 10YR- 5/1	B	破片	凸面：縄目状の叩き 凹面：布目状の叩き
4-10	平瓦	厚さ 1.5 ～ 2.1 cm			ABGHM	灰 N-5/	A	破片	凸面：縄目状の叩き 凹面：布目状の叩き
4-11	丸瓦	厚さ 1.2 ～ 1.4 cm			D	灰白 5Y-7/1	B	破片	凸面：タテ方向ヘラナデ 凹面：布目状の叩き
5-1	土師質土器 坏	—	—	—	ABCIJ	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	17C 以降



P01
1　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 黒色土粒子少量含 白色粘質土粒子少量含 灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄少量含)
P02
1　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや弱 シルト質 黒色土粒子少量含 白色粘質土粒子少量含 酸化鉄少量含)
P0304
1　黄灰 2.5Y-4/1(しまり強 シルト質 白色土粒子少量含 灰色砂質土粒子少量含 青色砂質土粒子少量含)
2　暗灰黄 2.5Y-4/2(しまり強 シルト質 赤色土粒子少量含 灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄少量含)
3　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや強 シルト質 黒色・赤色土粒子少量含 炭化物粒子少量含 灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄多量含)
4　黒褐 2.5Y-3/2(しまりやや強 シルト質 黒色土粒子多量含 灰色砂質土粒子少量含 酸化鉄多量含)
P05
1　黒褐 2.5Y-3/1(しまりやや弱 シルト質 黒色土粒子少量含 白色粘質土粒子少量含 酸化鉄少量含)

0　2m
1:60

第 25 図　諏訪木遺跡第１～５号ピット

第７表　諏訪木遺跡ピット一覧表（第 25 図）

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	B-1	楕円形	35	30	13		不明		
P02	C-1	楕円形	45	35	23		不明	SD02	
P03	D-1	楕円形	39	27	45		不明		
P04	D-2	楕円形	63	(25)	35		不明		
P05	C-2	楕円形	45	37	30		不明	SD02	

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、瓦質土器、砥石、馬歯が出土した。

馬歯は、1箇所にまとまって14点出土した。ほとんどが、上顎歯であり、１－26は、下顎歯の一部、１－31、32は破片と考えられる。検出時に、上顎骨の一部らしきものも検出されたが、非常に脆く図化できなかった。

時期は、不明である。

第２号溝跡（第21、24図、第６表）

調査区のやや東寄りの中央部に位置し、ほぼ南北方向に走る。Ｂ－１及びＣ－１・２グリッド内にある。第１、４号溝跡、ピット２、５と重複する。ピット２、５を切り、第１、４号溝跡に切られる。

規模については、北側及び南側が調査区外となるが。検出長軸6.87ｍ、検出短軸0.45ｍを測る。走行軸の方位はほぼ東西であり、東西走行方向箇所は概ねＮ－142°－Ｅを示す。

深さは、遺構確認面から最深0.16mを測る。床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、須恵器、瓦質土器、土師質土器が出土した。

時期は、不明である。

第３号溝跡（第20・24図、第６表）

調査区の中央部の南寄りに位置し、ほぼ東西方向に走る。Ｂ－１・２及びＣ－１・２グリッド内にある。第１、４号溝跡と重複する。第１、４号溝跡に切られる。

規模については、西側が調査区外となるが。検出長軸6.10ｍ、検出短軸1.51ｍを測る。走行軸の方位はほぼ東西であり、東西走行方向箇所は概ねＮ－72°－Ｅを示す。

深さは、遺構確認面から最深0.21mを測る。床面は平坦である。

埋土は、レンズ状堆積土のため、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師器、瓦が出土した。

時期は、不明である。

第４号溝跡（第20、24図第６表）

調査区の中央部の南寄りに位置し、ほぼ東西方向に走る。Ｃ－１・２グリッド内にある。第１～３号溝跡と重複する。第２、３号溝跡を切り第１溝跡に切られる。

規模については、西側及び東側が調査区外となるが。検出長軸7.28ｍ、検出短軸1.38ｍを測る。走行軸の方位はほぼ東西であり、東西走行方向箇所は概ねＮ－39°－Ｅを示す。

深さは、遺構確認面から最深0.22mを測る。

埋土は、単層の堆積土である。

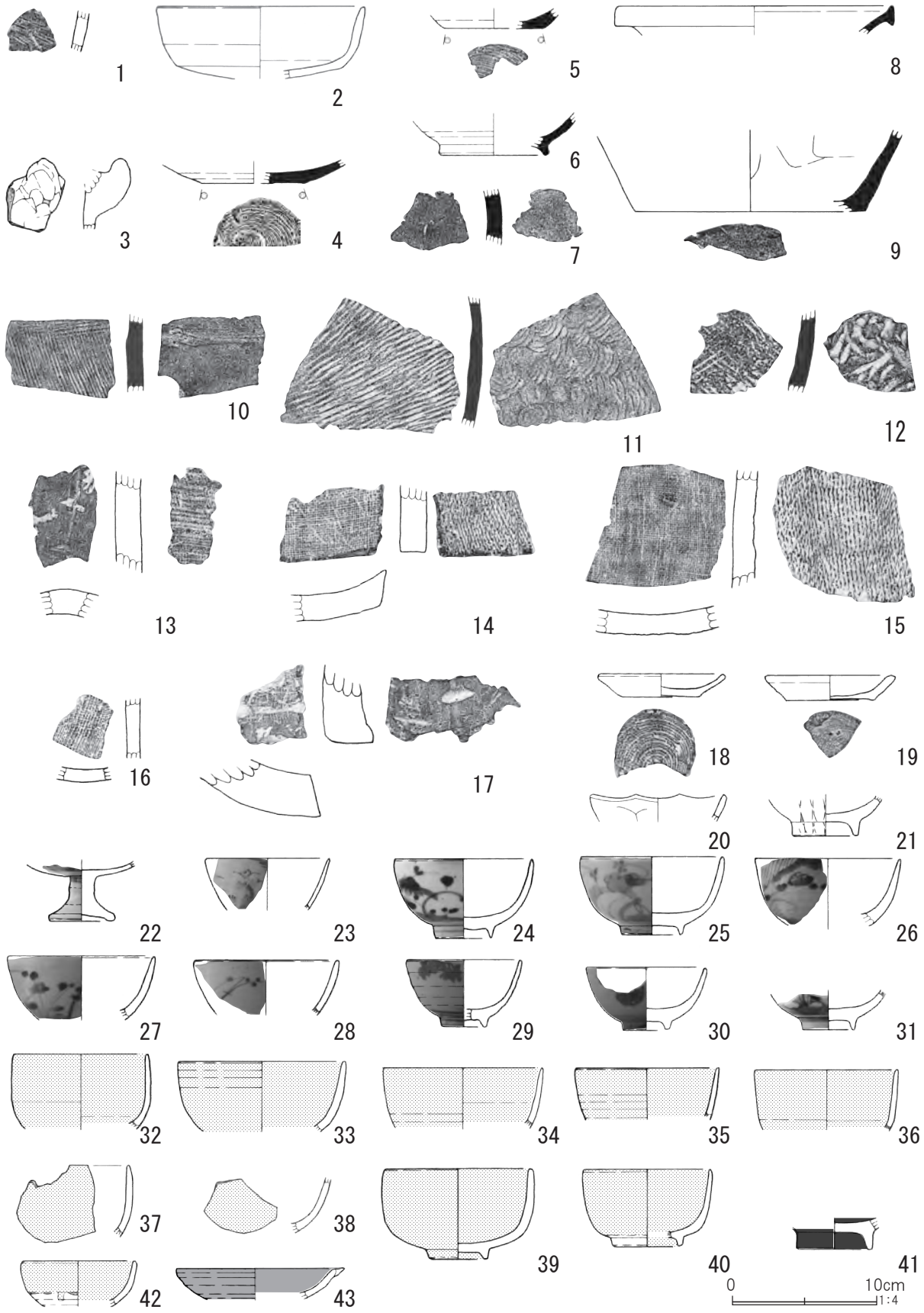
出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦が出土した。

時期は、不明である。

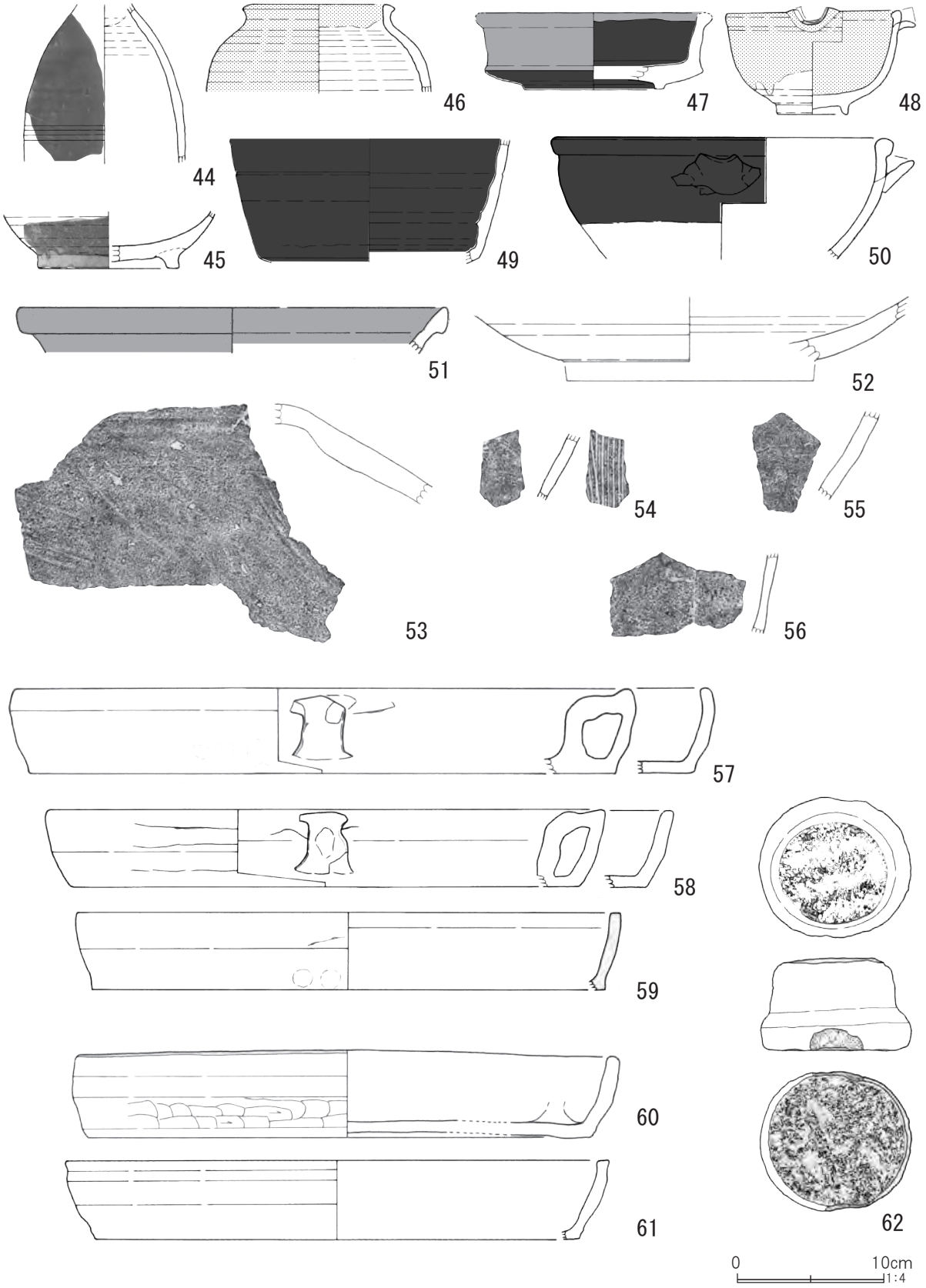
第５号溝跡（第21、24図第６表）

調査区の北西部に位置し、ほぼ東西方向に走る。Ｂ－２グリッドにある。

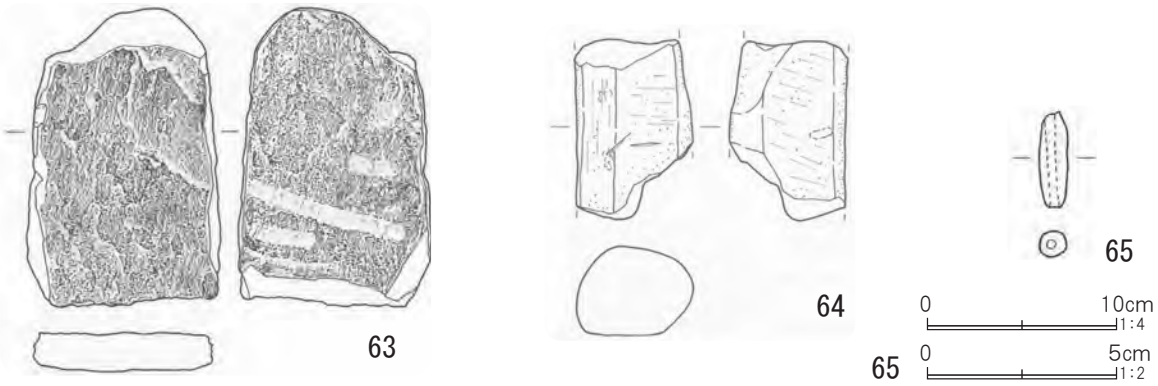
規模については、西側及び東側は調査区外になるが、検出長軸1.35ｍ、検出短軸0.45ｍを測る。走行軸の方位は、ほぼ東西であるが、東端部が北方向にわずかに屈曲する。東西走行方向箇所は



第 26 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (1)



第 27 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (2)



第 28 図　諏訪木遺跡遺構外出土遺物 (3)

第８表　諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表（第 26 ～ 28 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIMN	にぶい黄 2.5Y-6/3	B	破片	ヨコ方向のハケ目（櫛描）か
2	土師器 坏	(14.4)	(5.0)	(11.6)	ADEIO	橙 7.5YR-7/6	B	10%	体部下部～底面：ヘラケズリ
3	土師器 甑	—	—	—	ABE	明赤褐 5YR-5/8	B	把手	
4	須恵器 皿	—	(1.5)	(6.6)	ABDHIJM	灰黄 2.5Y-6/2	B	底部 50%	底部：回転糸切
5	須恵器 坏	—	(1.4)	(7.0)	BDGHJLN	灰 7.5Y-6/1	B	底部 20%	底部：回転糸切
6	須恵器 高台坏	—	(3.0)	(7.1)	ABEFGIN	にぶい赤褐 5YR-5/4	B	底部 10%	南比企産
7	須恵器 甕	—	—	—	AB	黄灰 2.5Y-6/1	B	破片	
8	須恵器 甕	(19.0)	(1.9)	—	AD	灰 7.5Y-4/1	B	口縁部 10%	自然釉
9	須恵器 甕	—	(5.3)	(16.0)	ABDFG	灰 N-5/	B	10%	内面：ヨコ方向のナデ 外面底部付近に擦痕多数有
10	須恵器 甕	—	—	—	BDGHM	灰オリーブ 5Y-5/2	B	胴部片	外面：平行叩き 内面：ヨコ方向ナデ 自然釉
11	須恵器 甕	—	—	—	ABG	灰 N-6/	B	胴部片	外面：平行叩き 内面：同心円状のあて具
12	須恵器 甕	—	—	—	ABD	褐灰 10YR-6/1	B	破片	外面：平行叩き後ナデ消し 内面：同心円状のあて具痕
13	丸瓦	厚さ 1.7 ～ 1.8 cm			ABN	凸面：灰褐 5YR-5/2 凹面：にぶい 赤褐 5YR-4/4	B	破片	凸面：タテ方向ナデ 凹面：ヨコ方向ナデ 9C か
14	平瓦	厚さ 1.8 ～ 1.9 cm			AEN	灰 5Y-4/1	B	破片	凸面：縄目叩き 凹面：布目叩き 9C か
15	平瓦	厚さ 1.4 ～ 1.9 cm			ABE	凸面：にぶい 黄橙 10YR-7/3 凹面：にぶい 橙 7.5YR-7/4	B	破片	凸面：縄目叩き 凹面：布目叩き 9C か
16	平瓦	厚さ 0.9 ～ 1.0 cm			ABD	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	凸面：ナデ 凹面：布目叩き 9C か
17	平瓦	厚さ 2.5 ～ 2.9 cm			ABDH	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	凸面：タテ方向ナデ 凹面：布目叩き 8C

第８表　諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表（第 26 ～ 28 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
18	土師質土器 坏	(8.4)	1.6	5.4	ADJN	灰白 2.5Y-8/2	B	40%	ロクロ回転　反時計回り 底部：回転糸切 中世
19	土師質土器 坏	(8.6)	1.2	(6.0)	ABDGIJKM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	20%	ロクロ回転　反時計回り 底部：回転糸切
20	磁器 白磁六角坏	(9.5)	(1.9)	—	B	灰白 2.5Y-8/1	A	破片	小坏 体部外面：面取り 15C、中国産
21	磁器 碗	—	(2.9)	(4.5)	B	灰白 N-8/	A	底部 40%	肥前系　白磁碗 18C
22	磁器 仏飯器	—	4.2	4.4	AB	灰白 N-8/	B	脚部 100%	肥前系　染付碗 皿部外面：草花文 脚部上方：二重圏線
23	磁器 染付碗	(8.5)	(3.6)	—	B	灰白 N-8/	A	10%	肥前系　色絵碗 体部外面：松葉文、緑と黒で松樹文 割れ口に漆継ぎの痕跡 18C 前半
24	磁器 染付碗	9.4	5.5	3.9	BN	灰白 N-8/	A	80%	肥前系　くらわんか碗 体部外面：雪持ち笹文及び菊樹文 高台内：崩れた大明年製 18C 中
25	磁器 染付碗	(9.8)	5.4	4.0	AB	灰白 N-8/	A	60%	肥前系　くらわんか碗 体部外面：八橋文及び梅樹文 高台内：崩れた大明年製 18C 中
26	磁器 碗	(9.9)	(4.7)	—	BD	灰白 7.5Y-8/1	B	口縁部 10 %	肥前系　くらわんか碗 体部外面：柵と草花文 18C 中～後半
27	磁器 染付碗	(10.1)	(4.4)	—	AB	灰白 N-8/	A	口縁部～ 体部 25%	肥前系くらわんか碗 体部外面：草花文 18C 中～後半
28	磁器 染付碗	(9.8)	(3.8)	—	B	灰白 N-8/	A	口縁部～ 体部 15%	肥前系、くらわんか碗 体部外面：梅樹文 18C
29	磁器 染付碗	(7.8)	4.6	(3.0)	B	灰白 N-8/	A	50%	肥前系　染付小碗、くらわんか碗 口縁外面：コンニャク判による紅葉文 体部下方と高台脇に圏線、 体部外面：ヘラケズリ痕 18C 中～後半
30	磁器 碗	(8.3)	4.3	3.2	A	灰白 N-8/	A	70%	肥前系　染付小碗、くらわんか碗 外面：コンニャク判による菊花文 2 か所 体部下方と高台脇に圏線 18C 後半
31	磁器 染付碗	—	(2.7)	(3.5)	AB	灰白 N-8/	B	30%	肥前系　くらわんか碗 体部外面：草花文 高台内：大明年製 18C 中
32	陶器 碗	(9.4)	(5.2)	—	BD	灰白 7.5Y-8/1	B	口縁部 20 %	肥前系　京焼風 体部外面：崩れた楼閣山水文 内外面：薄い灰釉 18C 後半

第８表　諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表（第 26 ～ 28 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
33	陶器 碗	(11.4)	(4.9)	—	B	灰白 2.5Y-8/2	A	20%	肥前系　京焼風 内外面：薄い灰釉 18C 後半
34	陶器 碗	(10.9)	(4.2)	—	BD	灰白 7.5Y-8/1	B	口縁部 10 %	肥前系　京焼風 体部外面：呉須による崩れた楼閣山水文 内外面：薄い灰釉 18C 後半
35	陶器 碗	(9.9)	(3.6)	—	AB	灰白 5Y-8/2	A	口縁部～ 体部 10%	肥前系　京焼風 内外面：薄い灰釉 18C 後半
36	陶器 碗	(9.8)	(4.2)	—	BD	灰白 7.5Y-8/1	B	口縁部 10 %	肥前系　京焼風 内外面：薄い灰釉 18C 後半
37	陶器 碗	—	—	—	AB	灰白 2.5Y-8/1	A	15%	肥前系　京焼風 内外面：薄い灰釉
38	陶器 碗	—	—	—	B	灰白 5Y-8/1	A	破片	肥前系　京焼風 内外面：薄い灰釉 18C 後半
39	陶器 丸碗	(10.0)	6.3	3.9	AB	灰白 5Y-7/2	A	60%	瀬戸美濃系 高台端部を除き灰釉 18C 中～後半
40	陶器 碗	(8.8)	5.3	(4.4)	BN	灰白 2.5Y-8/1	A	40%	瀬戸美濃系　御室茶碗 体部外面：崩れた楼閣山水文 18C 中
41	陶器 碗	—	(2.2)	5.0	BDN	灰白 2.5Y-8/2	A	高台部 ほぼ完形	肥前系　呉器手碗 高台高が高い、薄い灰釉 17C 末～ 18C
42	陶器 皿	(7.0)	(3.0)	—	B	灰白 10YR-8/1	B	20%	瀬戸美濃系　灰釉小皿 体部外面中央～内面にかけて灰釉 大窯４段階 16C 末
43	陶器 灯明皿	10.6	2.4	—	BI	灰 7.5Y-5/1	B	口縁部 30 %	口縁部外面～内面：錆釉 口縁部に１か所つまみ有 口縁部外面：油煙付着
44	陶器 徳利	—	(11.0)	—	ABEN	外面：灰白 5Y-8/1 内面：灰黄 2.5Y-6/2	A	頸部～体 部 50%	瀬戸美濃系　尾呂徳利 頸部内面～外面：飴釉、外面：うのふ釉流しかけ 外面下方：3 条の沈線あり 17C 末～ 18C 前半
45	陶器 徳利	—	(4.0)	(9.4)	ABEN	灰白 5Y-8/1	A	高台部 20 %	瀬戸美濃系　尾呂徳利 外面：飴釉後うのふ釉流しかけ №.74 と同一個体か
46	陶器 有耳壺	(9.0)	(6.1)	—	B	灰白 2.5Y-8/2	B	口縁部～ 体部 20%	瀬戸美濃系 口縁内面～外面：灰釉 18C ～ 19 初
47	陶器 香炉	16.2	5.2	9.5	AB	灰白 2.5Y-8/1	B	40%	瀬戸美濃系　袴腰型香炉 内外面：錆釉後体部下方～口縁内面にかけて鉄釉 口縁部：敲打痕→キセルの灰落とし 18C 後半
48	陶器 片口鉢	11.8	7.5	4.8	ABI	灰白 7.5Y-8/1	B	90%	瀬戸美濃系　小型の片口 高台以外灰釉 見込みには３か所重ね焼きのための目痕有 18C 後半

第８表　諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表（第 26 ～ 28 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
49	陶器 半銅	—	(8.5)	—	ABN	褐灰 10YR-5/1	A	体部 30%	瀬戸美濃系 体部外面：1 条の沈線 内外面：鉄釉 18C ～ 19C
50	陶器 片口鉢	(22.0)	(8.3)	—	DH	にぶい橙 2.5YR-6/4	B	口縁部 30 %	肥前系　唐津 体部外面には波状、内面には渦巻き状の白土による刷毛目文 外面：鉄釉流しかけ
51	陶器 擂鉢	(29.2)	(3.1)	—	BDN	灰白 2.5Y-8/2	A	口縁部 10 %	瀬戸美濃系 内外面：錆釉 16C 後半　大窯 3 段階後半
52	陶器 大皿	—	—	—	D	にぶい橙 2.5YR-6/4	B	胴部片	肥前系　唐津 底部内面に渦状、体部内面に波状に白土の刷毛目文 底部内面：砂目積み痕
53	陶器 甕	—	—	—	DHN	灰褐 7.5YR- 5/2	B	肩部片	常滑系
54	陶器 擂鉢	—	—	—	BDH	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	体部片	丹波系 内面：６条の櫛目 17C 以降
55	陶器 甕	—	—	—	DHI	赤灰 10R-5/1	B	胴部片	常滑系
56	瓦質土器 土鍋	—	—	—	DI	オリーブ黒 7.5Y-3/2	B	胴部片	15C 代か
57	瓦質土器 焙烙	(42.0)	5.8	(40.0)	AD	黒褐 5YR-2/1	B	口縁部 10 %	18C 代
58	瓦質土器 焙烙	(38.2)	5.3	(34.6)	ADGI	赤黒 7.5R-2/1	B	口縁部 5%	底部内面：スス付着 18C
59	瓦質土器 焙烙	(37.0)	5.3	(35.0)	ABDGIK	黄灰 10YR-5/1	B	口縁部 5%	
60	瓦質土器 焙烙	37.0	6.0	34.0	AB	灰黄 2.5Y-6/2	B	50%	幅広の内耳が口径内面上方～底部にかけて 3 か所有 底部内面中央に菊花文押印
61	瓦質土器 焙烙	(37.0)	5.4	—	D	外面：オリーブ黒 7.5Y-3/1 内面：灰 5Y- 5/1	B	口縁部 5%	
62	石製品 宝篋印塔九輪	最大長 10.3　最大幅 9.4　最大厚 6.2　重量 748 g							安山岩 上下平坦面に工具痕有
63	石製品 板碑	最大長 15.8　最大幅 10.2　最大厚 2.1 重量 634 g							緑泥石片岩 側面に工具痕有 砥石に転用か
64	石器 砥石	最大長（9.4）　最大幅 6.1　最大厚 4.7 重量 357 g							砂岩 上下欠損
65	土製品 土錘	最大長 2.5 最大幅 0.7 最大厚 0.7 重量 1.4 g				にぶい黄橙 10YR-7/3			

概ねN－70°－Eを示す。

深さは、遺構確認面から最深0.34mを測る。床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、土師質土器が出土した。

時期は、不明である。

ウ　ピット

ピットは５基検出された。出土遺物については、いずれのピットにおいても検出できなかった。

以下、一覧表にて記述する（第25図、第７表）。

エ　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する。（第26～28図、第８表）

土師器、須恵器、かわらけ、陶器、瓦質陶器、砥石が出土した。

１・２は、土師器坏である。１は、内面に放射状の暗文が見られる。３は、土師器甕の底部である。４は、須恵器坏である。５は、古賀公方系のかわらけである。６は、瀬戸美濃系の鉄釉皿である。７は、片口の口縁を持つ擂鉢である。８は、須恵器甕である。９は、砥石である。

４　調査のまとめ

今回の調査では、溝跡が複数確認されている。ここは、中世の居館跡の伝承がある地域であり、調査成果との関連性について若干検討してみる。

今回検討するのは、調査区を東西方向に走る第１・３・４号溝跡である。古い順に第３号溝跡→第４号溝跡→第１号溝跡であり、溝幅が１～1.5ｍ前後、掘削深度が0.2～0.4ｍ前後と類似点があることから、溝を数回掘削したと考えられる。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶器、瓦質土器、土師質土器、馬歯と多数の時期のものが出土した。

本調査箇所は、「秋葉」という名で周知された場所であり、『新編武蔵風土記稿』に「成田太郎助廣の五男、秋葉七郎某の住せし地なりと云」との記載があることから、古くから秋葉氏居館跡があったとの伝承があり、『熊谷市史』には、他の場所よりも標高の高い方形区画箇所を居館跡と考え、その推定地も示されている（第16図）（熊谷市教育委員会2016）。

本調査区の北側で、2001年に埼玉県埋蔵文化財事業団による県道工事に伴う調査が行われ、前述した居館推定地とほぼ重なる箇所に堀で区画された方形館跡や青磁・白磁などの輸入陶磁器を中心に12～13世紀の遺物が確認されている。ただ、地図上でほぼ重なるものの、出土遺物の時期にずれが生じていることから、報告書では、秋葉氏との断定はせず、成田氏関連の居館跡との見解を示している（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。

前述した溝跡は、居館推定地に南接するが、方形館跡と比較し、輸入陶磁器などの遺物は少なく、時期も特定できないことから、居館跡の堀と考えるのは違和感がある。ただ、この地理条件を考えると、同時期のと別の溝や後の時期に堀を掘削し直した可能性があるだろう。

今回の調査成果からは、秋葉氏居館跡と明確に関連付けられなかったが、ここの周辺地域では、前述した中世の方形館跡の他に、宴跡時に土器を廃棄した溝跡（熊谷市教育委員会 2020）、寺院関連の溝跡（熊谷市教育委員会 2017）など成田氏関連とされる中世の遺構は多数発見されている。今後多数の遺構が発見されると考えられる。

引用・参考文献

熊谷市教育委員会　2016 『熊谷市史　資料編１　考古』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2008 『諏訪木遺跡　Ⅲ』
熊谷市教育委員会　2017 『諏訪木遺跡Ⅲ』
熊谷市教育委員会　2020 『諏訪木遺跡Ⅳ』

上前原遺跡 Ⅵ・Ⅶ

Ⅳ　上前原遺跡の調査

１　発掘調査の概要

⑴　調査に至る経緯

上前原遺跡の調査は、建築主３者それぞれとの調整を経て、保護層を設けられない工法で個人住宅が建築されることにより埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。なお、平成 31 年度に調査した、建築主を佐藤弘樹氏とする調査区を第６次調査Ａ区、山田拓也氏とする調査区を第６次調査Ｂ区、令和２年度に調査した、建築主を米持健太朗氏とする調査区を第７次調査と呼称し、調査を実施した。なお、建築主３者との協議の結果、雑木を伐採せず発掘調査を実施した。経過については、次のとおりである。

第６次調査Ａ区は、平成 31 年３月 19 日付けで埼玉県教育委員会に個人住宅建設に伴い、文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届け出のあった熊谷市千代字萩山南 114 番５地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№.65 － 022　上前原遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成 30 年３月 19 日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下より 25 ～ 52 ㎝下位で埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、基礎工事の掘削深度が深く、埋蔵文化財の保護層が設けられないため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成 31 年４月３日付け熊教社埋第７号埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成 31 年４月７日付け教文資第４－ 40 号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事ついての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第 99 号第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成 31 年４月 26 日付け熊教社埋第 36 号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

第６次調査Ｂ区は、平成 31 年１月 16 日付けで埼玉県教育委員会に個人住宅建設に伴い、文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届け出のあった熊谷市千代字萩山南 114 番１地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№.65 － 022　上前原遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成 30 年３月 19 日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下より２5 ～ 52 ㎝下位で埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、基礎工事の掘削深度が深く、埋蔵文化財の保護層が設けられないため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成 31 年４月３日付け熊教社埋第８号埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成 31 年４月３日付け教文資第４－ 39 号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事ついての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第 99 号第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘

調査の通知を、平成31年４月26日付け熊教社埋第35号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。第７次調査は、令和２年８月24日付けで埼玉県教育委員会に個人住宅建設に伴い、文化財保護法第93条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届け出のあった熊谷市千代字萩山南114番６地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№.65－022　上前原遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成30年３月19日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下より25～52㎝下位で埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、基礎工事の掘削深度が深く、埋蔵文化財の保護層が設けられないため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、令和２年９月４日付け熊教社埋第250号埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに令和２年９月８日付け教文資第５－806号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事ついての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99号第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、令和２年９月４日付け熊教社埋第254号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、第６次調査Ａ区とＢ区を併せて平成31年４月26日から６月25日にかけて実施した。調査面積は、Ａ区が68.16㎡、Ｂ区が105㎡であった。第７次調査が、令和２年９月４日から10月16日にかけて実施した。調査面積は79.91㎡であった。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行ない、その後人力による遺構確認作業を行った。

検出された遺構は、土坑、性格不明遺構、ピットで、順次掘り下げを行った。掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。適宜遺構の写真撮影を行った。最後に重機による埋め戻しや器材の撤収を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、第６次、第７次調査ともに令和４年４月から令和５年３月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと併行して遺構の図面整理を行った。また、遺構の整理に当たって、第16、20表のとおり遺構の見直しを図り、遺構番号の振替を行った。

次に、遺物のトレースを行い、図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真撮影整理、遺物写真撮影を行い、写真図版の割付けをした。これと並行して原稿執筆を行った。最後に印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

⑶　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者　　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

平成３１・令和元年度

教育長	野原　　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏夫
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課業務主幹（文化財保護係）	宮前　章生
文化財保護係係長	松田　　哲
主査	星　　祥子
主査	小島　洋一
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事	武部　喜充
主事	島村　範久
主事	大野美知子

令和２年度

組織については、第Ⅲ章と同一であるため、記述を省略することとし、第Ⅲ章を参照されたい。

イ　整理・報告書作成事業

組織については、第Ⅱ章と同一であるため、記述を省略することとし、第Ⅱ章を参照されたい。

第９表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構番号新旧対照表（左：新番号 右：旧番号）

竪穴建物跡（ＳＩ）		溝跡（SD）		ピット（P）			
1	SI01	1	SD01	1	P01	6	P06
土坑（SK）		埋甕		2	SK06	7	P07
1	SK04	1	埋甕１	3	P03	8	P08
2	SK05			4	P04	9	P09
3	P02			5	P05	１０	SK07

2　遺跡の概要

⑴　上前原遺跡について

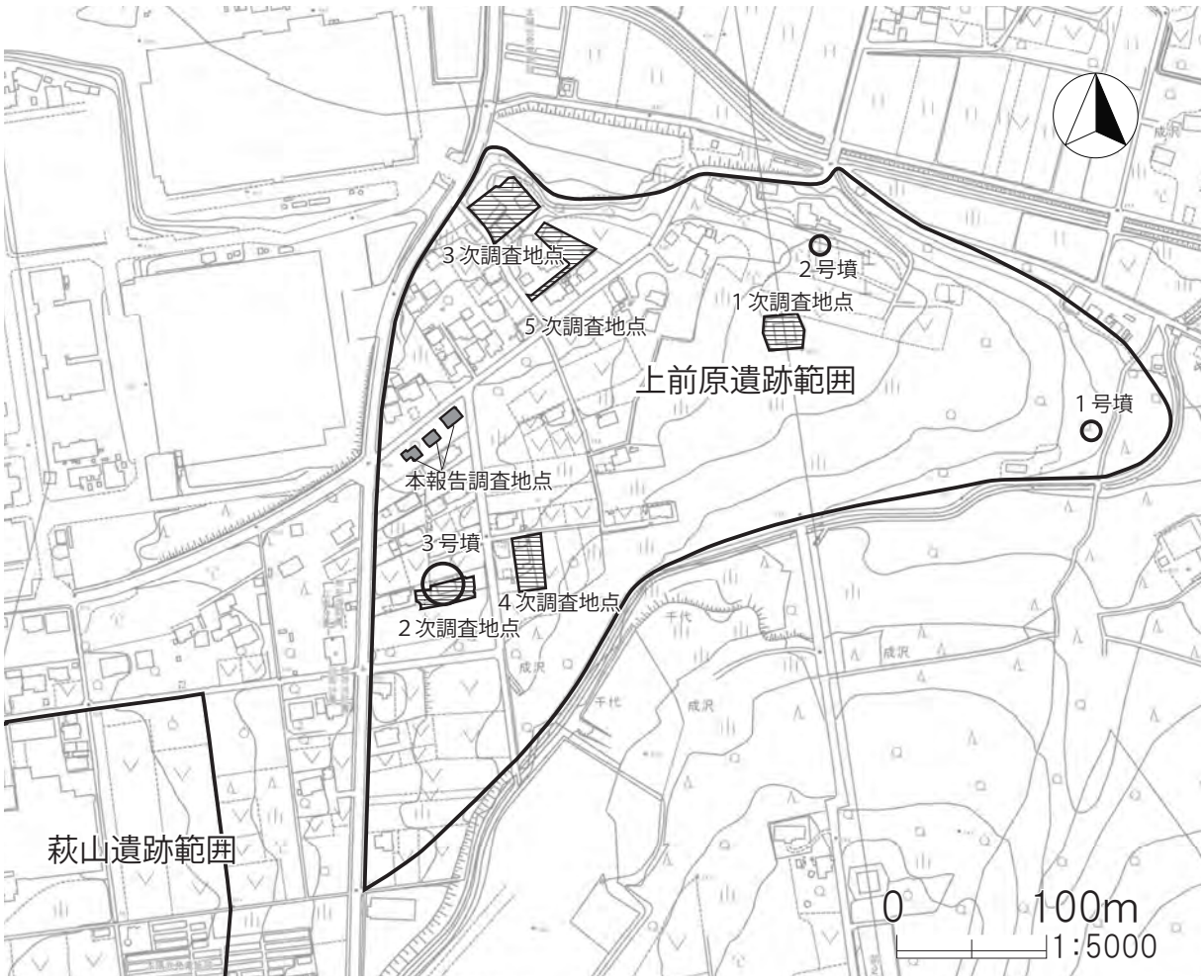
上前原遺跡は、熊谷市南部、旧江南町の荒川を望む江南台地の北縁部の標高は 50 m～ 53 mに立地し、台地は東側が荒川に注ぐ谷によって開析され、半島状に突き出した地形となっている。その範囲は、面積 500, 400 ㎡と広大であり、東西 450 m、南北 350 mの規模である

本遺跡を知る情緒は、昭和 60 年の送電線鉄塔建設工事に伴う発掘調査が旧江南町教育委員会により実施され、ここからは、縄文時代中期後半の集落跡や古墳跡が確認された。その後、個人住宅建設に伴う発掘調査が、平成 15・16・18・23・28 年と旧江南町教育委員会及び熊谷市教育委員会により実施されて、いずれの調査も規模が小さいながらも数多くの遺構が検出されたことから、緩傾斜面から平坦部にかけて縄文時代中期後半を中心とした集落跡が営まれていた。

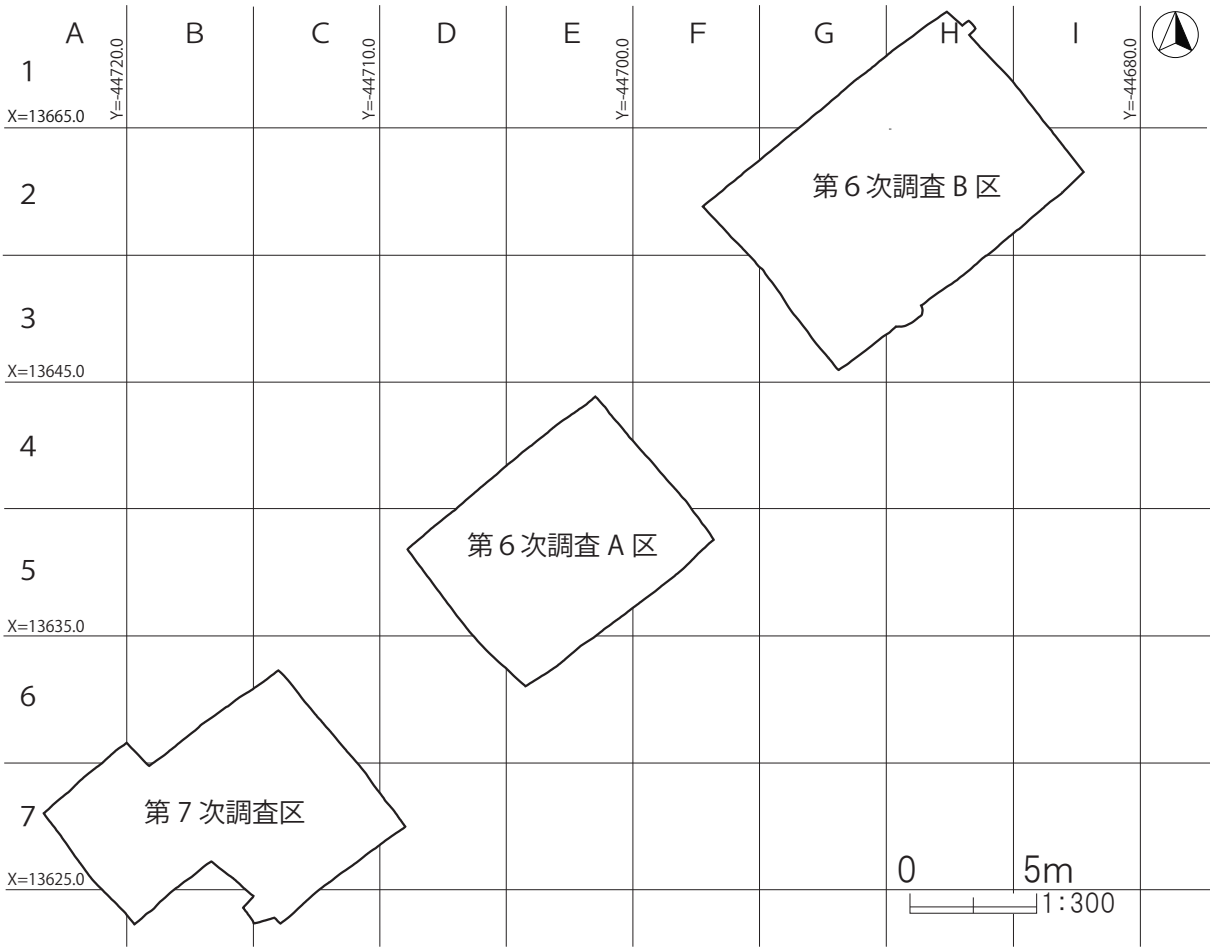
本遺跡とほぼ同所に所在する上前原古墳群は、古墳時代後期の群集墳であり、当該古墳では、現在のところ３基の古墳群が確認されている（第 29 図)。

⑵　調査の方法

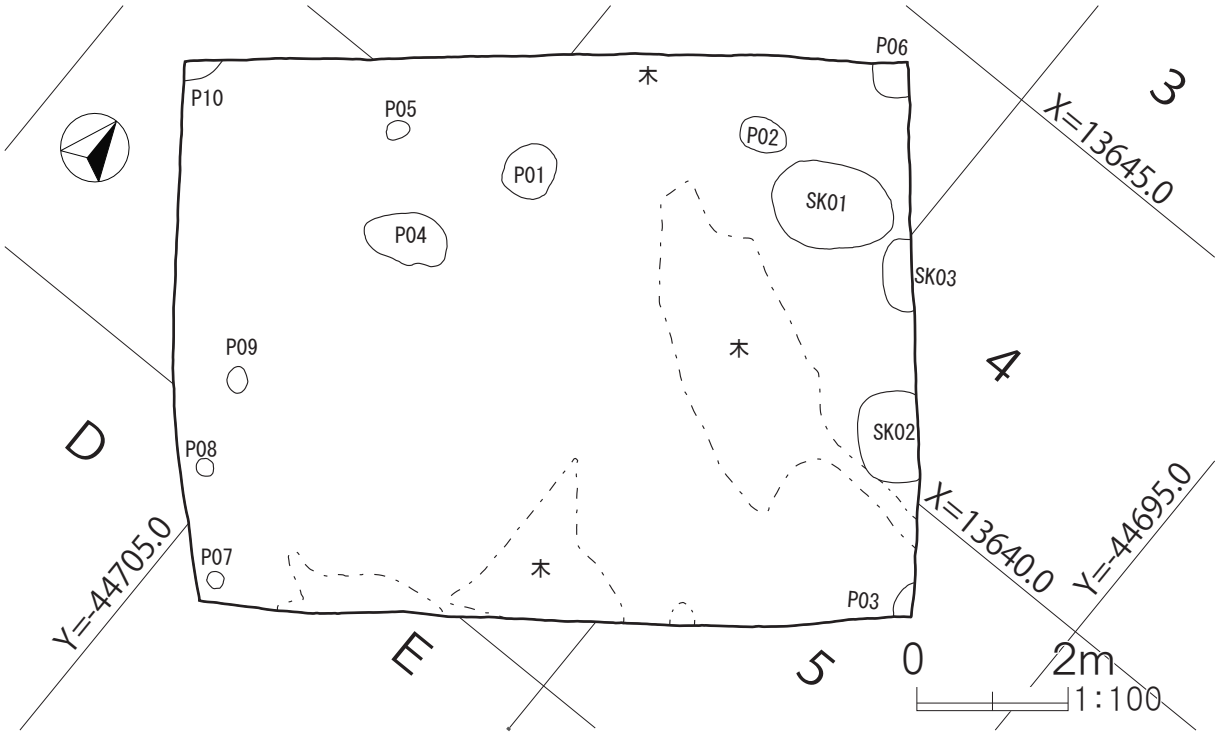
調査の方法は、第６次調査、第７次調査ともに世界測理系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように１辺５ｍの



第 29 図　上前原遺跡調査地点位置図



第 30 図　上前原遺跡第６次調査Ａ・Ｂ区、第７次調査位置図



第 31 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区全測図

グリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体を把握できるように、北西隅をＡ－１として東へＡ・Ｂ・Ｃ、南へ１・２・３とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３・・・と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で１ｍ間隔メッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

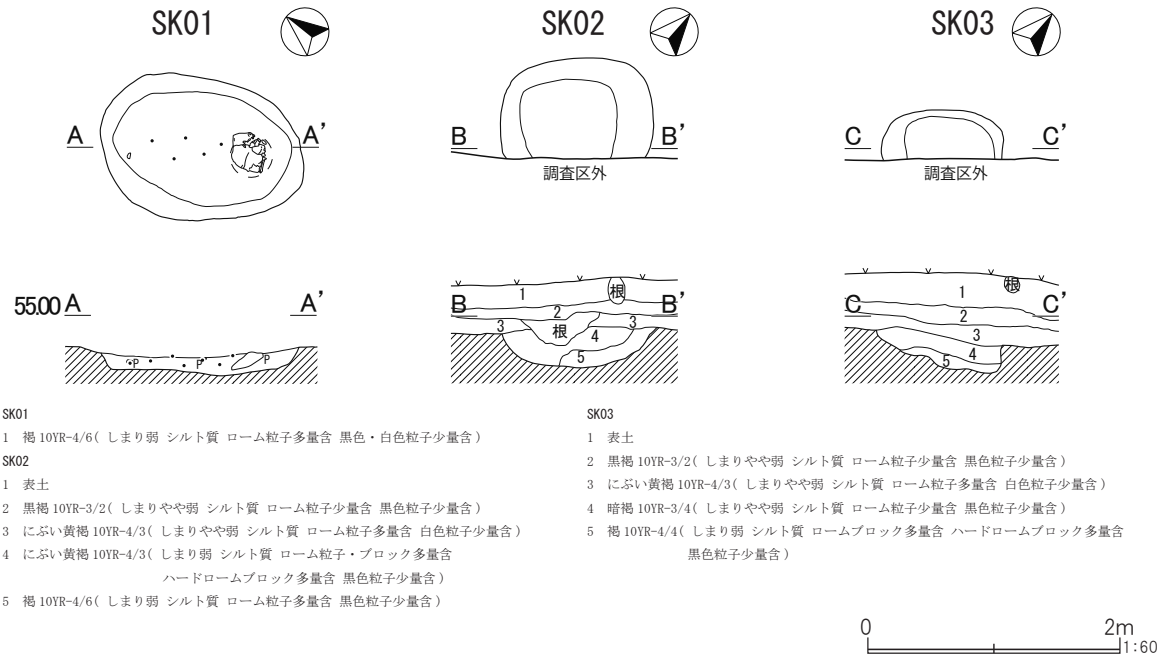
⑶　検出された遺構と遺物

今回の調査地点は、遺跡範囲の西端の中央部に位置し、第３次及び第５次調査の西側にあたり、第２次調査の北側に位置する。第６次調査のＡ区、Ｂ区及び第７次調査区は隣接しており、第６次調査のＢ区が東側に位置し、その約８ｍ西側に第６次調査区Ａ区が、Ａ区の約７ｍ西側に第７次調査区が位置する（第 31 図)。

第６次調査によって検出された遺構は、Ａ区が土坑３基、ピット 10 基であった。遺物については、縄文土器を中心に打製石斧、磨石、石皿などが出土し、出土遺物の総量はコンテナにして２箱であった。

Ｂ区が竪穴建物跡１棟、土坑３基、溝跡１条、埋甕１基、ピット 10 基であった。遺物については、縄文土器を中心に打製石斧、磨石、石皿などが出土し、出土遺物の総量はコンテナにして４箱であった。

第７次調査によって検出された遺構は、竪穴建物跡１棟、土坑２基、集石遺構１基、ピット 27 基であった。遺物については、縄文土器を中心に磨石、石皿などが出土した。出土遺物の総量はコンテナにして４箱であった



第 32 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区第１～３号土坑

3　遺構と遺物

⑴　第６次調査Ａ区

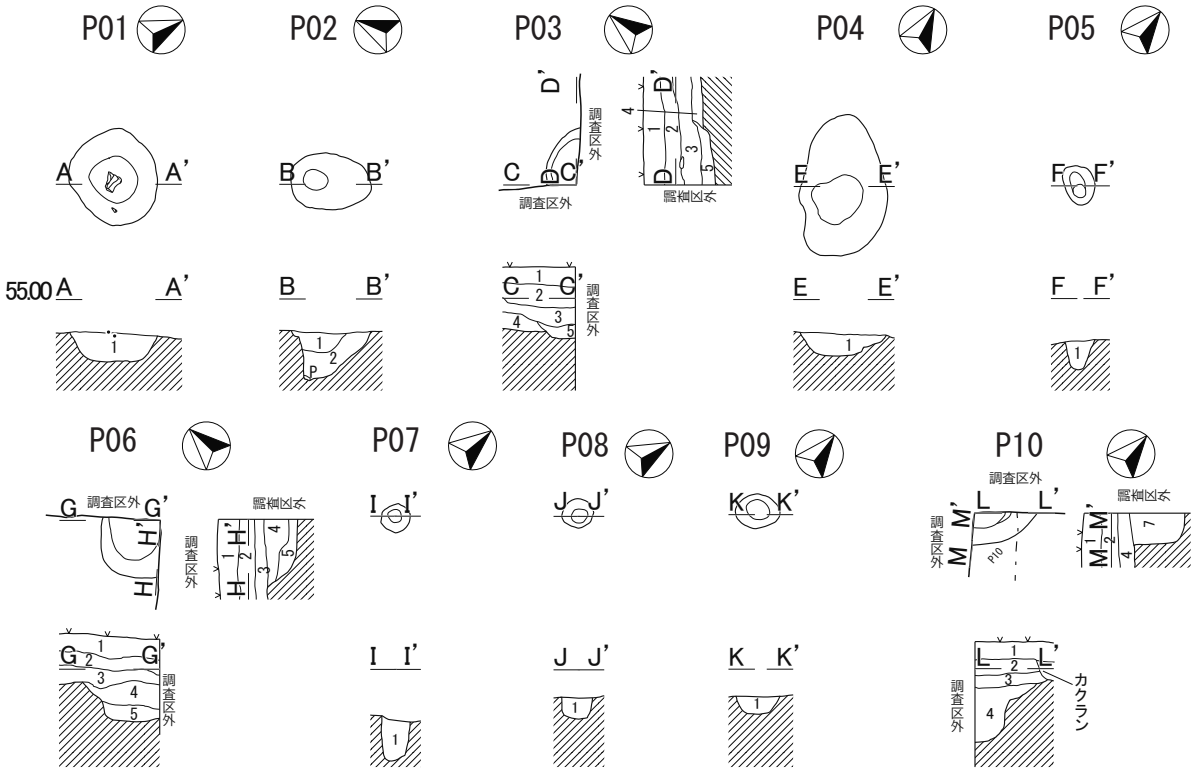
ア　土坑

第１号土坑（第 32、34 図、第 11 表）

調査区の北東部に位置する。Ｅ－４グリッドにある。平面形は検出長軸 0.26 ｍ、検出短軸 0.19 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深で 0.2m を測る。断面形は箱型であり、床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、縄文土器が出土した。なお、ＳＫ１－１は、縄文土器胴下半部が伏せた状態で検出しており、土坑墓の可能性もある。



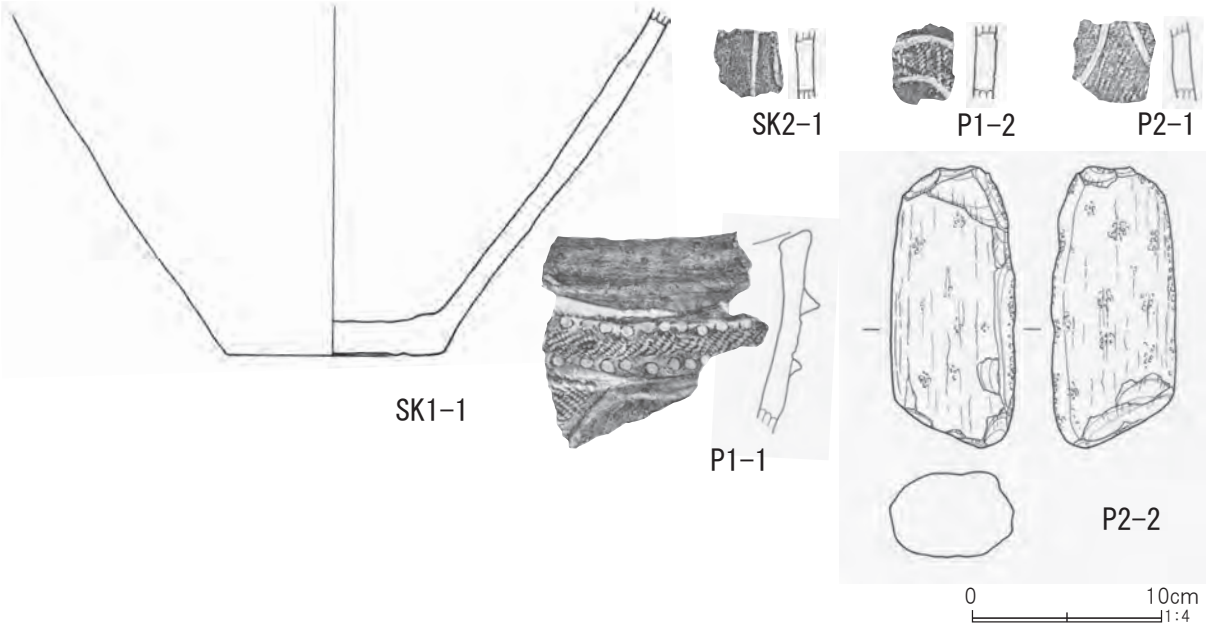
P01
1　褐 10YR-4/4(しまりやや弱　シルト質 ローム粒子少量含　黒色・白色粒子少量含)
P02
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色・白色粒子多量含)
2　暗褐 10YR-3/3(しまりやや強 シルト質 ローム粒子・ブロック少量含 黒色・白色粒子多量含)
P03
1　表土
2　黒褐 10YR-3/2(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
3　暗褐 10YR-3/3(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 白色粒子少量含)
4　褐 10YR-4/4(しまり弱 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色・白色粒子少量含)
5　褐 10YR-4/6(しまり弱 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含　黒色粒子少量含)
P04
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
P05
1　褐 10YR-4/6(しまり弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含)
P06
1　表土
2　黒褐 10YR-3/2(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
3　暗褐 10YR-3/3(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 白色粒子少量含)
4　褐 10YR-4/6(しまり弱 シルト質 ロームブロック多量含 黒色・白色粒子少量含)
5　褐 10YR-4/4(しまり弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色粒子少量含)
P07
1　暗褐 10YR-4/3(しまり弱 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色粒子少量含)
P08
1　暗褐 10YR-3/4(しまり弱 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色粒子少量含)
P09
1　褐 10YR-4/6(しまり弱 シルト質 ロームブロック多量含)
P10
1　表土
2　黒褐 10YR-3/2(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
3　暗褐 10YR-3/3(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 白色粒子少量含)
4　暗褐 10YR-3/4(しまり弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色・白色粒子少量含)

0　2m
1:60

第 33 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区第１～ 10 号ピット

第 10 表　上前原遺跡第６次調査Ａ区ピット一覧表（第 33 図）

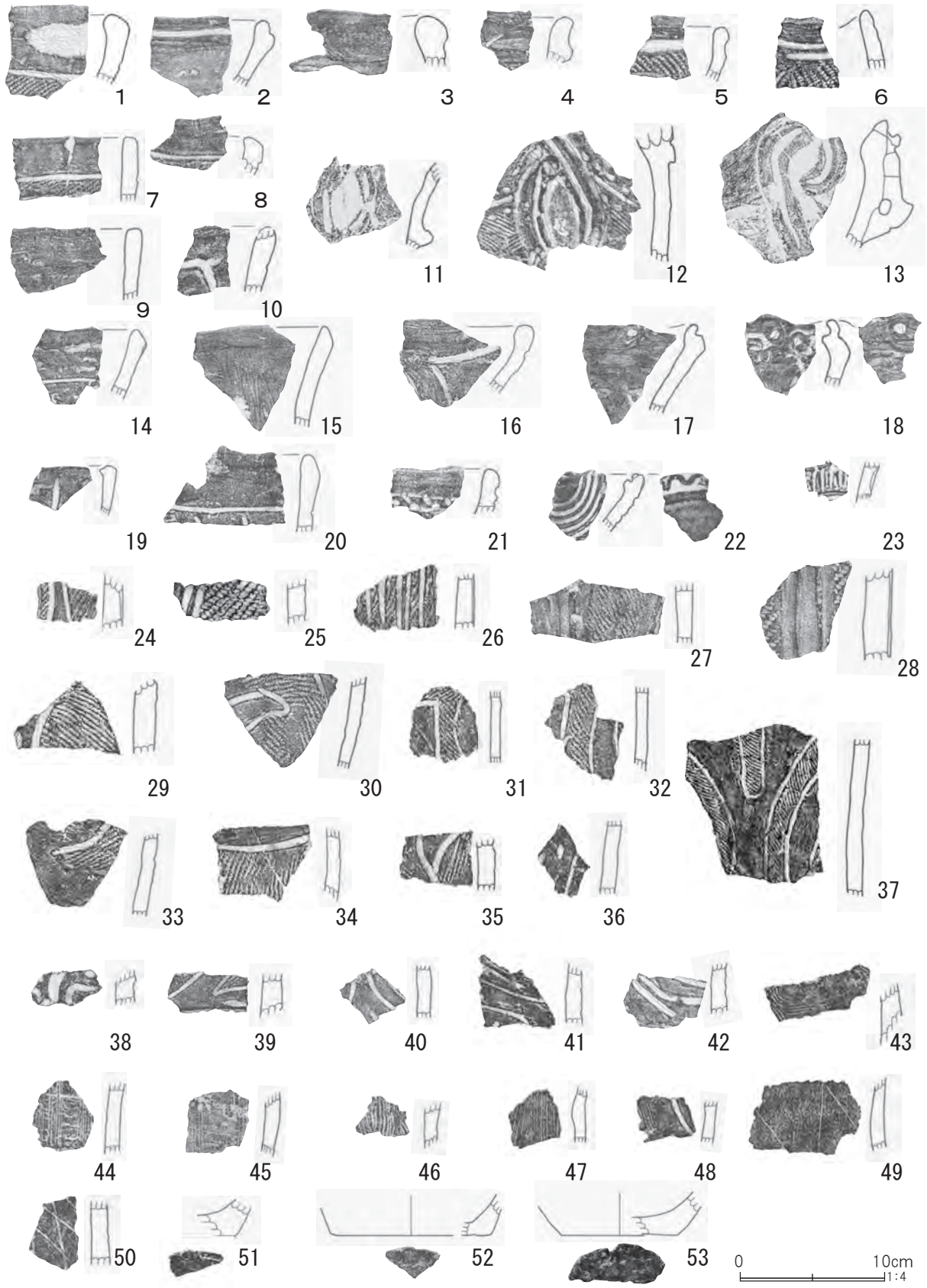
番号	位置（グリッド）	プラン	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	E-4・5	楕円形	78	71	23	縄文土器	縄文時代		
P02	E-4	楕円形	65	44	35	縄文土器	縄文時代		
P03	F-3	楕円形	46	23	10		縄文時代		
P04	D・E-5	楕円形	113	71	18		縄文時代		
P05	D-5	楕円形	30	24	22		縄文時代		
P06	E-4	純丸方形	44	46	25		縄文時代		
P07	E-6	円形	23	23	33		縄文時代		
P08	D-6	楕円形	25	25	14		縄文時代		
P09	D-5	楕円形	35	29	14		縄文時代		
P10	D-5	楕円形	50	25	43		縄文時代		



第 34 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区第１・２号土坑、第１・２号ピット出土遺物

第 11 表　上前原遺跡第６次調査Ａ区第１・２号土坑、第１・２号ピット出土遺物観察表（第 34 図）

図版番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
SK1-1	縄文土器深鉢	—	(18.5)	11.7	AGHIKM	明黄褐 10YR-7/6	B	底部 95 %	
SK2-1	縄文土器深鉢	—	—	—	AIM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	
P1-1	縄文土器深鉢	—	—	—	IM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	2 条隆帯間に LR 縄文横位円形刺突文
P1-2	縄文土器深鉢	—	—	—	AGM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	地文 RL 縄文後弧状の 2 条の沈線
P2-1	縄文土器深鉢	—	—	—	AIM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	磨削縄文
P2-2	石器敲石	最大長 14.8　最大幅 6.5　最大厚 4.5　重量 764.5 g							石材：緑泥片岩



第 35 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区遺構外出土遺物（１）

時期は、出土遺物から縄文時代中期後半から後期初頭と考えられる。

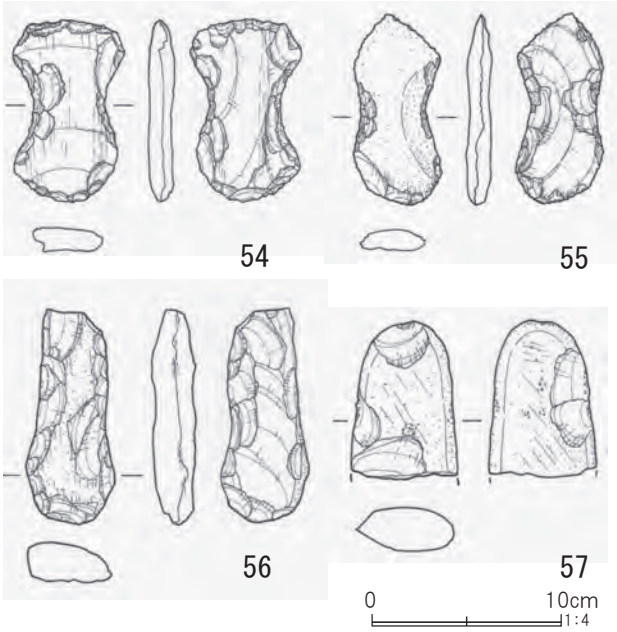
第２号土坑（第 32、34 図、第 11 表）

調査区の南東部に位置する。Ｆ－４グリッドにある。東端部は調査区外に位置する。平面形は検出長軸 0.2 ｍ、検出短軸 0.14 ｍの隅丸方形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.48m を測る。床面は平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積土のため、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、縄文土器が出土した。

時期は、出土遺物から縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。



第 36 図　上前原遺跡第６次調査Ａ区遺構外出土遺物（２）

第 12 表　上前原遺跡第６次調査Ａ区遺構外遺物観察表（第 35・36 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器深鉢	—	—	—	BDM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	横位沈線文、磨削縄文
2	縄文土器深鉢	—	—	—	AKM	明赤褐 5YR-5/6	B	口縁部片	口縁部：1 条の横位沈線
3	縄文土器深鉢	—	—	—	BM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	
4	縄文土器深鉢	—	—	—	IMN	橙 5YR-6/6	B	口縁部片	
5	縄文土器深鉢	—	—	—	IM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	地文縄文、1 条の横位沈線
6	縄文土器深鉢	—	—	—	IM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部片	地文縄文、2 条の横位沈線 波状口縁か
7	縄文土器深鉢	—	—	—	BGM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	地文縄文、横位沈線
8	縄文土器深鉢	—	—	—	AGJM	橙 5YR-7/6	B	口縁部片	
9	縄文土器深鉢	—	—	—	AGIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	
10	縄文土器深鉢	—	—	—	M	黄灰 2.5Y-5/1	B	口縁部片	
11	縄文土器深鉢	—	—	—	BGIKM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	波状口縁の突起部分 加曾利 E4 ～称名寺か
12	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJN	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	波状口縁、渦巻き、隆帯、沈線、刺突文 縄文
13	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJMN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	波状口縁、隆帯、渦巻き、縄文
14	縄文土器深鉢	—	—	—	AGM	暗灰黄 2.5Y-5/2	B	口縁部片	称名寺 2 か
15	縄文土器深鉢	—	—	—	AM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	
16	縄文土器深鉢	—	—	—	GJM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	加曾利 E ～称名寺か
17	縄文土器深鉢	—	—	—	BGM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	口縁部円形刺突、斜位の沈線 称名寺 2 か

第 12 表　上前原遺跡第６次調査Ａ区遺構外遺物観察表（第 35・36 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
18	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部片	
19	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部片	縄文
20	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGIM	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部片	沈線、列点文 称名寺２か
21	縄文土器 深鉢	—	—	—	M	灰黄 2.5Y-6/2	B	口縁部片	口縁部に交互刺突文 連弧文系か
22	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	口縁部が平らで粘土紐で波状文を描く 連弧文系か
23	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	加曾利Ｅ
24	縄文土器 深鉢	—	—	—	B	淡黄 2.5Y-8/3	B	胴部片	縄文か
25	縄文土器 深鉢	—	—	—	BJMN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	縄文 加曾利Ｅ
26	縄文土器 深鉢	—	—	—	HIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	地文縄文後沈線
27	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	縄文 加曾利Ｅ
28	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGIM	浅黄橙 10YR-8/4	B	胴部片	縄文 加曾利Ｅ
29	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	浅黄橙 10YR-8/4	B	胴部片	加曾利Ｅか
30	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIJM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	
31	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺か
32	縄文土器 深鉢	—	—	—	IM	灰黄褐 10YR-6/2	B	胴部片	縄文
33	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	縄文
34	縄文土器 深鉢	—	—	—	BMN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	縄文 加曾利Ｅ
35	縄文土器 深鉢	—	—	—	IKM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	縄文 加曾利Ｅか
36	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGM	明黄褐 10YR-7/6	B	破片	列点文 称名寺２か
37	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGMN	にぶい黄橙 10YR-6/7	B	胴部片	充填縄文か 加曾利ＥⅣ～称名寺か
38	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	加曾利Ｅか
39	縄文土器 深鉢	—	—	—	BJM	浅黄橙 10YR-8/4	B	胴部片	縄文
40	縄文土器 深鉢	—	—	—	BIM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	列点文 称名寺２
41	縄文土器 深鉢	—	—	—	IJM	明黄褐 10YR-7/6	B	胴部片	列点文 称名寺２か
42	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	
43	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIM	明黄褐 10YR-7/6	B	胴部片	条痕文による流水文 連弧文か
44	縄文土器 深鉢	—	—	—	M	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	胴部片	条痕文による文様 連弧文か
45	縄文土器 深鉢	—	—	—	BIM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	縦位方向の条痕文
46	縄文土器 深鉢	—	—	—	A	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	撚糸文 連弧文系か
47	縄文土器 深鉢	—	—	—	M	浅黄橙 10YR-8/3	B	胴部片	条痕文 連弧文

第 12 表　上前原遺跡第６次調査Ａ区遺構外遺物観察表（第 35・36 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
48	縄文土器 深鉢	—	—	—	M	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	条痕文 連弧文
49	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIKM	褐灰 7.5YR-5/1	B	胴部片	細い沈線
50	縄文土器 深鉢	—	—	—	M	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	破片	細い沈線
51	縄文土器 深鉢	—	—	—	GM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	底部片	
52	縄文土器 深鉢	—	—	—	JM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	底部片	
53	縄文土器 深鉢	—	(3.0)	(8.0)	AM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	底部 30 %	
54	石器 打製石斧	最大長 9.5　最大幅 5.9　最大厚 1.2　重量 97.1 g							石材：頁岩
55	石器 打製石斧	最大長 10.0　最大幅 4.7　最大厚 1.1　重量 70.6 g							石材：ホルンフェルス
56	石器 打製石斧	最大長 11.2　最大幅 4.6　最大厚 2.1　重量 137.0 g							石材：ホルンフェルス
57	石器 敲石	最大長 8.2　最大幅 5.6　最大厚 2.3　重量 154.9 g							石材：安山岩 下半部欠損

第３号土坑（第 32 図）

調査区の東端部に位置する。Ｆ－４グリッドにある。東端部は調査区外に位置する。平面形は検出長軸 1.65 ｍ、検出短軸 0.62 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深で 0.2m を測る。断面形は不定形である。

埋土は、レンズ状の堆積土のため、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、土層断面から時代と考えられる。

イ　ピット

ピットは 10 基検出された。出土遺物は、縄文土器や石器が検出された。

以下、一覧表にて記述する（第 33 図、第 10 表）。

ウ　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する。（第 35、36 図、第 12 表）

縄文土器、打製石斧、敲石が出土した。縄文時代中期後半～後期初頭のものが多い。

⑵　第６次調査Ｂ区

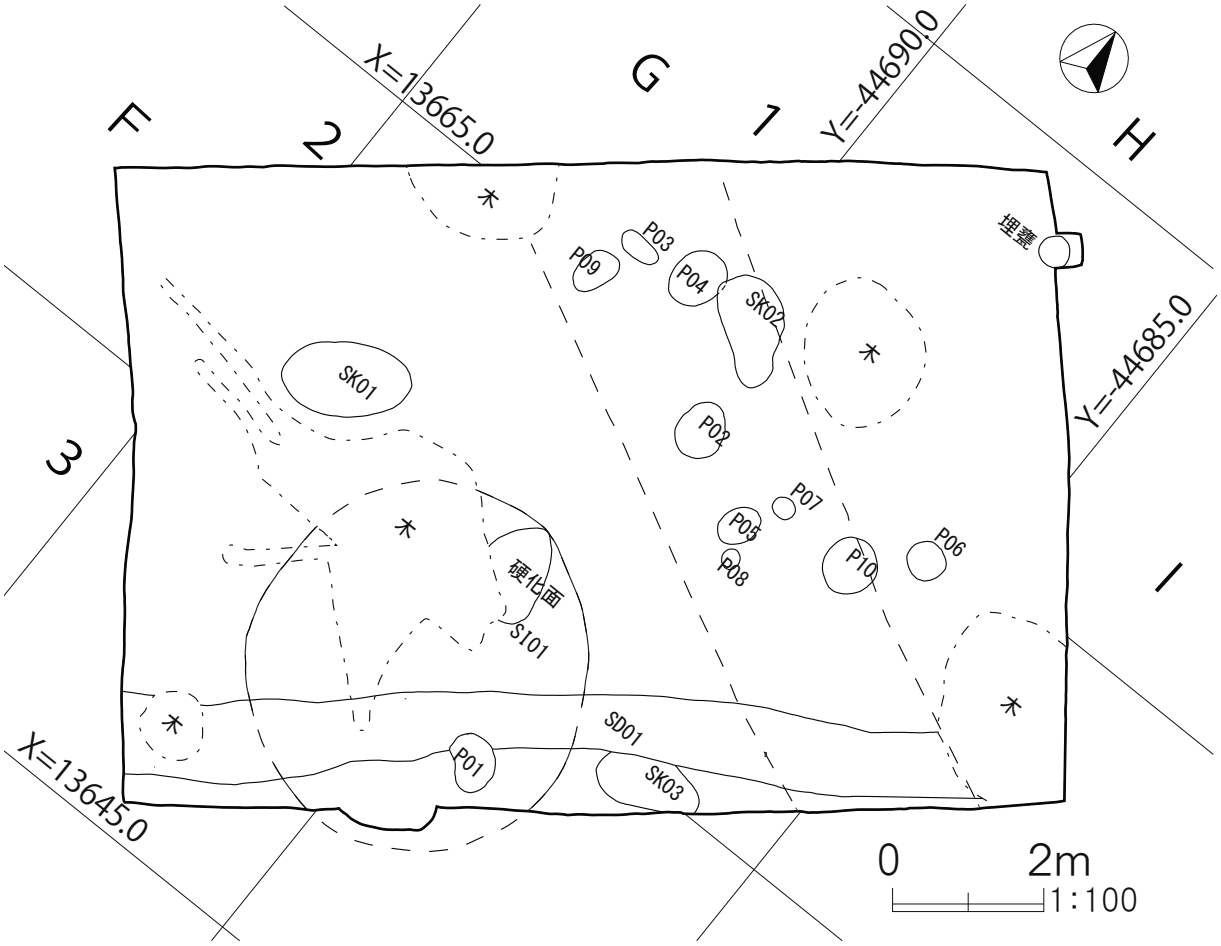
ア　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第 38 ～ 40 図、第 13 表）

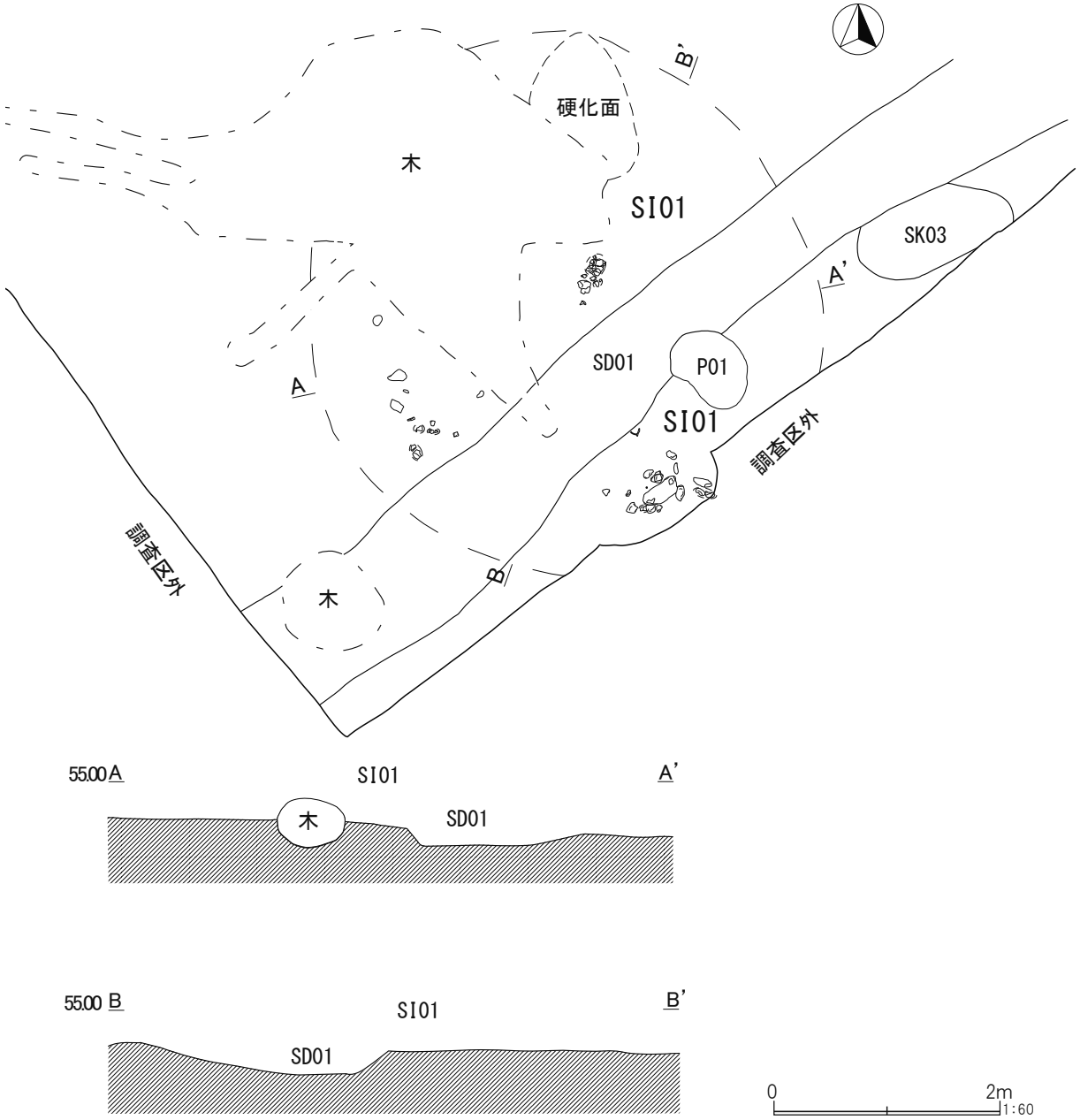
調査区の北西端に位置する。Ｇ－２・３、Ｈ－２・３グリッドにある。南東端が調査区外になる。調査区内に樹木が存在したこと、元々建物の掘込面が浅かったためか、調査時に範囲確認ができなかった。遺物の出土状況、硬化面から範囲を推定した。平面形は長軸 4.68 m、短軸 4.58 mの楕円形と推定する。遺構内の土坑、ピットは確認できなかった。遺構内には、遺物集中３箇所が確認でき、中でも南壁面の付近では、大型の礫が集中し、被熱の痕跡が見られるため、炉の可能性もある。

出土遺物は、縄文土器、打製石斧、磨石、石皿が出土した。１～６は称名寺１式と考えられる。１、３、４、５、６は、沈線で「Ｒ」字の区画後縄文を充填し、２は、沈線で「Ｒ」字を区画後充填縄文した後、円形刺突文も加えている。７.８は無文で口縁部のみ、９、10、17、18、24 は、称名寺Ｉ式と考えられる。11 ～ 13 は、加曾利Ｅ式と考えられる。

時期は、出土遺物から判断して、縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。



第 37 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区全測図



第 38 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡

イ　土坑

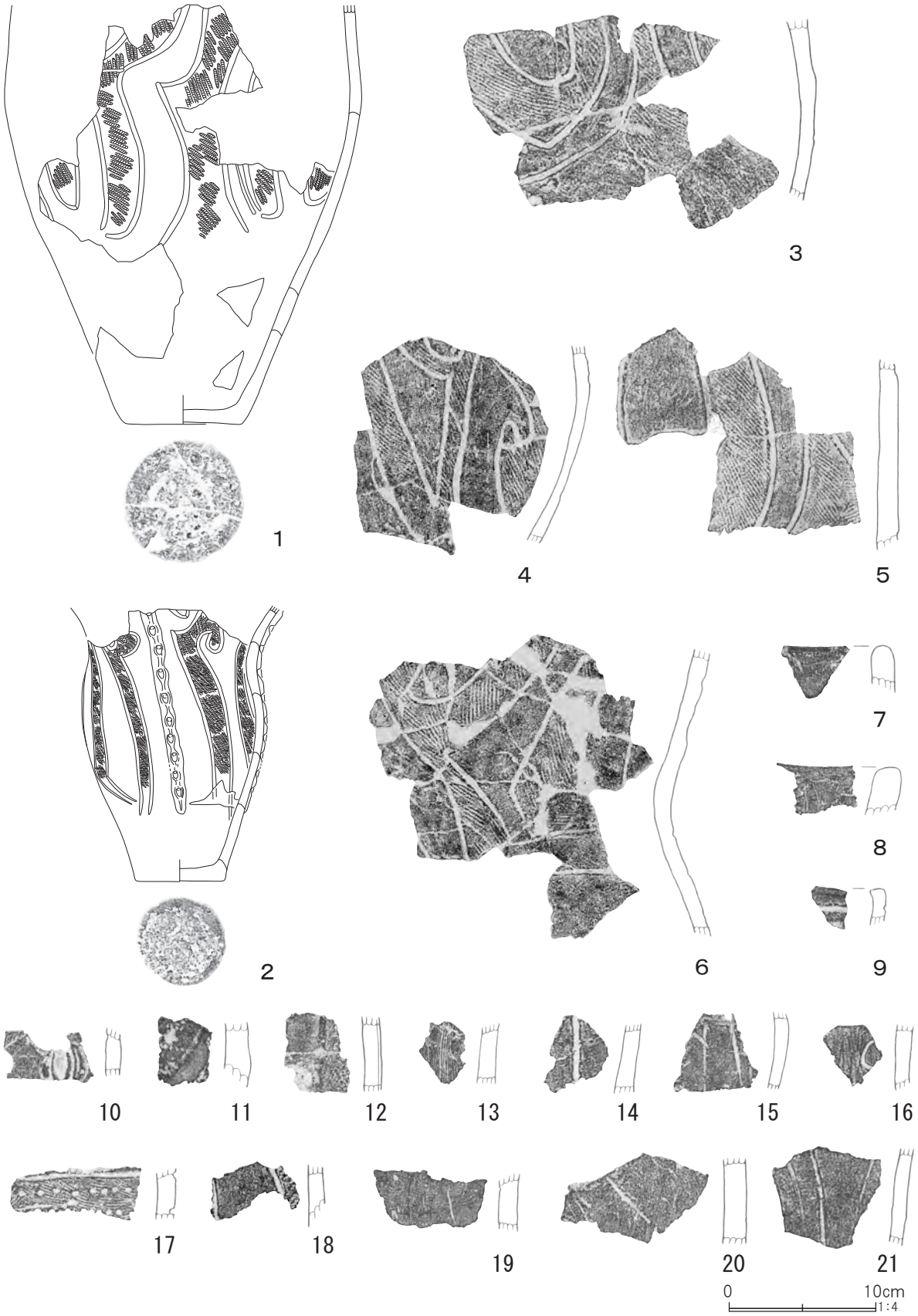
第１号土坑（第 41、42 図、第 14 表）

調査区の北西端に位置する。Ｆ－２グリッドにある。北西端が調査区外になる。平面形は検出長軸 1.76 m、検出短軸 0.97 mの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深で 0.1m を測る。床面は平坦である。

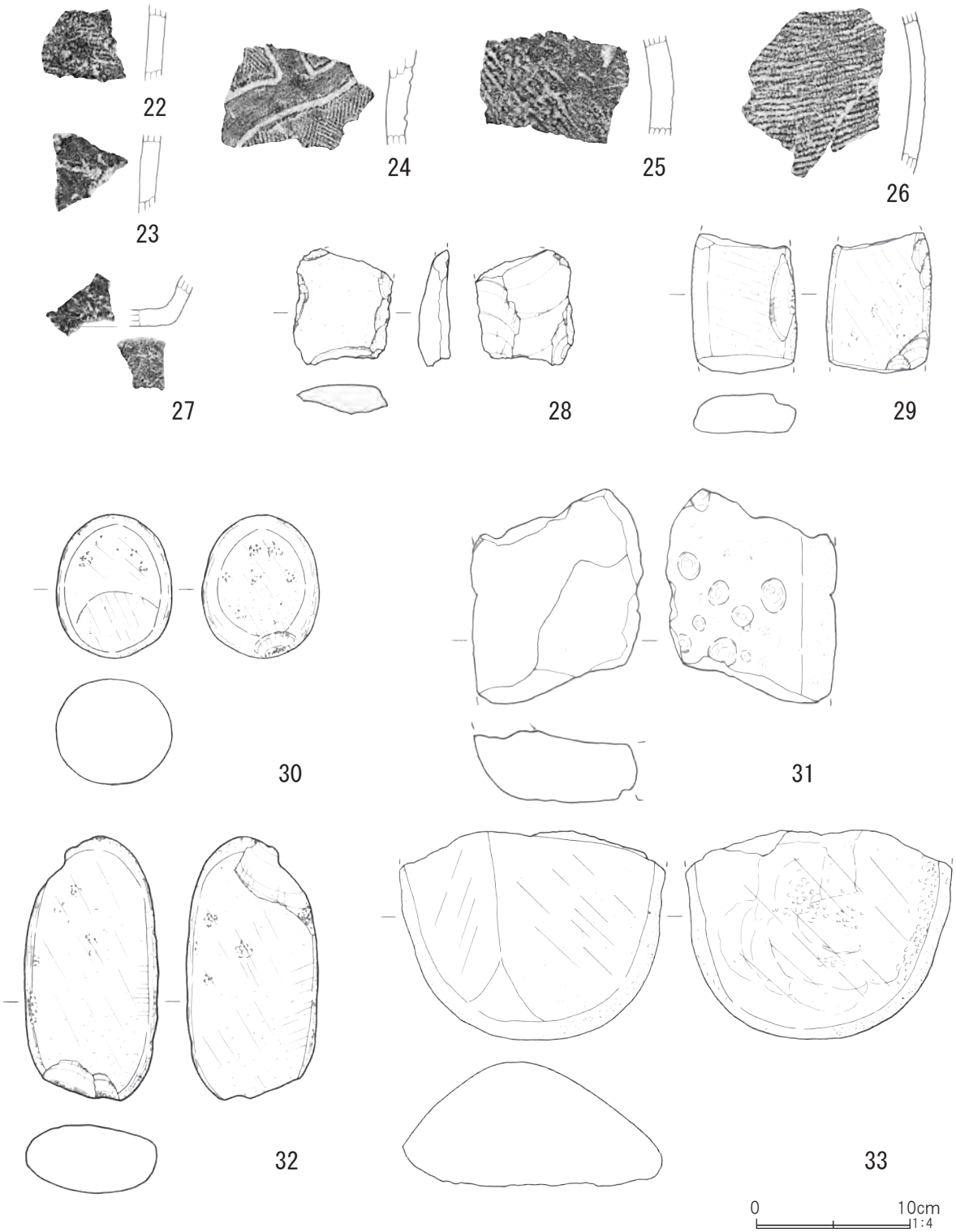
埋土は、レンズ状の堆積土のため、自然堆積と考えられる

出土遺物は、縄文土器が出土した。

時期は、出土遺物から判断して、縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。



第 39 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡出土遺物 (1)



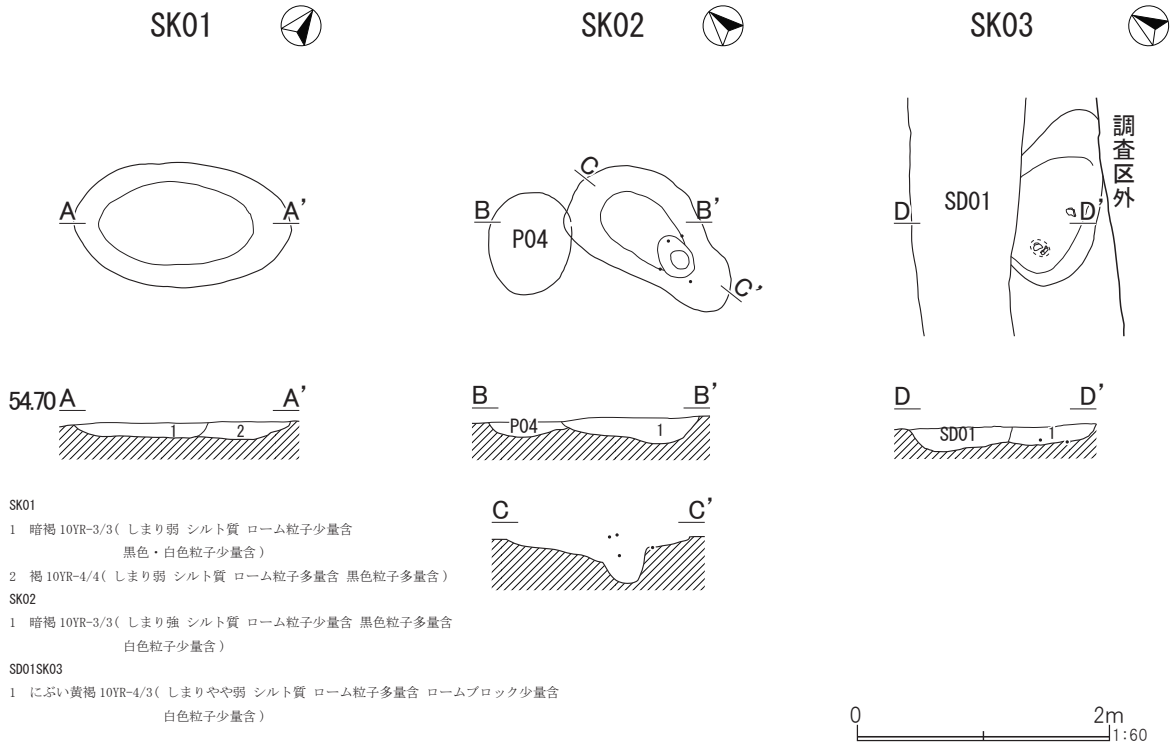
第 40 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡出土遺物 (2)

第 13 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 39・40 図）

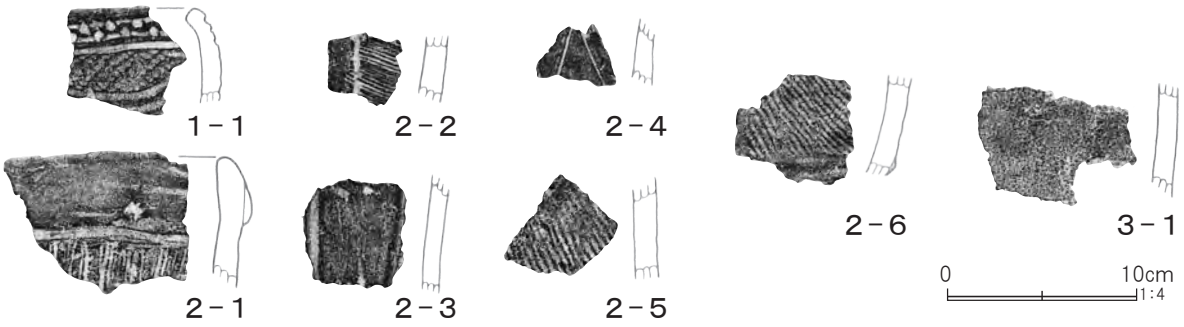
図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
1	縄文土器 深鉢	—	(28.6)	8.0	ABHM	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	胴部～ 底部	LR 充填縄文、「R」区画文 称名寺Ⅰ
2	縄文土器 深鉢	—	(18.8)	6.0	ABH	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部～ 底部	無節充填縄文、「R」区画文 円形刺突文、称名寺Ⅰ
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABEIJM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABK	明赤褐 5YR-5/8	B	破片	沈線、縄文、「R」字文か
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIJKN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	破片	沈線、縄文
6	縄文土器	—	—	—	ABN	にぶい黄 2.5Y- 6/4	B	胴部片	沈線、縄文、「R」字文か
7	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部 片	
8	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部 片	
9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部 片	沈線、縄文
１０	縄文土器 深鉢	—	—	—	AEJM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	沈線、縄文、隆帯
１１	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯 加曾利Ｅか
１２	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯 加曾利Ｅか
１３	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIJM	灰黄褐 10YR- 6/2	B	破片	条線
１４	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHM	浅黄橙 10YR- 8/3	B	胴部片	沈線
１５	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIM	浅黄 2.5Y-7/3	B	胴部片	沈線
１６	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線
１７	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	淡黄 2.5Y-8/4	B	胴部片	沈線、縄文 円形刺突文
１８	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIMN	橙 5YR-6/6	B	胴部片	沈線、縄文
１９	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABEIJM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	
２０	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIMN	灰黄褐 10YR- 6/2	B	胴部片	
２１	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	灰黄褐 10YR- 5/2	B	胴部片	沈線
２２	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	橙 5YR-6/6	B	胴部片	
２３	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABEGIM	橙 7.5YR-6/6	B	破片	縄文 表面剥落
２４	縄文土器 深鉢	—	—	—	ACIN	灰 5Y-4/1	B	胴部片	沈線、充填縄文か 称名寺か
２５	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIMN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	撚糸文
２６	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIJM	明黄褐 10YR- 6/6	B	胴部片	縄文
２７	縄文土器 深鉢	—	(3.4)	(7.8)	ABIJN	橙 5YR-6/6	B	底部 20 ％	
２８	石器 礫器	最大長 7.5　最大幅 6.5　最大厚 2.0　重量 105.7 g							石材：ホルンフェルス 上端欠損

第 13 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 39・40 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
２９	石器 磨石	最大長（8.8）　最大幅 6.7　最大厚 2.5　重量 243 g							石材：砂岩 被熱、上下欠損
３０	石器 磨石	最大長 9.3　最大幅 7.5　最大厚 6.9　重量 711 g							石材：閃緑岩
３１	石器 磨石	最大長 17.1　最大幅 8.4　最大厚 4.4　重量 981 g							石材：砂岩
３２	石器 石皿	最大長（13.9）　最大幅（11.1）　最大厚（4.7）重量 756.5 g							石材：安山岩 一部のみ残存
３３	石器 石皿	最大長 13.2　最大幅 17.4　最大厚 8.0　重量 2600 g							石材：閃緑岩 被熱、上半部欠損



第 41 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～３号土坑



第 42 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～３号土坑出土遺物

第２号土坑（第 41、42 図、第 14 表）

調査区の北部に位置する。Ｇ・Ｈ－１、Ｈ－２グリッドにある。西側は第４号ピットと重複関係にあり、第４号ピットを切っている。平面形は検出長軸 1.55 ｍ、検出短軸 0.82 ｍの楕円形をしている。　深さは、遺構確認面から最深 0.33m を測る。床面は一部深くなるが概ね平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、縄文土器が出土した。

時期は、出土遺物から判断して、縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。

第３号土坑（第 41、42 図、第 14 表）

調査区の南西部に位置する。Ｈ－２・３グリッドにある。南端は調査区外になる。北側は第１号溝跡と重複関係にあり、第１号溝跡に切られている。平面形は検出長軸 1.45 ｍ、検出短軸 0.65 ｍの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.27 ｍを測る。床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、縄文土器が出土した。

時期は、出土遺物から判断して、縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。

ウ　溝跡

第１号溝跡（第 43、44 図、第 15 表）

調査区の北西端に位置する。Ｈ・Ｉ－２、Ｈ・Ｇ－３、グリッドにある。北西端が調査区外になる。第１号竪穴建物跡、第３号土坑、第１号ピットと重複し、第１号竪穴建物跡、第３号土坑、第１号ピットを切っている。規模については、南北端が調査区外となる。検出最大長軸 6.65 ｍ、検出最大短軸 0.65 ｍを測る。走行軸の方位はほぼ東に傾くが南北方向であり、東西走行方向箇所は概ねＮ－ 53°－Ｅを示す。

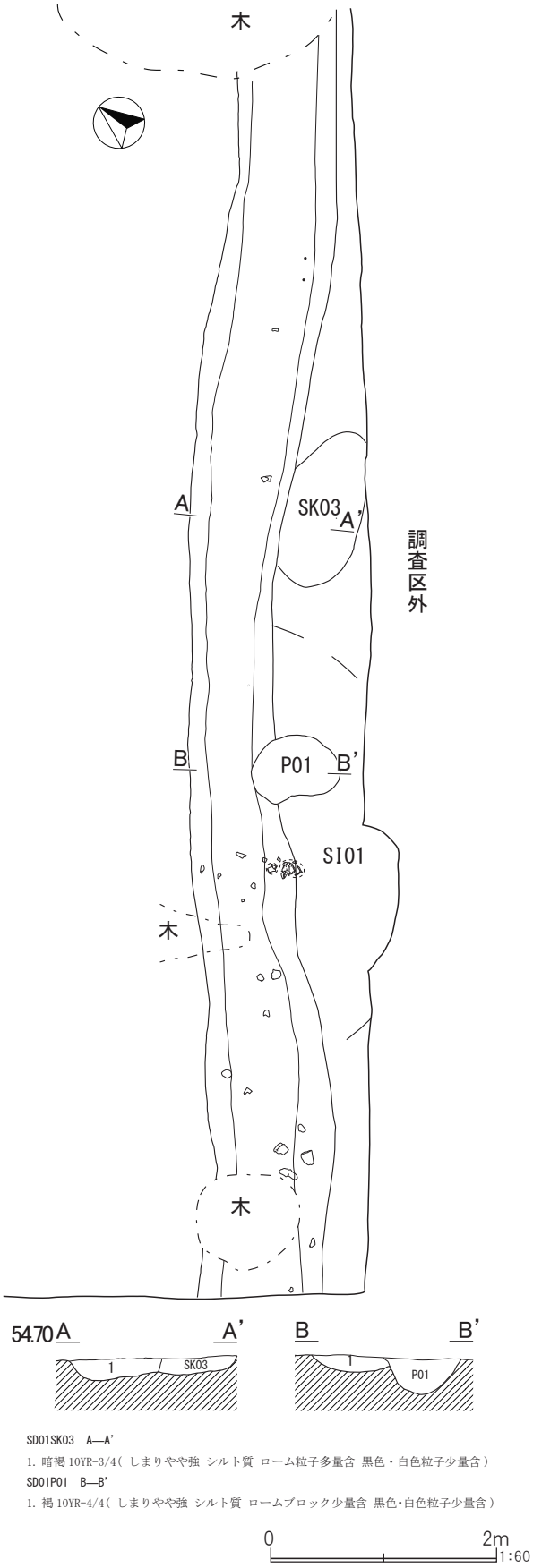
深さは、遺構確認面から最深で 0.17 ｍを測る。床面は平坦である。

出土遺物は、縄文土器、石錘、石皿が出土した。第１号竪穴建物跡と重複する箇所に多数の遺物が検出されるため、第１号竪穴建物跡からの流込みと考えられる。

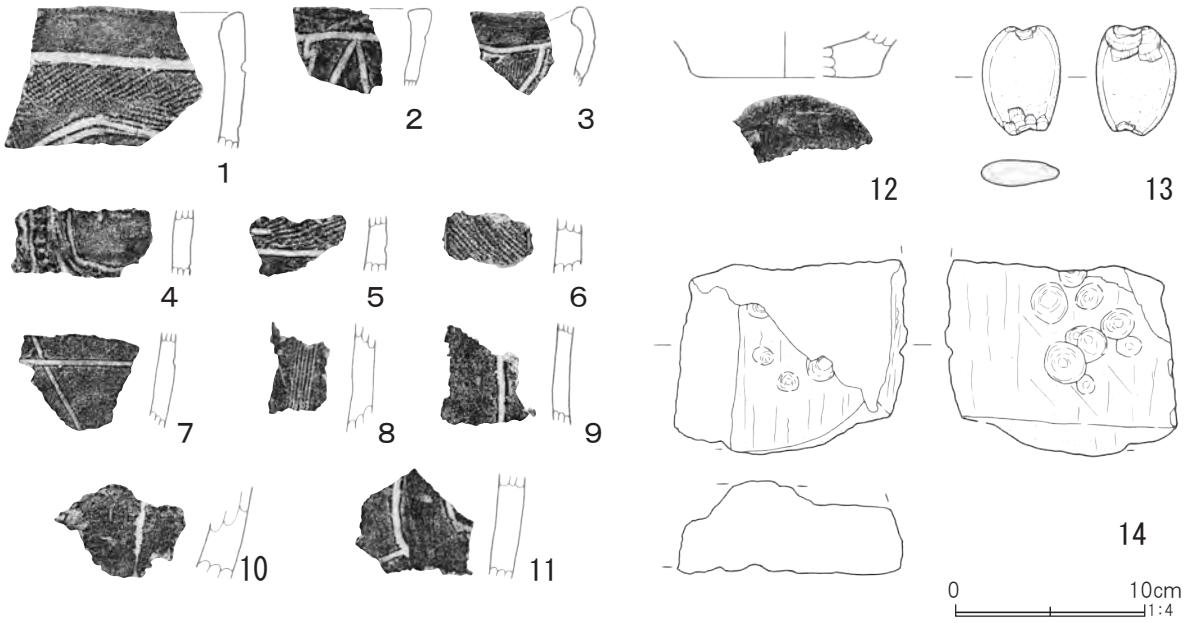
時期は、不明である。

第 14 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～３号土坑出土遺物観察表（第 42 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABJM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	交互刺突文、沈線、縄文加曾利Ｅか
2-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIJMN	浅黄橙 10YR-8/4	B	口縁部片	条線、隆帯
2-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABHMN	明黄褐 10YR-6/6	B	胴部片	沈線、条線
2-3	縄文土器深鉢	—	—	—	ADKMN	黄褐 10YR-5/8	B	胴部片	沈線
2-4	縄文土器深鉢	—	—	—	ABGM	橙 7.5YR-7/6	B	胴部片	沈線
2-5	縄文土器深鉢	—	—	—	ABIKM	橙 7.5YR-7/6	B	胴部片	縄文
2-6	縄文土器深鉢	—	—	—	AEIKMN	黒褐 2.5Y-3/2	B	胴部片	隆帯、縄文
3-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABEIKM	外面：明黄褐 10YR-7/6	B	胴部片	



第 43 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号溝跡



第 44 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号溝跡出土遺物

第 15 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号溝跡出土遺物観察表（第 44 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGJM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線、縄文
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABN	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部片	沈線
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIKMN	赤褐 5YR-4/6	B	口縁部片	沈線、縄文
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	AEIJM	明褐 7.5YR-5/6	B	胴部片	沈線、隆帯
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDKM	明黄褐 10YR- 6/6	B	胴部片	沈線、縄文、列点文か
6	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	浅黄橙 10YR- 8/4	B	胴部片	沈線、縄文
7	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABCDIKM	明黄褐 10YR- 6/6	B	胴部片	沈線
8	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHIM	橙 7.5YR-7/6	B	胴部片	条線
9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJMN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線
10	縄文土器 深鉢	—	—	—	ACDMN	黄橙 10YR-8/6	B	胴部片	底部付近
11	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線 称名寺か
12	縄文土器 深鉢	—	(2.4)	(8.2)	ABDIM	明黄褐 10YR- 7/6	B	底部 30 %	
13	石器 石錘	最大長 5.8　最大幅 4.2　最大厚 1.3　重量 46.2 g							石材：砂岩 打欠石錘
14	石器 石皿	最大長 9.8　最大幅 11.9　最大厚 4.7　重量 950 g							石材：緑泥片岩

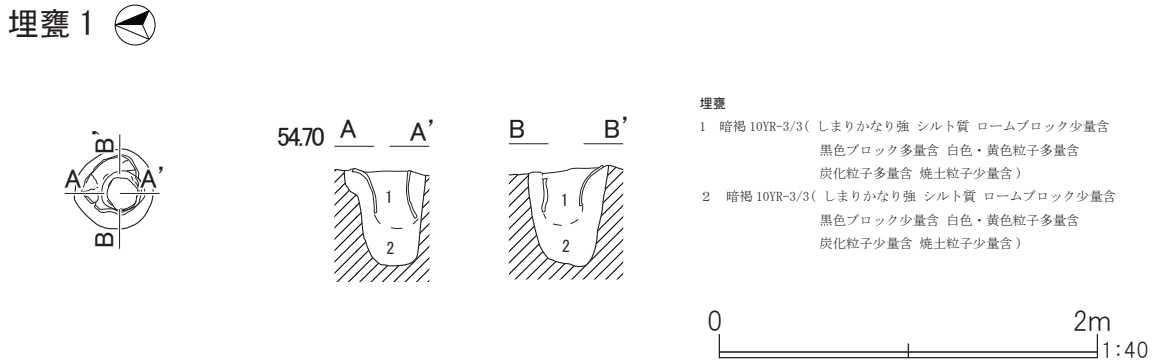
エ　埋甕

第１号埋甕（第 45、46 図、第 16 表）

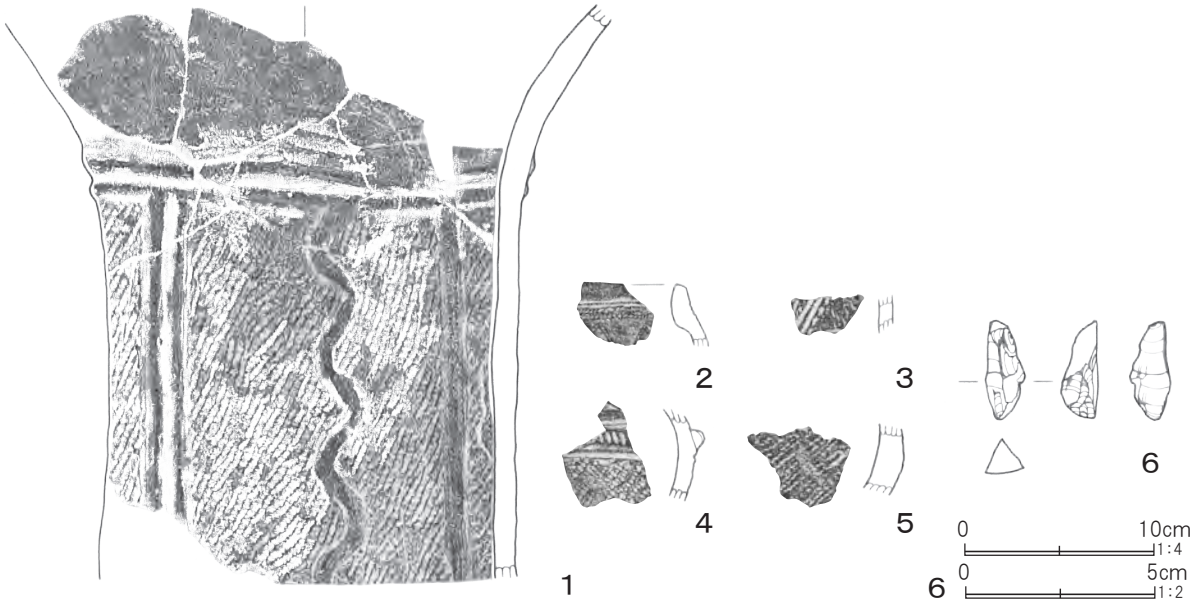
調査区の北端に位置し、Ｇ－１グリッド内にある。平面形は検出長軸 0.41 m、検出短軸 0.35 mの円形をしている。深さは遺構確認面から最深 0.5 mである。縄文土器の頸部～胴部下半までが正位の状態で埋設されていた。口縁部及び底部については、確認できなかった。土器内の土を精査した結果、縄文土器及び石器が出土した（２～６）。

出土遺物は、縄文土器と剥片石器が出土した。１は頸部～胴下半部であり、頸部は無文帯で胴部上半部との境目に横方向の２条の隆帯と縦方向の隆帯が確認できる。この隆帯の中には蛇行するものもあることから加曾利ＥⅡ式と考えられる。２、３は勝坂式土器、４、５は加曾利Ｅ式と考えられる。６は黒曜石製の楔型石器である。

時期は出土遺物から縄文時代中期後半と考えられる。



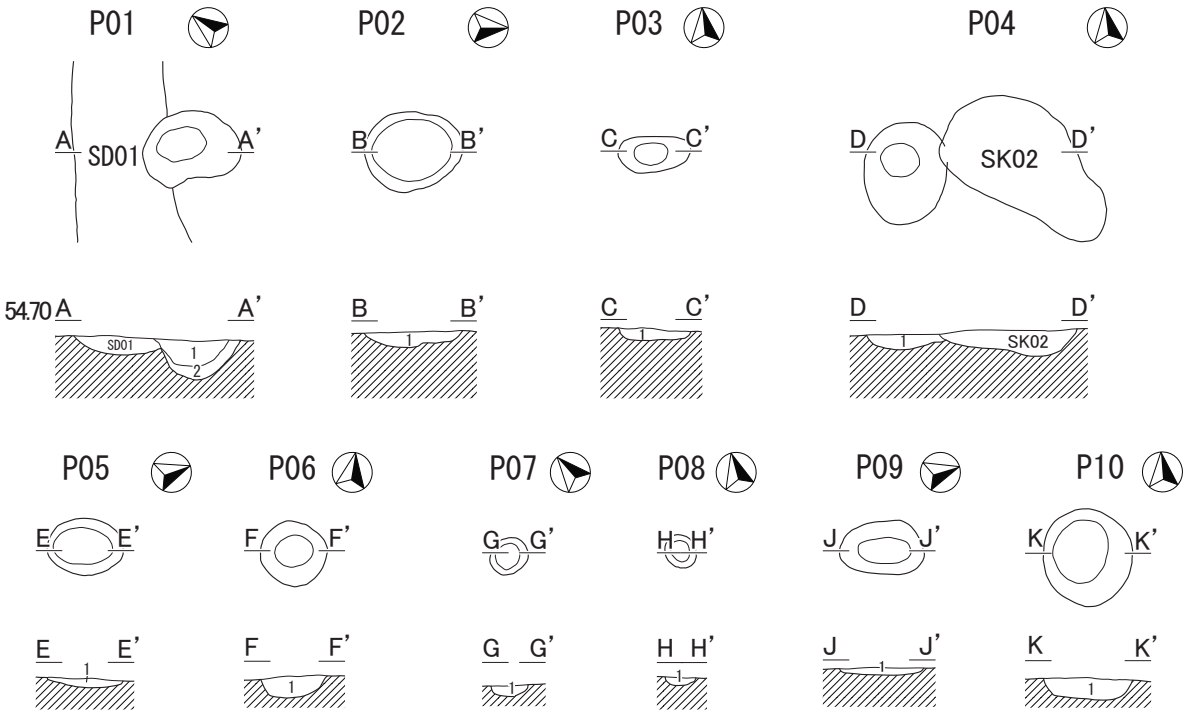
第 45 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号埋甕



第 46 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号埋甕出土遺物

第 16 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１号埋甕出土遺物観察表（第 46 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
1	縄文土器	—	30.3	—	ABDI	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部 80%	
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部片	沈線、竹管押引文（細い） 勝坂か
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	AHM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、竹管押引文
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGIM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	底部付近 撚糸文か
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、隆帯、キザミ、縄文 加曾利Ｅか
6	石器 楔型石器	最大長 2.6　最大幅 1.0　最大厚 1.0　重量 1.8 g							石材：黒曜石



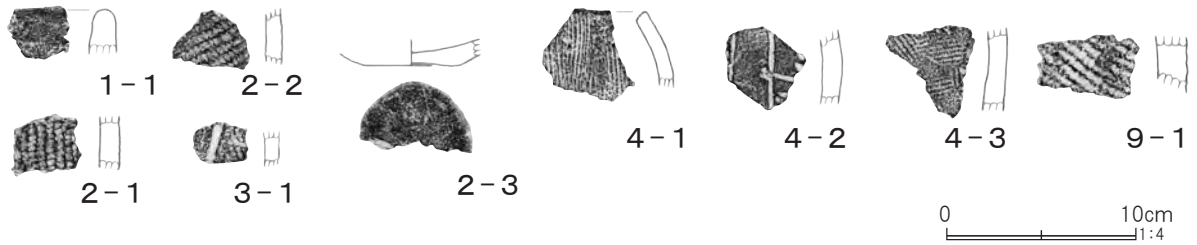
P01
1　にぶい黄褐 10YR-4/3(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子・ブロック少量含 黒色粒子多量含)
2　褐 10YR-4/4(しまり弱 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色粒子少量含)
P02
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや強 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含)
P03
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
P04
1　暗褐 10YR-3/3(しまり強 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含 白色粒子少量含)
P05
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
P06
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含)
P07
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含)
P08
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色粒子少量含)
P09
1　暗褐 10YR-3/4(しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子少量含)
P10
1　黒褐 10YR-2/3(しまりやや強 シルト質 ローム粒子・ブロック少量含 黒色粒子多量含 白色粒子少量含)

0　2m　1:60

第 47 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～ 10 号ピット

第 17 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～ 10 号ピット一覧表（第 47 図）

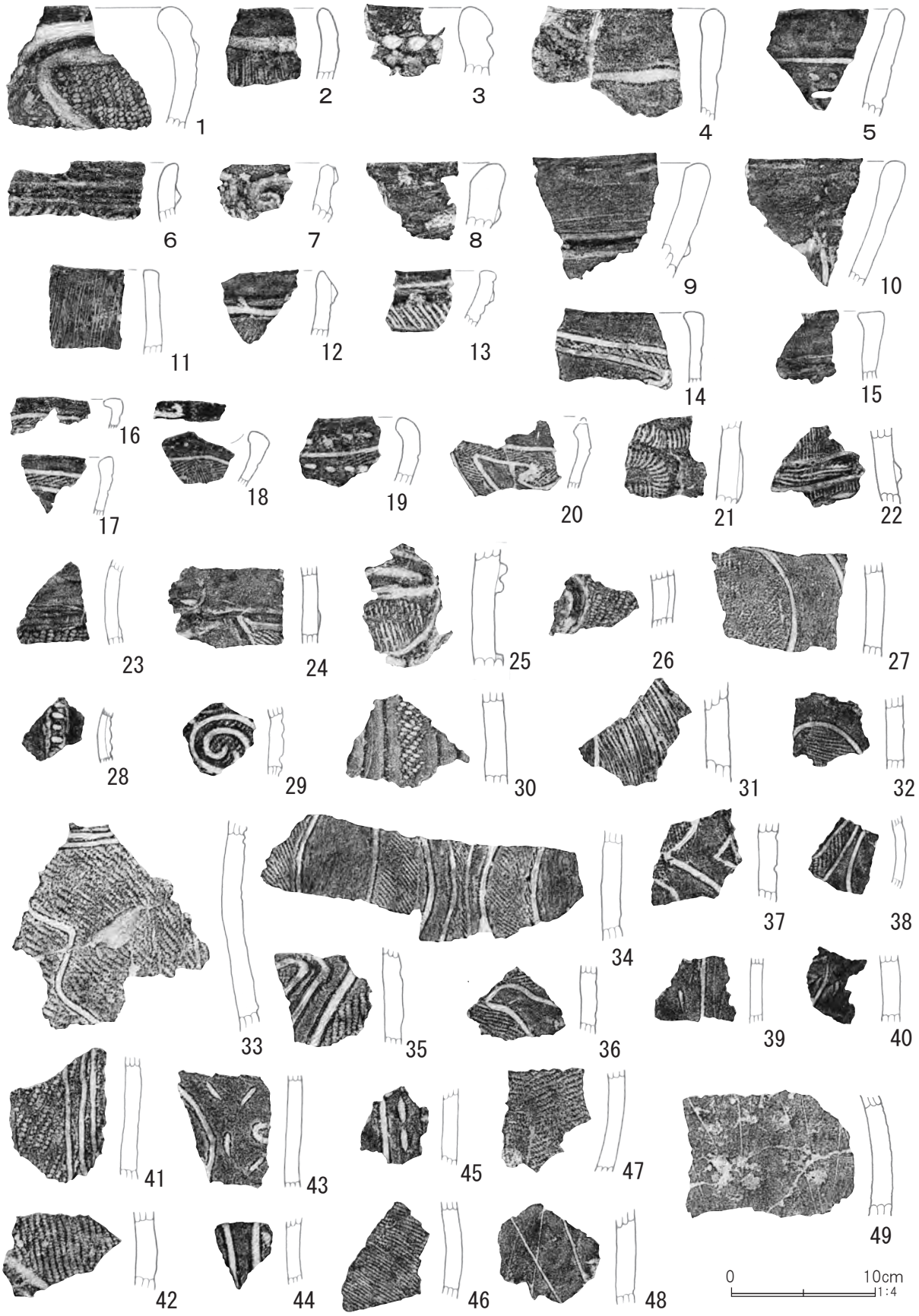
番号	位置（グリッド）	プラン	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	H-3	楕円形	78	65	30	縄文土器	縄文時代	SD01	
P02	H-2	楕円形	80	65	12	縄文土器	縄文時代		
P03	G-1	楕円形	58	29	9	縄文土器	縄文時代		
P04	G-1	楕円形	80	66	12	縄文土器	縄文時代	SK02	
P05	H-2	楕円形	60	45	6		縄文時代		
P06	H-2	円形	52	50	16		縄文時代		
P07	H-2	円形	29	29	8		縄文時代		
P08	H-2	円形	25	25	5		縄文時代		
P09	G・H-2	楕円形	66	40	4	縄文土器	縄文時代		
P10	H-2	楕円形					縄文時代		



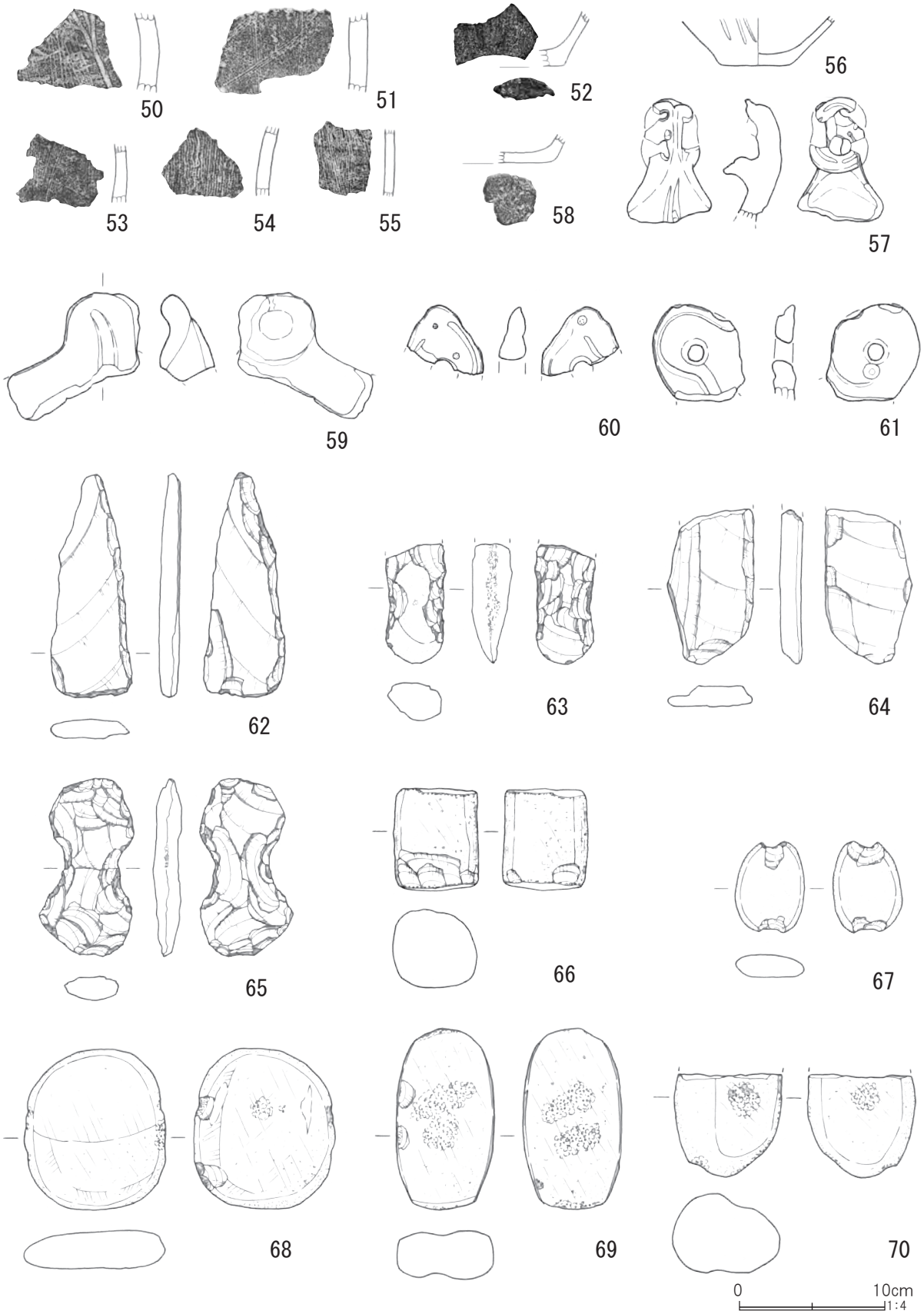
第 48 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～４・９号ピット出土遺物

第 18 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区第１～４・９号ピット出土遺物観察表（第 48 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDIM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	
2-1	縄文土器深鉢	—	—	—	BDM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	縄文
2-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ADGHM	にぶい黄褐 10YR-5/3	B	胴部片	縄文
2-3	縄文土器深鉢	—	(1.4)	5.0	ABM	灰黄褐 10YR-4/2	B	底部 50%	
3-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABM	明黄褐 10YR-7/6	B	胴部片	沈線、縄文
4-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDHM	にぶい黄褐 10YR-5/3	B	口縁部片	条線 内面：スス状付着物
4-2	縄文土器深鉢	—	—	—	ABHM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２か
4-3	縄文土器深鉢	—	—	—	ABM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	縄文
9-1	縄文土器深鉢	—	—	—	ABG	明黄褐 10YR-6/6	B	胴部片	撚糸文



第 49 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構外出土遺物 (1)



第 50 図　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構外出土遺物 (2)

第 19 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構外出土遺物観察表（第 49・50 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJMN	明黄褐 2.5YR-5/6	B	口縁部片	縄文、隆帯 加曾利Ｅ
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABEIM	浅黄 2.5Y-7/4	B	口縁部片	沈線、条線
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGHKM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	円形刺突
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHJMN	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	沈線
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIMN	橙 2.5YR-6/8	B	口縁部片	称名寺２
6	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGN	橙 5YR-6/6	B	口縁部片	隆帯
7	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	隆帯、渦巻き文 加曾利Ｅ
8	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	波状口縁か
9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJKM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	隆帯
10	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線
11	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	条線
12	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	隆帯、沈線、縄文
13	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	橙 5YR-7/6	B	口縁部片	沈線 加曾利Ｅか
14	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	沈線、縄文 称名寺か
15	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい赤褐 5YR-5/4	B	口縁部片	
16	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部片	沈線、縄文
17	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJM	にぶい黄褐 10YR-5/3	B	口縁部片	沈線、縄文
18	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部片	波状口縁 沈線、縄文
19	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	刺突文、沈線、磨削縄文
20	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIMO	にぶい赤褐 5YR-4/4	B	口縁部片	沈線、縄文 称名寺か
21	縄文土器 深鉢	—	—	—	BDKNO	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	隆帯、連続爪形文 勝坂
22	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIJM	橙 5YR-6/6	B	胴部片	隆帯、細縄文 勝坂か
23	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGHJKM	灰褐 7.5YR-6/2	B	胴部片	隆帯、縄文
24	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯、沈線、縄文 加曾利Ｅ
25	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADEHJMN	明黄褐 10YR-6/6	B	胴部片	隆帯、縄文（撚糸文か） 加曾利Ｅ
26	縄文土器 深鉢	—	—	—	BDHJKMN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	隆帯、縄文
27	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJMN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文
28	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADJMN	にぶい褐 7.5YR-6/3	B	胴部片	隆帯
29	縄文土器 深鉢	—	—	—	AJKM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文、渦巻き文 加曾利Ｅ
30	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIKMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯、縄文 加曾利Ｅ

第 19 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構外出土遺物観察表（第 49・50 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
31	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGJKMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、条線
32	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGJKN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文
33	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGJMN	橙 5YR-6/6	B	胴部片	沈線、縄文
34	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺
35	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDEJM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文
36	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHKM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	沈線、縄文
37	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIJM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文
38	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIJMN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文
39	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIM	外面：にぶい 黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
40	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHKM	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	胴部片	沈線
41	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIKMN	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	沈線、縄文
42	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABJM	明黄褐 10YR- 7/6	B	胴部片	沈線、縄文
43	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
44	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADHM	橙 5YR-6/6	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
45	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGHIMN	橙 2.5YR-6/6	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
46	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	縄文（撚糸文か）
47	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGHK	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	縄文
48	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIM	灰黄褐 10YR- 6/2	B	胴部片	沈線
49	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADJMNO	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線
50	縄文土器 深鉢	—	—	—	BDGIKM	外面：橙 5YR- 6/6	B	胴部片	沈線、条線
51	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGHIM	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	胴部片	条線
52	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	条線
53	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDEHM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	撚糸文 連弧文系
54	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGJM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	条線
55	縄文土器 深鉢	—	(3.7)	(6.2)	ADGHIK	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	底部片	
56	縄文土器 深鉢	—	(1.9)	(5.0)	ADM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	底部片	
57	縄文土器 深鉢	—	(3.1)	4.8	ABDHM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	底部 100%	沈線
58	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	黄褐 10YR-5/6	B	口縁部片	口縁部装飾部分
59	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	明褐 7.5YR- 5/6	B	口縁部片	口縁部装飾部分
60	縄文土器 深鉢	—	—	—	BDEHKMN	浅黄橙 10YR- 6/3	B	口縁部片	口縁部装飾部分

第 19 表　上前原遺跡第６次調査Ｂ区遺構外出土遺物観察表（第 49・50 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
61	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGIJM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	口縁部装飾部分
62	石器 打製石斧	最大長 15.3　最大幅 5.6　最大厚 1.3　重量 160 g							石材：緑泥色片岩
63	石器 打製石斧	最大長（10.6）　最大幅（6.1）　最大厚 1.5　重量 141 g							石材：緑泥色片岩 上半部欠損
64	石器 打製石斧	最大長 8.2　最大幅 4.1　最大厚 2.6　重量 115 g							石材：ホルンフェルス、短冊形　上半部欠損
65	石器 打製石斧	最大長 12.1　最大幅 6.4　最大厚 1.7　重量 152 g							石材：ホルンフェルス 撥形
66	石器 敲石	最大長 7.0　最大幅 5.7　最大厚 5.4　重量 389 g							石材：閃緑岩
67	石器 石錘	最大長 6.2　最大幅 4.7　最大厚 1.5　重量 65 g							石材：砂岩 打欠石錘
68	石器 磨石	最大長（7.1）　最大幅 7.3　最大厚 5.6　重量 383 g							石材：閃緑岩 上半部欠損
69	石器 磨石	最大長 12.3　最大幅 6.6　最大厚 3.3　重量 427 g							石材：閃緑岩
70	石器 磨石	最大長 10.9　最大幅 9.7　最大厚 2.6　重量 377 g							石材：砂岩

オ　ピット

ピットは 10 基検出された。出土遺物は、縄文土器や石器が検出された。以下、一覧表にて記述する（第 47、48 図、第 17、18 表）。

カ　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する。（第 49、50、第 19 表）

縄文土器、打製石斧、磨石、敲石、石錘が出土した。

第 20 表　上前原遺跡第７次調査遺構番号新旧対照表（左：新番号　右：旧番号）

竪穴建物跡（ＳＩ）		ピット（P）					
1	SI01	1	P01	１１	P11	２１	P21
土坑（SK）		2	P02	１２	P12	２２	P22
1	SK01	3	P03	１３	P13	２３	P23
2	SK02	4	P04	１４	P14	２４	P24
集石土坑（SS）		5	P05	１５	P15	２５	P25
1	SS01	6	P06	１６	P16	２６	P28
		7	P07	１７	P17	２７	P29
		8	P08	１８	P18		
		9	P09	１９	P19		
		１０	P27	２０	P20		

⑶　第７次調査

ア　竪穴建物跡

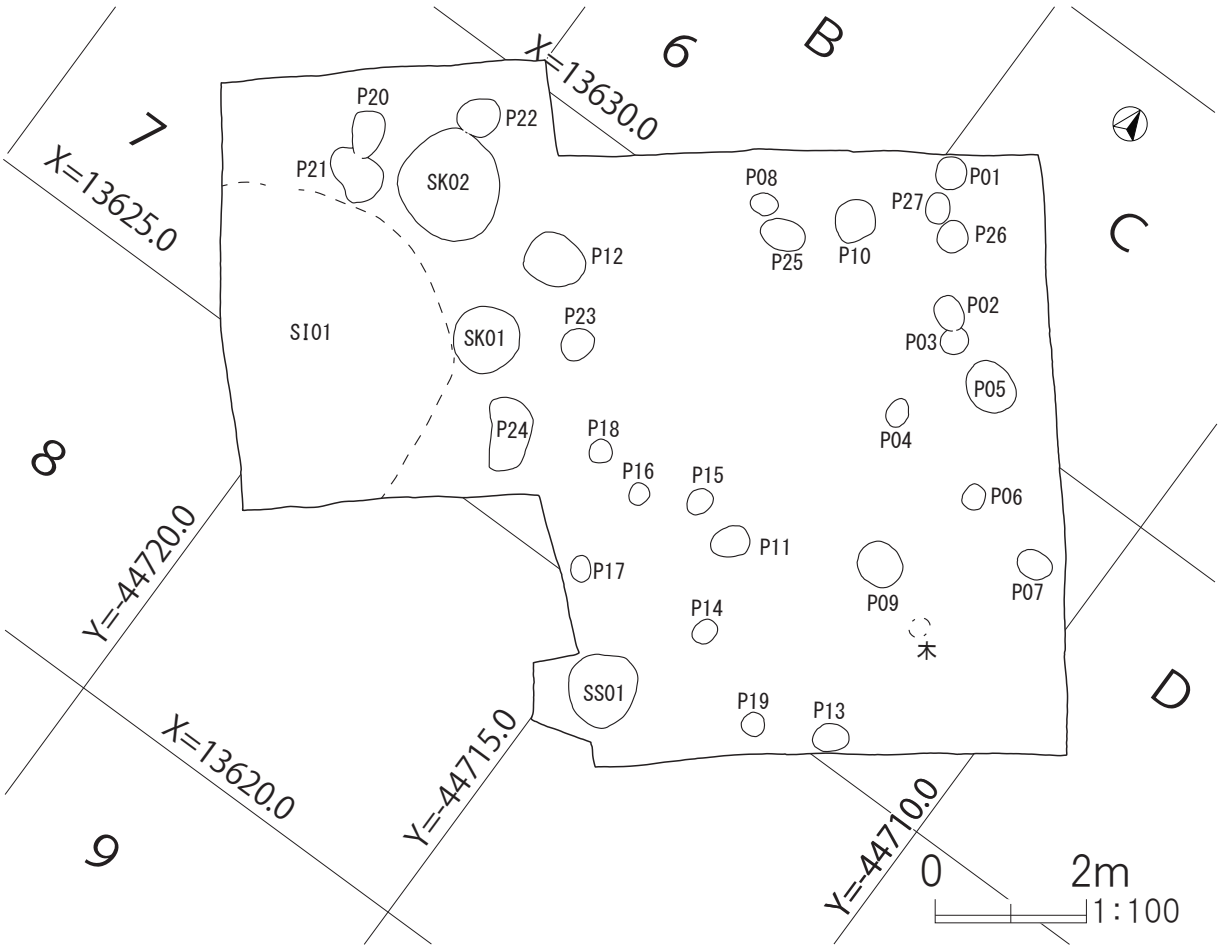
第１号竪穴建物跡（第 52 ～ 54 図、第 21 表）

調査区の西端に位置する。Ａ・Ｂ－７、Ａ・Ｂ－８グリッドにある。西端が調査区外になる。南側は第２号土坑と重複関係にあり、第２号土坑に切っている。遺構の掘込面は確認できず、炉跡やピットから規模を推定し、平面形は長軸 0.96 m、短軸 0.55 mの楕円形である。深さは、遺構確認面から最深で 0.45m を測る。床面は平坦である。炉は西壁付近に確認でき、土器を埋設したものであった。

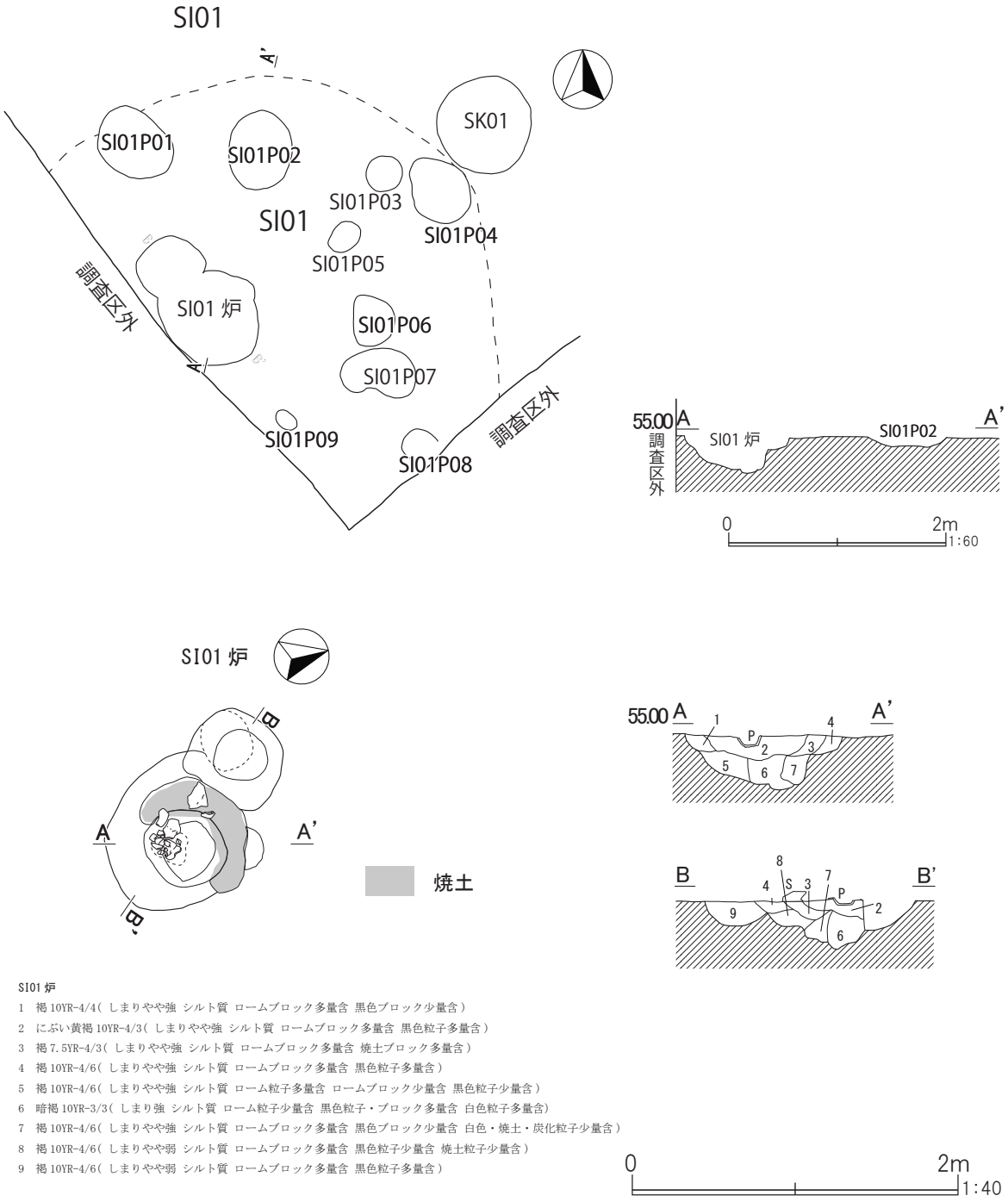
ピットは９基検出されたが、いずれも浅く、柱穴と断定できるものはなかった。ピットの規模を直径・深さの順に各々記載すると、Ｐ１が直径 0.7 m前後・0.2 m、Ｐ２が 0.74 × 0.58 m・0.1 m、Ｐ３が直径 0.3 m前後・0.1 m、Ｐ４が 0.64 m × 0.53 m・0.16 m、Ｐ５が 0.3 m × 0.24 m・0.2 m、Ｐ６が 0.45 m× 0.38 m・0.14 m、Ｐ７が 0.69 m× 0.44 m・0.15 m、Ｐ８が 0.3 m× 0.25 m・0.1 m、Ｐ９が 0.24 m× 0.13 m× 0.2 mである。

出土遺物は、縄文土器、石皿が出土した。1 は炉体土器である。

時期は、出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



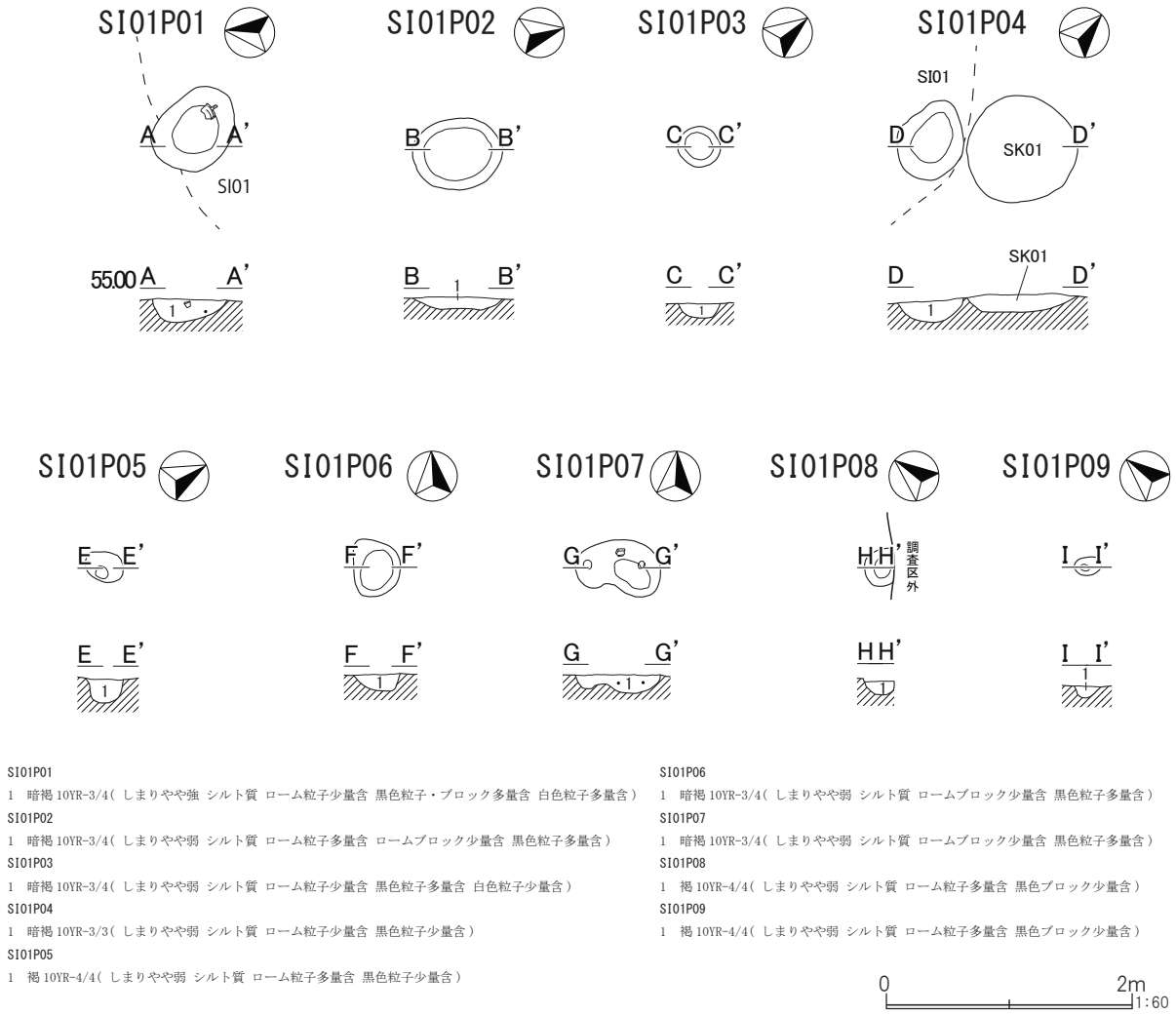
第 51 図　上前原遺跡第７次調査全測図



SI01 炉

1　褐 10YR-4/4(しまりやや強 シルト質 ロームブロック多量含 黒色ブロック少量含)
2　にぶい黄褐 10YR-4/3(しまりやや強 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子多量含)
3　褐 7.5YR-4/3(しまりやや強 シルト質 ロームブロック多量含 焼土ブロック多量含)
4　褐 10YR-4/6(しまりやや強 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子多量含)
5　褐 10YR-4/6(しまりやや強 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含 黒色粒子少量含)
6　暗褐 10YR-3/3(しまり強 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子・ブロック多量含 白色粒子多量含)
7　褐 10YR-4/6(しまりやや強 シルト質 ロームブロック多量含 黒色ブロック少量含 白色・焼土・炭化粒子少量含)
8　褐 10YR-4/6(しまりやや弱 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子少量含 焼土粒子少量含)
9　褐 10YR-4/6(しまりやや弱 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子多量含)

第 52 図　上前原遺跡第 7 次調査第 1 号竪穴建物跡 (1)



第 53 図　上前原遺跡第７次調査第１号竪穴建物跡 (2)

イ　土坑

第１号土坑（第 55、56 図、第 22 表）

調査区の北西部に位置する。Ｂ－７グリッドにある。平面形は検出長軸 0.9 m、検出短軸 0.85 mの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深で 0.15m を測る。床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、縄文土器が検出された。

時期は、出土遺物から判断すると縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。

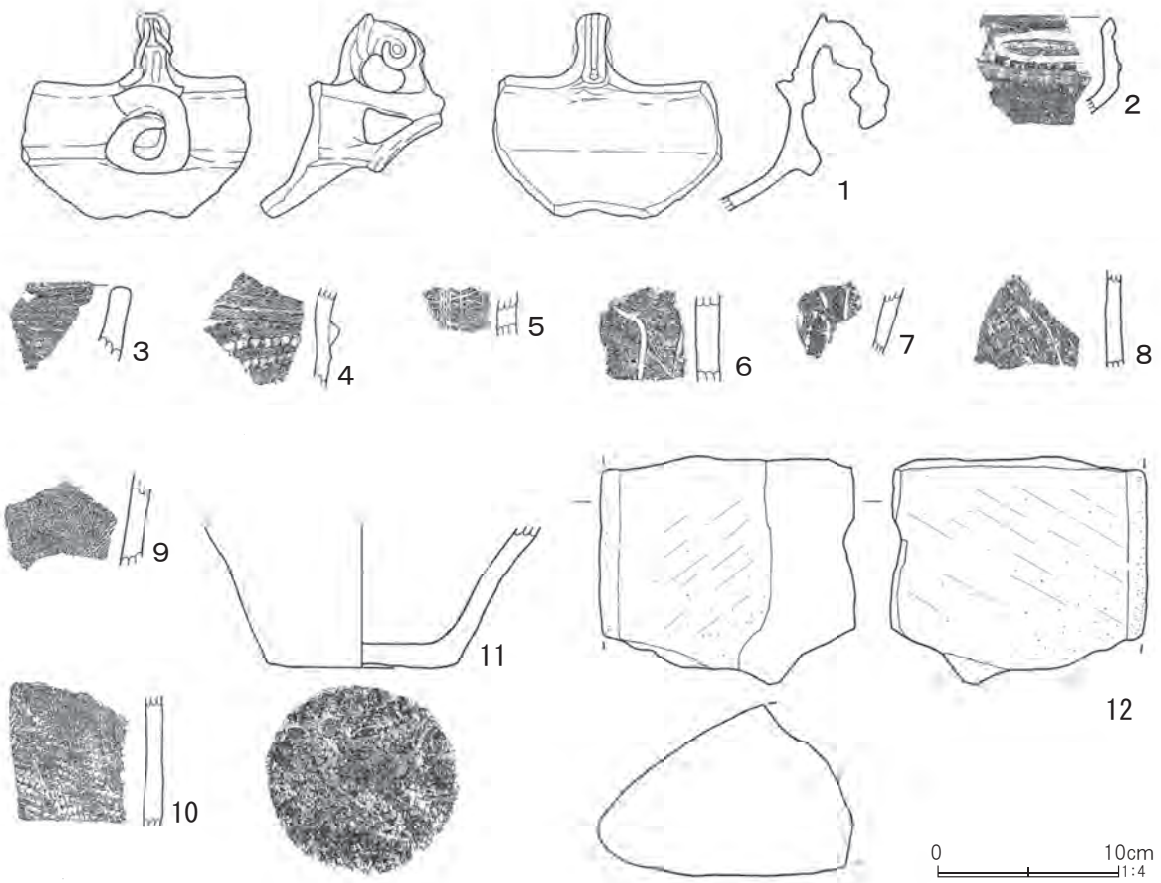
第２号土坑（第 55、56 図、第 22 表）

調査区の北西部に位置する。Ａ・Ｂ－７グリッドにある。第 22 号ピットと重複関係にある。平面形は検出長軸 0.9 m、検出短軸 0.85 mの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深 0.32m を測る。床面はほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積土であり、自然体積と考えられる。

出土遺物は、縄文土器が検出された。

時期は、出土遺物から判断すると縄文時代中期期後半～後期初頭と考えられる。



第 54 図　上前原遺跡第 7 次調査第 1 号竪穴建物跡出土遺物

第 21 表　上前原遺跡第 7 次調査第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 54 図）

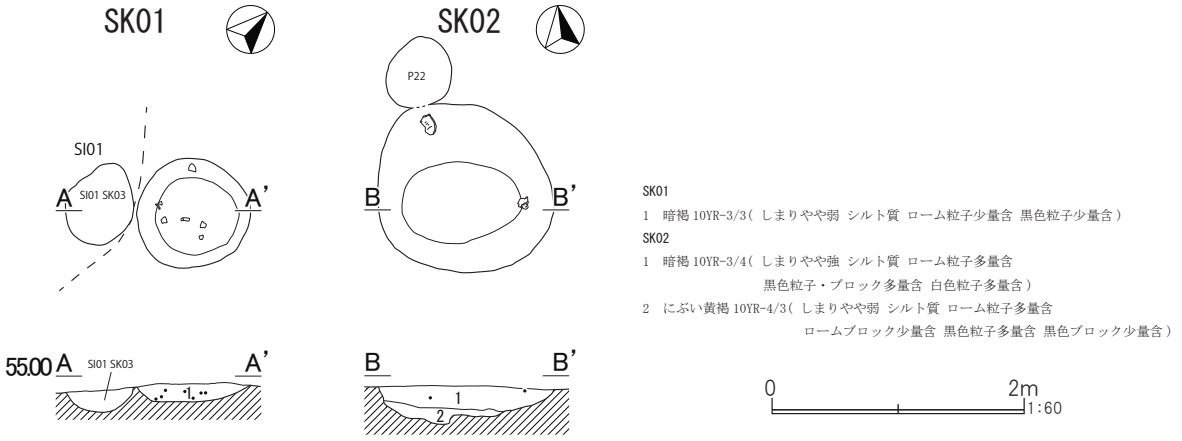
図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGHIKMN	明黄褐 10YR-6/6	B	口縁部片	口縁把手部分 渦巻きを多用 加曾利Ｅか
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	楕円形の沈線 下に隆帯後キザミ目
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGM	橙 5YR-6/6	B	口縁部片	
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDGIJMN	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	破片	断面：三角形の隆帯 横位方向の竹管押引文
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGMO	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	条線（縦位、横位） 連弧文系か
6	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIMN	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	「R」区画文か 称名寺か
7	縄文土器 深鉢	—	—	—	AJM	にぶい橙 5YR-6/4	B	胴部片	列点文 称名寺２
8	縄文土器 深鉢	—	—	—	ACM	にぶい褐 7.5YR-6/3	B	胴部片	縦方向の条線 連弧文系か
9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	条線 連弧文系か
10	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIJKMN	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	磨削縄文 撚糸文か縄文か
11	縄文土器 深鉢	—	(7.7)	(10.5)	AGHIJMNO	橙 7.5YR-7/6	B	底部 100 %	
12	石器 石皿	最大長 12.6　最大幅 14.2　最大厚 9.5　重量 2600 g							石材：閃緑岩

ウ　集石土坑

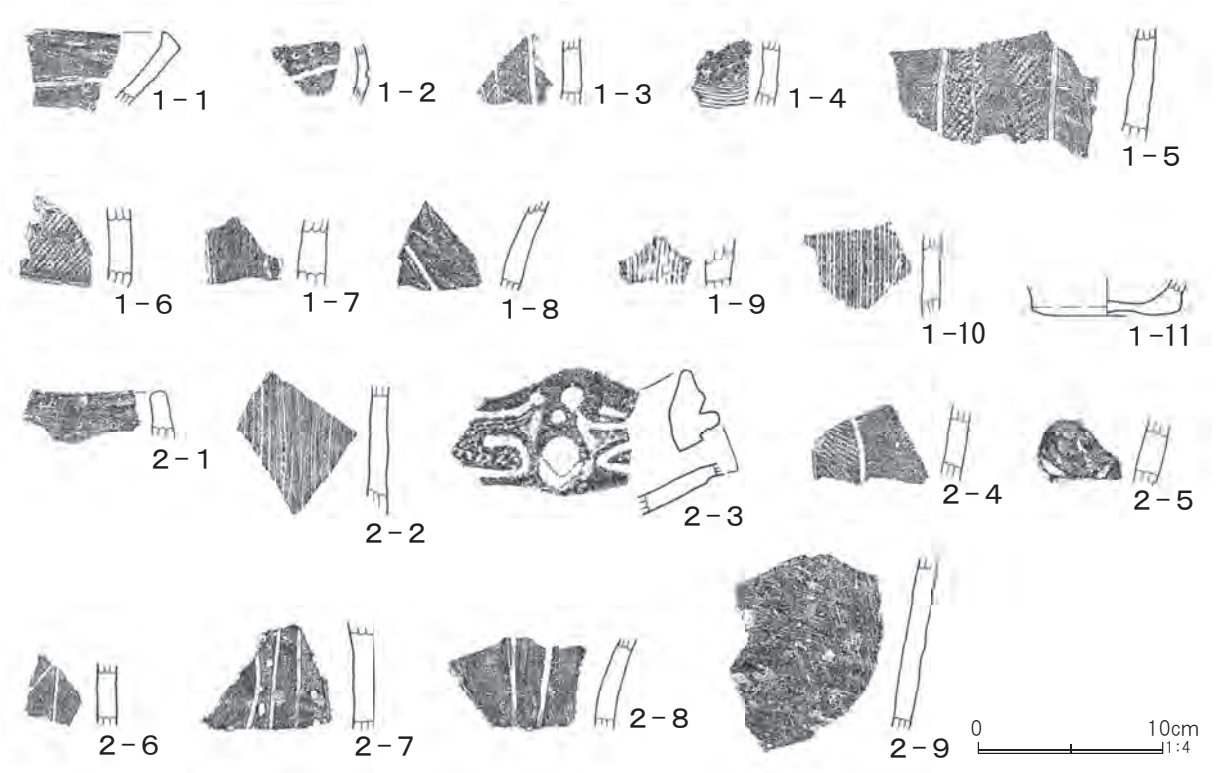
第１号集石土坑（第 57、58 図、第 23 表）

調査区の南西端に位置する。Ｃ－８グリッドにある。南側は第２号土坑と重複関係にあり、第２号土坑に切っている。平面形は検出長軸 0.96 m、検出短軸 0.95 mの楕円形をしている。深さは、遺構確認面から最深で 0.22m と浅い。中層～下層にかけて約 0.2 ～ 0.6 mの礫が配置していた。川原石でのほか、磨石や石皿も配置されていた。

出土遺物は、縄文土器、磨石、石皿が出土した。



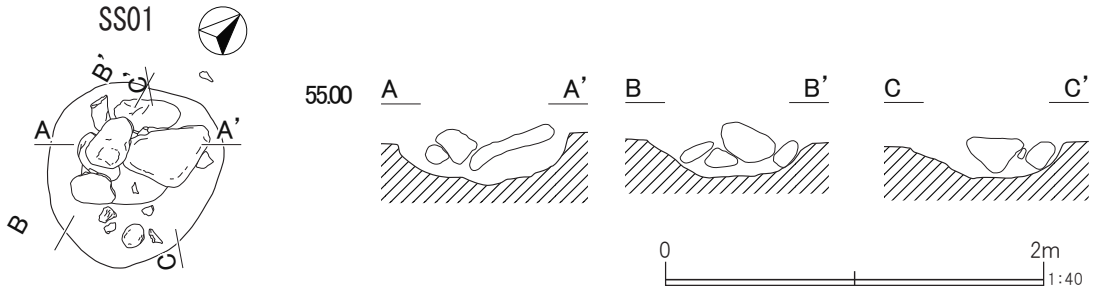
第 55 図　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑



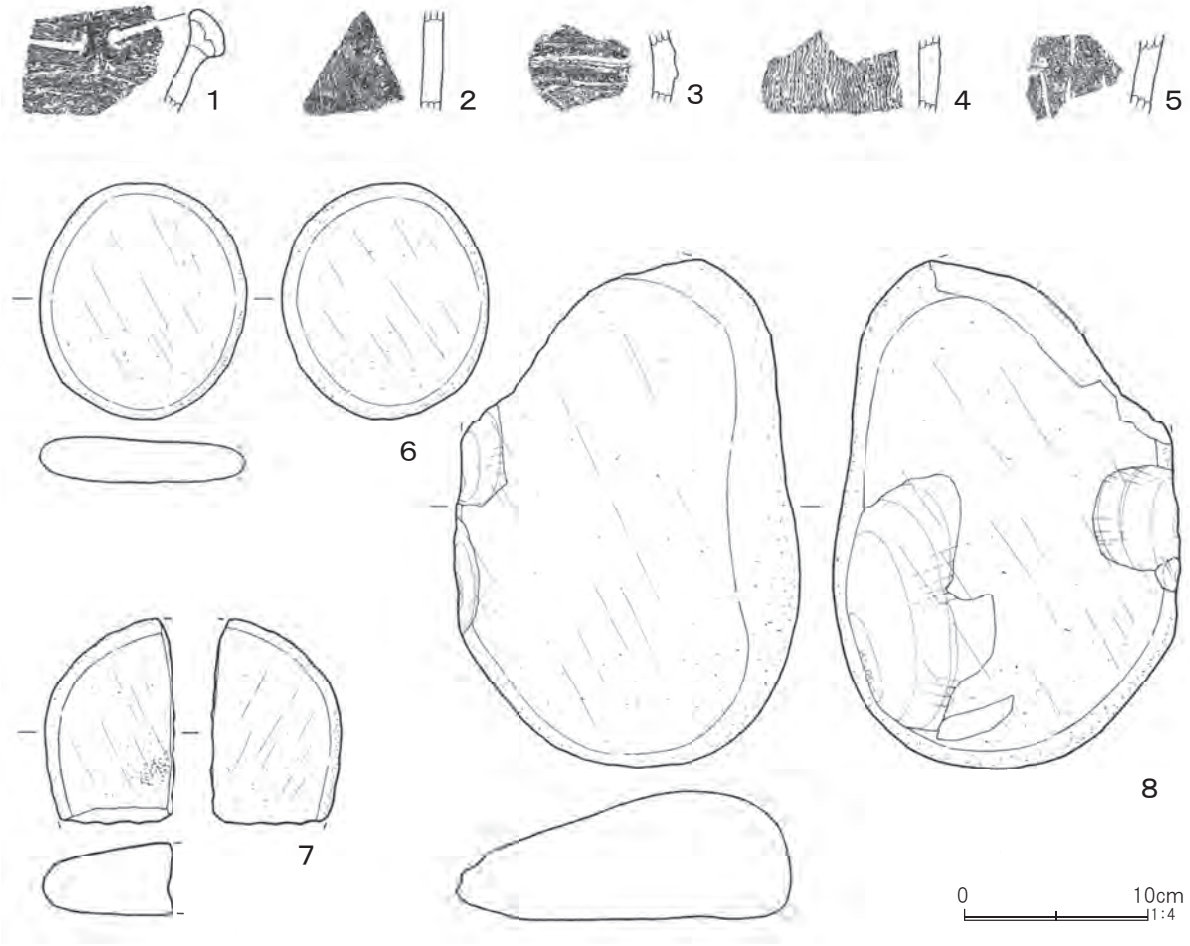
第 56 図　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑出土遺物

第 22 表　上前原遺跡第７次調査第１・２号土坑出土遺物観察表（第 56 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGJM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	
1-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	明黄褐 10YR-7/6	B	破片	刺突文、沈線、縄文 全体摩耗し不明瞭
1-3	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIM	にぶい黄褐 10YR-5/3	B	胴部片	沈線
1-4	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGM	黄褐 2.5Y-5/3	B	胴部片	条線 加曾利Ｅか、連弧文系
1-5	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	2 条の沈線、磨削縄文 加曾利Ｅ
1-6	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIMN	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	胴部片	磨削縄文
1-7	縄文土器 深鉢	—	—	—	AM	浅黄 2.5Y-7/4	B	破片	沈線
1-8	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGJM	灰黄褐 10YR-4/2	B	胴部片	沈線 称名寺
1-9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGKM	黄褐 2.5Y-5/4	B	胴部片	条線
1-10	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIJM	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	破片	条線
1-11	縄文土器 深鉢	—	(2.0)	(8.0)	ABGM	明黄褐 10YR-7/6	B	底部 40%	
2-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGM	浅黄 2.5Y-7/3	B	口縁部 10%	
2-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGI	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	条線 加曾利Ｅか
2-3	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJMN	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部片	縄文、渦巻き文 波状口縁
2-4	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIM	明灰黄 2.5Y-5/2	B	破片	沈線、磨削縄文
2-5	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIM	橙 5YR-6/8	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２か
2-6	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGMN	にぶい橙 7.5YR- 6/4	B	胴部片	沈線 称名寺か
2-7	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIKM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
2-8	縄文土器 深鉢	—	—	—	BG	明黄褐 10YR-6/6	B	胴部片	沈線、磨削縄文
2-9	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIKM	明褐 7.5YR-5/6	B	胴部片	無文か



第 57 図　上前原遺跡第７次調査第１号集石土坑



第 58 図　上前原遺跡第 7 次調査第 1 号集石土坑出土遺物

第 23 表　上前原遺跡第 7 次調査第 1 号集石土坑出土遺物観察表（第 58 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIMN		B	口縁部片	沈線
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ACIJM	明黄褐 10YR-6/6	B	胴部片	
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	縄文、2 条隆帯
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGHKM	明黄褐 2.5Y-7/6	B	胴部片	横位波状条線 連弧文系か
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺 2
6	石器 磨石	最大長 12.8　最大幅 11.3　最大厚 2.4　重量 551 g							石材：閃緑岩
7	石器 磨石	最大長（11.2）　最大幅（7.0）　最大厚 4.0　重量 483 g							石材：閃緑岩
8	石器 石皿	最大長（27.5）　最大幅 18.8　最大厚 7.1　重量 5000 g							石材：閃緑岩 被熱

時期は、出土遺物から縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。

エ　ピット

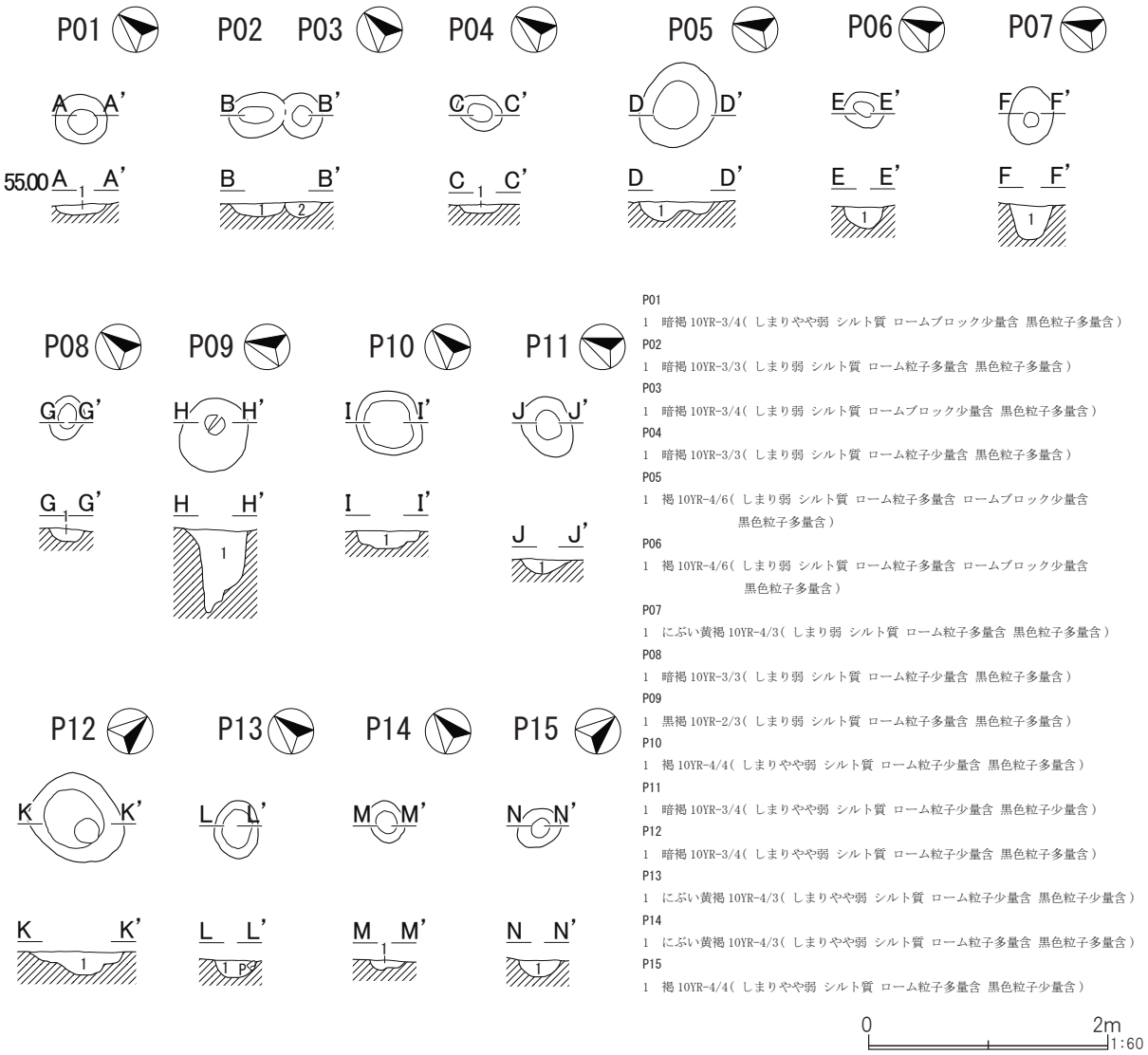
ピットは 27 基検出された。出土遺物は、縄文土器や石器が検出された。

以下、一覧表にて記述する（第 59 ～ 61 図、第 24・25 表）。

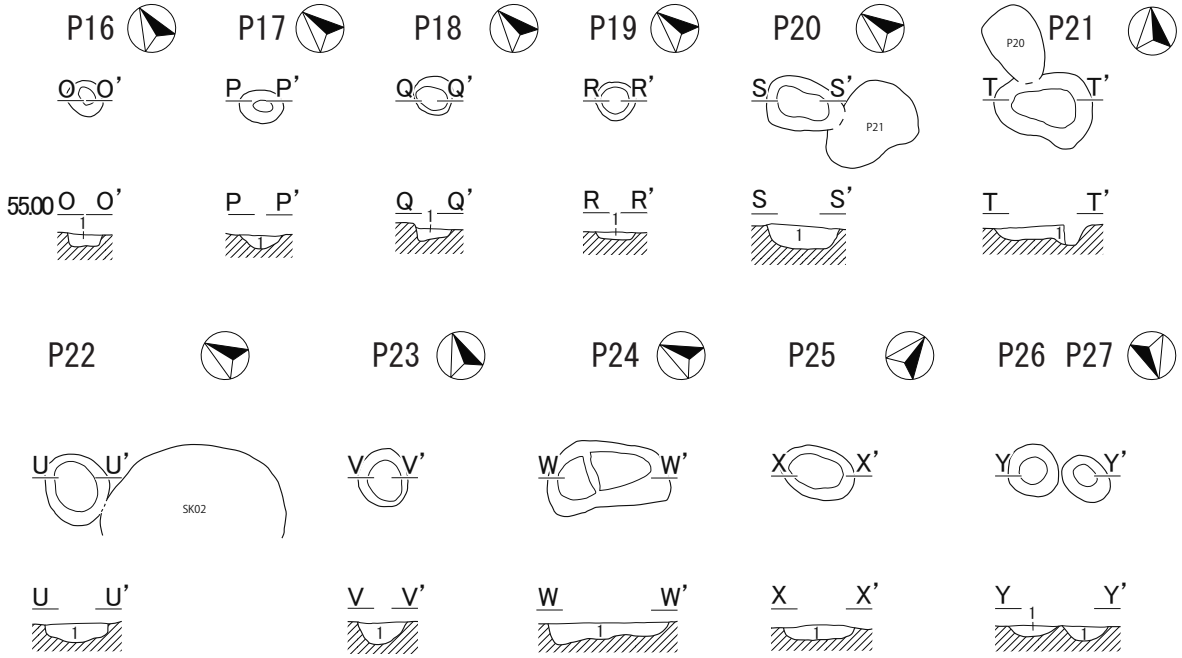
オ　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する（第 62、63 図、第 26 表）。

縄文土器、石鏃、打製石斧、磨石、敲石が出土した。



第 59 図　上前原遺跡第７次調査第１～ 15 号ピット



P16
1　暗褐 10YR-3/3（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含）
P17
1　暗褐 10YR-3/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含）
P18
1　暗褐 10YR-3/3（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子含 黒色粒子多量含）
P19
1　褐 10YR-4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色粒子少量含）
P20
1　褐 10YR-4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含 黒色粒子少量含）
P21
1　にぶい黄褐 10YR-4/3（しまりやや強 シルト質 ロームブロック少量含 黒色粒子多量含 白色粒子少量含）

P22
1　褐 10YR-4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色粒子多量含 白色粒子少量含）
P23
1　暗褐 10YR-3/4（しまりやや弱 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子少量含）
P24
1　暗褐 10YR-3/4（しまりやや弱 シルト質 ロームブロック多量含 黒色粒子少量含）
P25
1　褐 10YR4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子多量含 黒色粒子少量含）
P26
1　褐 10YR-4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含）
P27
1　褐 10YR-4/4（しまりやや弱 シルト質 ローム粒子少量含 黒色粒子多量含）

0　2m
1:60

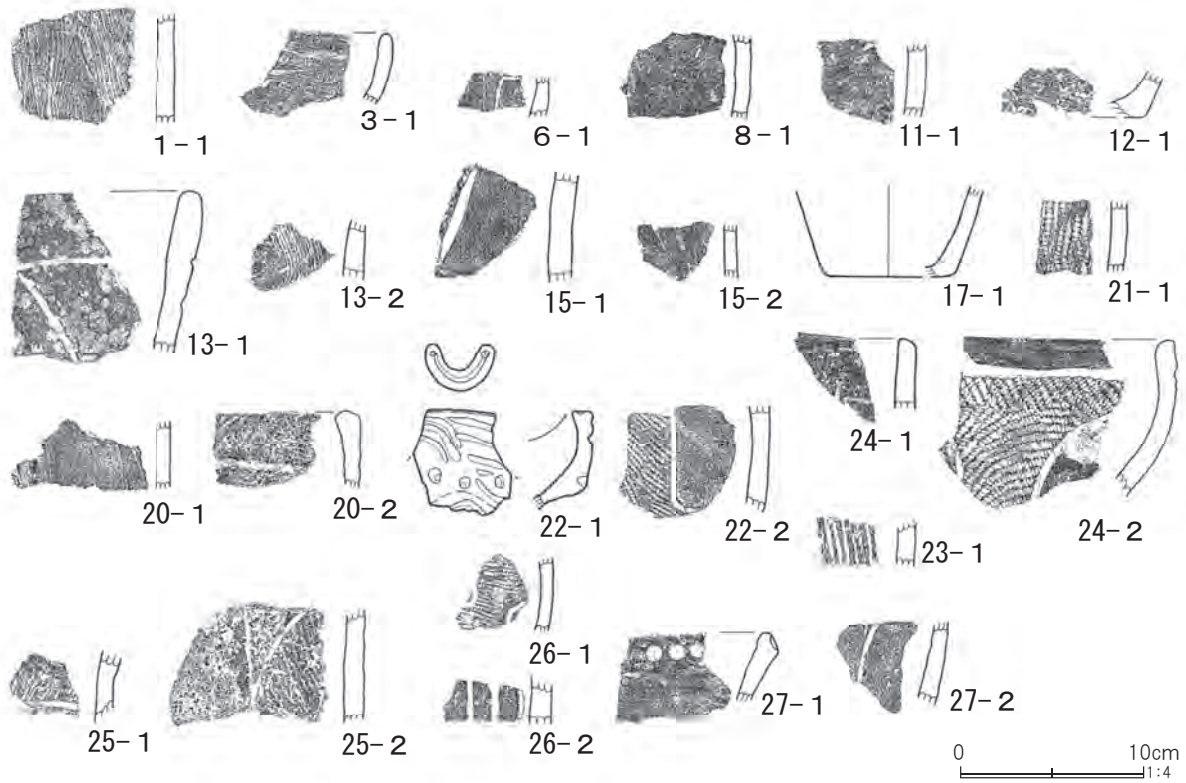
第 60 図　上前原遺跡第 7 次調査第 16 ～ 27 号ピット

第 24 表　上前原遺跡第 7 次調査ピット一覧表（第 60 図）

番号	位置（グリッド）	プラン	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	B・C-6	楕円形	43	40	8	縄文土器	縄文時代		
P02	C-6	楕円形	43	36	10		縄文時代	P03	
P03	C-6	楕円形	36	30	12	縄文土器	縄文時代	P02	
P04	C-7	楕円形	39	30	7		縄文時代		
P05	C-6	楕円形	64	72	15		縄文時代		
P06	C-7	楕円形	35	33	16	縄文土器	縄文時代		
P07	C-7	楕円形	46	43	28		縄文時代		
P08	B-6	楕円形	36	30	8	縄文土器	縄文時代		
P09	C-7	楕円形	62	56	69		縄文時代		
P10	B-6	楕円形	52	52	14		縄文時代		
P11	C-7	楕円形	48	46	11	縄文土器	縄文時代		
P12	B-7	楕円形	82	74	18	縄文土器	縄文時代		

第 24 表　上前原遺跡第７次調査ピット一覧表（第 60 図）

番号	位置（グリッド）	プラン	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期	重複関係	備考
P13	C-7	楕円形	48	36	14	縄文土器	縄文時代		
P14	C-7	楕円形	35	33	7		縄文時代		
P15	B・C-7	楕円形	35	32	13	縄文土器	縄文時代		
P16	B-7	楕円形	30	28	8		縄文時代		
P17	B-7	楕円形	30	28	10	縄文土器	縄文時代		
P18	B-7	楕円形	32	30	12		縄文時代		
P19	C-8	楕円形	34	30	5		縄文時代		
P20	A-7	楕円形	61	43	17	縄文土器	縄文時代	P21	
P21	A-7	楕円形	80	61	15	縄文土器	縄文時代	P20	
P22	A-7	楕円形	55	51	14	縄文土器	縄文時代	SK02	
P23	B-7	楕円形	45	40	17	縄文土器	縄文時代		
P24	B-7	楕円形	101	51	14	縄文土器	縄文時代		
P25	B-6	楕円形	60	40	8	縄文土器	縄文時代		
P26	C-6	楕円形	40	42	8	縄文土器	縄文時代		
P27	C-6	楕円形	42	35	10	縄文土器	縄文時代		

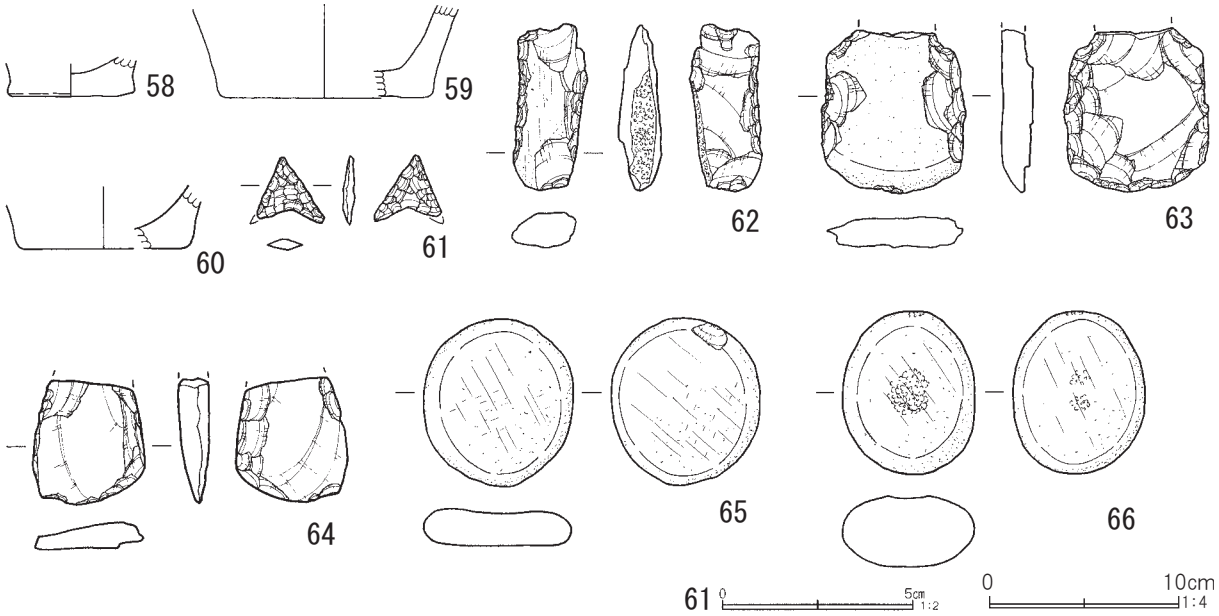


第 61 図　上前原遺跡第７次調査第１・３・６・８・11 ～ 13・15・17・20 ～ 27 号ピット出土遺物

第 25 表　上前原遺跡第７次調査１・３・６・８・11 ～ 13・15・17・20 ～ 27 号ピット出土遺物観察表（第 61 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
P1-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIMN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	条線、内面にスス付着 連弧文系か
P3-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGJM	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部片	
P6-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGIKM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	沈線 称名寺か
P8-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AB	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	破片	磨削縄文か
P11-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AHM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	
P12-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADHM	明褐 7.5YR-5/6	B	底部片	
P13-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	BGIKM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	沈線 称名寺か
P13-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	AHM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	条線 連弧文系か
P15-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIM	淡黄 2.5Y-8/3	B	胴部片	沈線
P15-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	GM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	胴部片	縄文か
P17-1	縄文土器 深鉢	—	(4.9)	(7.2)	AJM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部～ 底部 20 %	縄文か
P20-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	GMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯
P20-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	AM	浅黄橙 10YR-8/4	B	口縁部片	外面：剥落、沈線
P21-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AM	にぶい橙 2.5YR-7/4	B	胴部片	縄文（撚糸文か）
P22-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	BDHMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線文及び刺突文 波状口縁の装飾部分か
P22-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線文、縄文
P23-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	撚糸文か
P24-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABCJM	淡黄 2.5Y-8/3	B	口縁部片	沈線
P24-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	BIM	灰黄 2.5Y-6/2	B	口縁部片	沈線、磨削縄文
P25-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	BM	浅黄橙 10YR-8/4	B	胴部片	沈線
P25-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	GHJM	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	胴部片	沈線、縄文（撚糸か） 被熱により表面剥落
P26-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	BKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文
P26-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	BJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線
P27-1	縄文土器 深鉢	—	—	—	GIM	明褐 7.5YR-5/6	B	胴部片	沈線
P27-2	縄文土器 深鉢	—	—	—	AGJM	橙 5YR-6/8	B	胴部片	口縁に押捺文

第 62 図　上前原遺跡第 7 次調査遺構外出土遺物 (1)



第 63 図　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物 (2)

第 26 表　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物観察表表（第 62・63 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
1	縄文土器 深鉢	—	—	—	AEN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線、縄文
2	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADHM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線、縄文
3	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIKM	淡黄 2.5Y- 8/3	B	口縁部片	
4	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADKM	橙 5YR-6/6	B	口縁部片	沈線、縄文
5	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIM	明黄褐 10YR-7/6	B	口縁部片	
6	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGMN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部片	沈線、縄文
7	縄文土器 深鉢	—	—	—	DM	淡黄 2.5Y- 8/3	B	口縁部片	沈線、縄文、刺突文
8	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGHKM	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	口縁部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺
9	縄文土器 深鉢	—	—	—	DHM	灰黄褐 10YR-6/2	B	口縁部片	沈線
10	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGIM	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	口縁部片	交互刺突文、沈線
11	縄文土器 深鉢	—	—	—	DH	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	口縁部「く」の字状 粘土で刺突
12	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGIKM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	竹管押捺文か 沈線、縄文
13	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADIM	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部片	沈線
14	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHIM	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	口縁部片	刺突文、沈線
15	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部片	沈線、縄文（撚糸文か）
16	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADHIM	赤褐 2.5YR- 4/6	B	口縁部片	口縁部装飾部分
17	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	隆帯、縄文
18	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGHKM	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺
19	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADJ	橙 7.5YR- 6/6	B	口縁部片	沈線 称名寺か

第 26 表　上前原遺跡第 7 次調査遺構外出土遺物観察表表（第 62・63 図）

図版番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　　調	焼成	残存率	備　　考
20	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部片	刺突文、沈線、波状口縁 称名寺か
22	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGHIKM	橙 7.5YR- 6/6	B	口縁部片	波状口縁の把手部分
23	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGKM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺か
24	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGM	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	頸部～ 胴部破片	沈線、竹管爪形文、縄文 加曾利Ｅ
25	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGIM	にぶい褐 7.5YR-6/3	B	胴部片	隆帯、沈線、縄文 加曾利Ｅか
26	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅか
27	縄文土器 深鉢	—	—	—	AHM	外面：橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	隆帯、縄文 加曾利Ｅか
28	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGHIKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	隆帯、縄文 加曾利Ｅか
29	縄文土器 深鉢	—	—	—	DIJ	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、撚糸文 加曾利Ｅ～称名寺
30	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	沈線、充填縄文か 加曾利Ｅ～称名寺
31	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDIKM	灰黄 2.5Y- 6/2	B	胴部片	沈線、縄文
32	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	胴部片	充填縄文（撚糸文）、沈線 称名寺か
33	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文
34	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺
35	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADN	橙 5YR-6/8	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ
36	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部片	隆帯、竹管刺突文
37	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIJKM	橙 5YR-6/6	B	胴部片	沈線、磨削縄文
38	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺
39	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHLM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺か
40	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABM	淡黄 2.5Y- 8/4	B	胴部片	縄文、隆帯上に竹管刺突文
41	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGHN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、縄文
42	縄文土器 深鉢	—	—	—	AIMO	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	胴部片	沈線 加曾利Ｅから称名寺
43	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGIM	灰黄 2.5Y-6/2	B	胴部片	沈線、縄文 加曾利Ｅ～称名寺か
44	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDM	浅黄橙 10YR-8/4	B	胴部片	沈線（竹管沈線）、縄文
45	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHMN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線、刺突文 称名寺２か
46	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABM	黄灰 2.5Y- 6/1	B	胴部片	沈線 加曾利Ｅ～称名寺
47	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHM	明褐 7.5YR- 5/6	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
48	縄文土器 深鉢	—	—	—	HJ	橙 7.5YR- 6/6	B	胴部片	沈線、列点文 称名寺２
49	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABIM	橙 5YR-6/6	B	胴部片	沈線 称名寺か
50	縄文土器 深鉢	—	—	—	DHIJMN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部片	沈線、縄文（撚糸文）

第 26 表　上前原遺跡第７次調査遺構外出土遺物観察表表（第 62・63 図）

図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
51	縄文土器 深鉢	—	—	—	DGIM	褐灰 10YR-5/1	B	胴部片	沈線、磨削縄文 加曾利Ｅか
52	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADGIKM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部片	縄文（撚糸文か）
53	縄文土器 深鉢	—	—	—	DHMN	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	縄文
54	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABGJM	橙 7.5YR-6/6	B	胴部片	無文
55	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABHIKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	沈線 加曾利Ｅ～称名寺
56	縄文土器 深鉢	—	—	—	ABDHM	灰黄褐 10YR-6/2	B	胴部片	
57	縄文土器 深鉢	—	—	—	ADHIKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部片	縄文
58	縄文土器 深鉢	—	(2.0)	6.8	ABEIKM	橙 7.5YR-6/6	B	底部 100％	
59	縄文土器 深鉢	—	(4.9)	(11.0)	ABDJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	底部 25％	
60	縄文土器 深鉢	—	(3.4)	(9.0)	ABDHM	淡黄 2.5Y-8/3	B	底部片	
61	石器 石鏃	最大長 1.8　最大幅 (1.7)　最大厚 0.3　重量 0.5 g							石材：メノウ 脚部一部欠損、凹基無茎鏃
62	石器 打製石斧	最大長 (8.6)　最大幅 7.4　最大厚 1.6　重量 153.5 g							石材：砂岩 上半分欠損
63	石器 打製石斧	最大長 8.7　最大幅 3.8　最大厚 1.8　重量 81.8 g							石材：ホルンフェルス
64	石器 打製石斧	最大長 (6.5)　最大幅 5.9　最大厚 1.4　重量 72.6 g							石材：黒色頁岩 上半分欠損
65	石器 磨石	最大長 8.7　最大幅 7.8　最大厚 1.9　重量 205.0 g							石材：閃緑岩
66	石器 磨石	最大長 8.5　最大幅 6.9　最大厚 3.7　重量 298.0 g							石材：砂岩

４　調査のまとめ

上前原遺跡では、隣接する３箇所を調査した。本調査箇所は、いずれも建築主との事前協議の結果、調査区内に立木が存在し、遺構の判別が難しかった。発掘調査時は、縄文時代中期後半の加曾利Ｅ式期の集落跡との見解であったが、今回改めて精査したところ、加曾利Ｅ期後半～縄文時代後期初頭称名寺期の土器が多く確認され、当時期の集落跡と考えられる。これについて、竪穴建物跡、土坑、埋甕、集石土坑の観点から若干の考察を行っていきたいと思う。

竪穴建物跡は、第６次調査Ｂ区と第７次調査区から合わせて２軒確認されている。いずれも掘込み面が明確に確認できないため、形状・規模は推定である。時期は加曾利Ｅ期後半～称名寺期の土器が多く確認されているため、当時期と考えられる。第６次調査Ｂ区第１号竪穴建物跡は、調査区南壁の礫及び土器の集中箇所を炉と考えられる。このほか推定範囲の一部に硬化面が確認された。時期は、「Ｒ」字状の文様帯や充填縄文、沈線文など称名寺期の土器を多く出土しており、当該期と考えられる。第７次調査第１号竪穴建物跡は、炉とピットのみが検出された。炉は土器を埋設したものである。炉体土器は、無文であるが、縄文時代中期後半後葉～後期初頭と考えられる。ピットはどれも浅く、柱穴と判断できるものは確認できなかった。

土坑は、第６次調査Ａ区では３基、第６次調査Ｂ区では３基、第７次調査区では２基確認されている。今回は、第６次調査Ａ区の第１号土坑を検討する。本遺構は、胴半部から底部にかけての土器が逆位の状態で出土していた。このような状態の出土例は、土壙墓と考えられている。

時期は、胎土や製作方法から縄文時代中期後半後葉～後期初頭のものと考えられる。

埋甕は、第６次調査Ｂ区で１基確認されている。土器の頸部～胴上半部が残存している、割れ口が比較的綺麗なことから、意図的に割って整えたと考えられる。時期は、縄文時代中期後半の加曾利ＥⅡ式と考えており、当調査箇所の中では、古い時期の土器である。ただ、埋甕の用途に、埋葬施設があり、土器の製作時期と時期差が生じることもあるから、今後の検討が必要である。

集石土坑は、第７次調査区で１基確認されている。浅い土坑内に大型の石を５～６個ほど敷き詰めるように出土した。用途は、蒸焼き調理説がある。ただ、今回は、周囲に焼土粒子が散っておらず、石に被熱の痕跡が顕著にみられてはいない。このため、調理用途の他に、集落内に大形の石を確保する目的もあったかもしれない。時期は、縄文時代中期後半後葉～後期初頭と考えられる。

今回の調査では、中期後半後葉～後期初頭にかけての集落が確認されていた。上前原遺跡では、第２次調査と第４次調査でも同時期の遺物・遺構が多く確認されている。当該期の集落を考察するには、本調査箇所の資料では断片的にすぎない。今後の成果に期待したい。

引用・参考文献

江南町教育委員会　1988 年　『本田・東台　上前原』
江南町教育委員会　1996 年　『江南町史　資料編１　考古』
熊谷市教育委員会　2008 年　『箕輪遺跡　上前原遺跡３次、４次』

写　真　図　版

上中条中島遺跡　調査区全景（東から）

上中条中島遺跡　調査区全景（南から）

図版 2

上中条中島遺跡　第１号竪穴建物跡（北から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡上層遺物出土状況（北から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況１（南から）

上中条中島遺跡

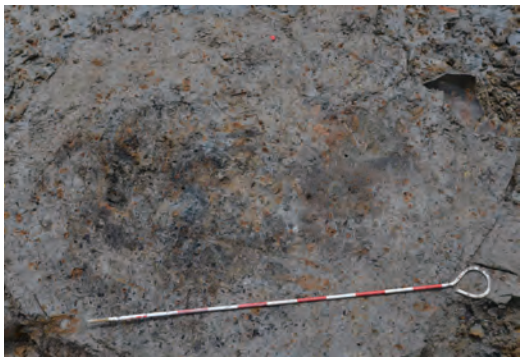
第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況２（北から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡下層遺物出土状況３（東から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡小鍛冶跡検出状況１（東から）



上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡小鍛冶跡検出状況２（北から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡小鍛冶跡遺物出土状況（東から）

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡小鍛冶跡掘り方（東から）

上中条中島遺跡

第２号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）

上中条中島遺跡

第４号竪穴建物跡遺物出土状況１（北から）

上中条中島遺跡

第４号竪穴建物跡遺物出土状況２（北から）

上中条中島遺跡

第５号竪穴建物跡（北から）

図版 4

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡　第８図３

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡　第８図７

上中条中島遺跡

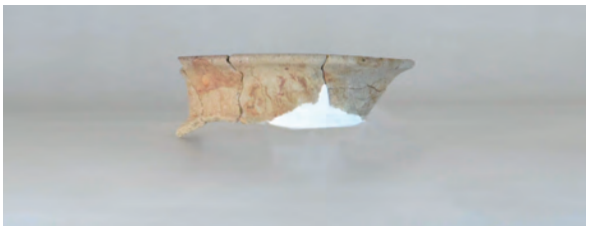
第１号竪穴建物跡　第８図４

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡　第８図 10

上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡　第８図８



上中条中島遺跡

第１号竪穴建物跡　第８図９

上中条中島遺跡

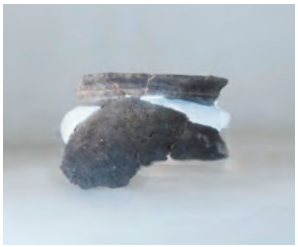
第１号竪穴建物跡　第８図 11

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第９図 17

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第８図１、２、５、６第９図 14 ～ 16、第 11 図 54

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第９図 12

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第９図 13



上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 19

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 20

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 21

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 22

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 34

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 28

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 25

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡
第 10 図 29

図版 6

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 24

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 18

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第８図 32

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 26

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 30

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 31

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 23

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 27

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 36

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 33

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 37

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 35

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 39

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 10 図 38

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡　第 11 図 40

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 42

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 41

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 47

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 43

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 48

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 44

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 45

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 46

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 50

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 49

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 51

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 52

上中条中島遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 11 図 53

図版 8

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 11 図 55 ～ 57

上中条中島遺跡
第１号竪穴建物跡　第 11 図 58 ～ 65

上中条中島遺跡
第２号竪穴建物跡
第 15 図２－１

上中条中島遺跡
第２号竪穴建物跡
第 15 図２－２

上中条中島遺跡
第２号竪穴建物跡
第 15 図２－３

上中条中島遺跡
第２号竪穴建物跡
第 15 図４－１

上中条中島遺跡
第２号竪穴建物跡
第 15 図２－４

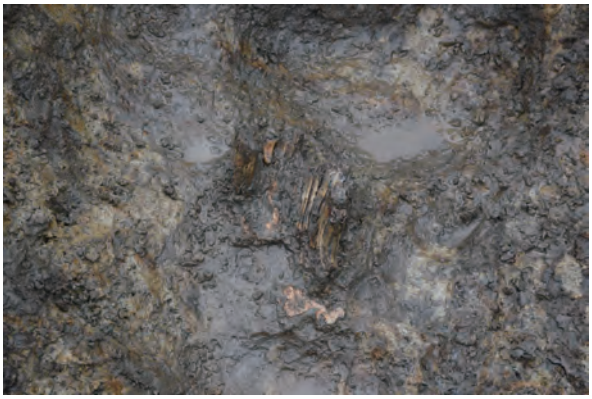
上中条中島遺跡
第４号竪穴建物跡
第 15 図４－５

上中条中島遺跡
第３～５号竪穴建物跡、遺構外
第 15 図３－２、４－２～４、４－６
５－１、外－１、２

諏訪木遺跡　調査区全景（東から）

諏訪木遺跡　第１・３・４号溝跡（東から）

諏訪木遺跡　第２号溝跡（北から）



諏訪木遺跡　第１号溝跡馬歯出土状況（東から）

図版 10

諏訪木遺跡　第１・２号土坑

第 19 図１－１、２、２－１～３

諏訪木遺跡　第１号土坑

第 19 図１－３

諏訪木遺跡　第２号土坑

第 19 図２－４

諏訪木遺跡　第１号溝跡　第 22 図１－１～９、16、17

諏訪木遺跡　第１号溝跡　第 22 図１－ 10 ～ 15

諏訪木遺跡　第１号溝跡　第 22 図１－ 18

諏訪木遺跡　第１号溝跡　第 23 図１－ 19 ～ 30

諏訪木遺跡　第２～５号溝跡

第 24 図２－１～４、３－１、４－１～６、５－１

諏訪木遺跡　第３・４号溝跡

第 24 図３－２、４－７～ 11

諏訪木遺跡　遺構外　第 26 図 1 ～ 12

諏訪木遺跡　遺構外　第 26 図 13 ～ 17

諏訪木遺跡
遺構外
第 26 図 20 ～ 23、26 ～ 28、31、32、34、
36 ～ 38、41 ～ 43

諏訪木遺跡
遺構外　第 27 図 44 ～ 47、49、51

諏訪木遺跡
遺構外　第 27 図 54、55、56 ～ 47、49、59、61

図版 12

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 22

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 24

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 25

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 29

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 30

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 39

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 40

諏訪木遺跡　遺構外

第 26 図 48

諏訪木遺跡　遺構外　第 27 図 53

諏訪木遺跡　遺構外　第 27 図 60

諏訪木遺跡　遺構外

第 27 図 57

諏訪木遺跡　遺構外

第 27 図 58

諏訪木遺跡　遺構外　第 27 図 50

諏訪木遺跡　遺構外

第 28 図 63、64

諏訪木遺跡　遺構外

第 28 図 65

上前原遺跡第６次調査Ａ区
調査区全景　（南東から）

上前原遺跡第６次調査Ａ区
第１号土坑出土状況　（北から）

上前原遺跡第６次調査Ａ区
第１号土坑出土状況　（南から）

図版 14

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
調査区全景　（南西から）

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
第１号竪穴建物跡遺物出土状況
（北西から）

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
第１号埋甕遺物出土状況
（南西から）

上前原遺跡第７次調査　調査区全景　（南から）

上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡　（東から）

上前原遺跡第７次調査
第１号竪穴建物跡炉検出状況　（東から）

上前原遺跡第７次調査
第１号集石土坑　（東から）

図版 16

上前原遺跡第６次調査Ａ区　第１号土坑
第 34 図ＳＫ１－１

上前原遺跡第６次調査Ａ区
第２号土坑、第１・２号ピット
第 34 図ＳＫ２－１、Ｐ１－１、２、Ｐ２－１、２

上前原遺跡第６次調査Ａ区　遺構外
第 35 図 1 ～ 18

上前原遺跡第６次調査Ａ区　遺構外
第 35 図 19 ～ 30、32 ～ 37

上前原遺跡第６次調査Ａ区　遺構外
第 35 図 38 ～ 41、43 ～ 53

上前原遺跡第６次調査Ａ区　遺構外
第 36 図 54 ～ 57

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 39 図１

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 39 図２

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
第１号竪穴建物跡　第 39 図４

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
第１号竪穴建物跡　第 39 図５

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
第１号竪穴建物跡　第 39 図６

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 39 図７～ 20

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 40 図 22 ～ 27

図版 18

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 40 図 28、29、31、32

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号竪穴建物跡
第 40 図 30、33

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１・２号土坑
第 43 図１－１～２－６

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号溝跡
第 44 図１～ 14

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号埋甕
第 46 図１

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１号埋甕
第 46 図２～６

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　第１～４、９号ピット
第 48 図１－１～９－１

上前原遺跡第６次調査Ｂ区
遺構外　第 49 図１～ 15

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　遺構外
第 49 図 16 ～ 32

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　遺構外
第 49 図 33 ～ 45、47

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　遺構外
第 49 図 46、48、49、第 50 図 50 ～ 52、54 ～ 61

上前原遺跡第６次調査Ｂ区　遺構外
第 50 図 62 ～ 70

図版 20

上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡
第 54 図 11

上前原遺跡第７次調査　第１号竪穴建物跡
第 54 図１～ 10

上前原遺跡第７次調査　第１号集石土坑
第 55 図１～７

上前原遺跡第７次調査　第１・２号土坑
第 56 図１－１～２－９

上前原遺跡第７次調査
第１・３・６・８・11～13・15・17・20～27 号ピット
第 61 図１－１～ 27 －２

上前原遺跡第７次調査　遺構外
第 62 図 1 ～ 21

上前原遺跡第７次調査　遺構外
第 62 図 22 ～ 38

上前原遺跡第７次調査　遺構外
第 62 図 39 ～ 57

上前原遺跡第７次調査　遺構外
第 63 図 58 ～ 66

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみちゅうじょうなかじまいせき　すわのきいせき　かみまえはらいせき
書　　名	上中条中島遺跡Ⅱ　諏訪木遺跡Ⅶ　上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ
副　書　名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅸ
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 45 集
編著者名	中山　浩彦　大野　美知子
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所　在　地	〒 360-0107 埼玉県熊谷市千代 329 番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦 2023（令和５）年３月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
かみちゅうじょうなかじまいせき 上中条中島遺跡Ⅱ	くまがやしかみちゅうじょうあざなかじま 熊谷市上中条字中島 463 番 1	11202	59 － 042	36° 10′ 18″	139° 25′ 2″	20160417 ～ 20160526	80.00	記録保存調査
すわのきいせき 諏訪木遺跡Ⅶ	くまがやしにかみのあざあきば 熊谷市上之字秋葉 2885 番 4	11202	59 － 016	36° 9′ 4″	139° 24′ 29″	20200623 ～ 20200811	113.93	
かみまえはらいせき 上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ	くまがやしせんだいあざはぎやまみなみ 熊谷市千代字萩山南 114 番 1、4	11202	65 － 022	36° 7′ 19″	139° 20′ 12″	20190426 ～ 20190625	173.16	
	くまがやしせんだいあざはぎやまみなみ 熊谷市千代字萩山南 114 番 6			36° 7′ 18″	139° 20′ 11″	20200904 ～ 20201016	79.91	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上中条中島遺跡Ⅱ	集落跡	古墳時代	竪穴建物跡　5	土師器　羽口　砥石 鍛冶滓	小鍛冶の痕跡が発見された。
諏訪木遺跡Ⅶ	集落跡	奈良・平安時代 中・近世	土坑　3 溝跡　5 ピット　5	土師器　須恵器　土錘 土師質土器　瓦質土器 陶器　磁器 平瓦　丸瓦　宝篋印塔 板碑　馬歯	中・近世の溝が発見された。
上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ	集落跡	縄文時代	竪穴建物跡　1 土坑　6 溝跡　1 埋甕　1 ピット　20	縄文土器　石鏃　打製石斧 磨石　石皿　石錘	縄文時代中期後半～後期初頭の集落跡が発見された。
		縄文時代	竪穴建物跡　1 土坑　2 集石土坑　1 ピット　27	縄文土器　石鏃　打製石斧 磨石　石皿　石錘	縄文時代中期後半～後期初頭の集落跡が発見された。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第４５集

上中条中島遺跡Ⅱ
諏訪木遺跡Ⅶ
上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅸ－
令和５年３月２４日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／関東図書株式会社

スクマム!クマガヤ

© 熊谷市